

# 水と大地と緑の会

PAGE2050



# 活動の軌跡

1999-2023



次の世代のために  
今私たちにできること

一緒に活動  
しませんか?



水と大地と緑の会

本会は、途上国の農業農村開発を支援するために組織された、NGOです。途上国の農村で、地域の自立のための活動を支援しております。また、本会は経費の公費（一口5千円 振込用紙を添付下さい）で運営されており、事務経費以外は途上国の支援プロジェクトに活用しています。また、併せて書き損じ薬品の収集も行っております。関心のある方は下記の場合まで、連絡ください。

皆様の参加をお待ちしております。

パキスタンの農村開発支援（農村開発）

パロウアイランドの農村開発（農村開発）

タイの子供給食事業（学校給食）

はじめなければ、始まらない。

ネパールの小学校トイレ建設（国際協力機構）

事務局  
〒831-8505 奈良市叶町3-27-204 近畿大学農学部 八住正寛  
Tel: 0742-43-1511, Fax: 0742-43-1559 Email: [info@page2050.jp](mailto:info@page2050.jp)  
東京神楽坂  
〒106-0004 港区新橋5-34-4 農業士大連会 JIBOOK内 伊田 賢 用  
Tel: 03-3434-3831, Fax: 03-3489-0642 Email: [m.thoda@jicra.net.co.jp](mailto:m.thoda@jicra.net.co.jp)  
ホームページ: <http://www1.nwweb.ne.jp/~wb/page2050>

子供たちのために  
今、私たちに  
できること...



Partners of Agri for Green Earth 2050  
Japan 水と大地と緑の会

子供たちのために  
今、私たちに  
できること...



Partners of Agri for Green Earth 2050  
Japan 水と大地と緑の会

2023年12月

英語名のPAGE（Partners of Agri for Green Earth）は貧困や飢餓のない2050年に向けて、人々の連帯と参加によって新しい1ページを開いていくという意味でもあります。

## 「水と大地と緑の会」活動の終わりに

途上国の農業・農村開発に従事した経験を持つ関係者を中心としたNGO「水と大地と緑の会」は1998年11月に発足致して四半世紀あまりが経過しました。この間、仕事としてのODAによる援助だけではなく、会員の参加による草の根レベルでの途上国の農村地域を中心とした村の発展や人づくりに対する支援を目的として活動してまいりました。2018年に会員と申請件数の減少を理由として、2020年3月をもって会の活動を終了する計画でした。しかし、それに合わせるようにコロナの蔓延があり、支援活動の休止を余儀なくされ、ようやく本年3月に最後の支援案件の活動が終了し、本冊子の発行をもって会の活動を終了いたしたいと思います。会員の皆様ならびに関係者の皆様のご協力、ご支援により、これまでに60地区（継続案件で重複あり。また、通し番号上は61地区となっておりますが、アフガニスタンの活動は開始できなかつたため実施は60地区となります）において、活動を実施することができました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

こうして活動を振り返ってみますと、本当に現地の専門家、書記官、協力隊の隊員の方々など、多くの支援、ご協力をいただいたからこそ、支援活動が実施できたものと感じております。また、会員の会費、事業協会・建設協会30周年の寄付、チャリティゴルフ、書き損じはがきなどの協力をいただき、全体で2千万円を超える資金を集めることが出来、その90%は現地の活動支援に充てることが出来ました。長い間会の活動を支えていただいていたことに本当にありがとうございました。 当会による活動への支援は一件当たり最大30万円と限定されている活動でしたが、途上国において30万円の資材や機材はそれなりに使い出があり、また労力などは地域の住民の方々の参画により提供されるため、より大きな効果につながったのではないかと考えます。例えば、学校農園・トイレ・飲料水の整備、地域のため池整備、吊り橋、ミシンの供与、農民訓練、集会所の建設、奨学金・小規模金融など、多種多様な活動を支援することができました。これらの活動は、いわば地元住民や活動実施の主体が一つにまとまる契機となり、事業によっては住民が地方政府に自ら継続事業の申請を行ったり、JICA 草の根協力などのより大きな活動へ展開できた事例も見られました。60地区全体の金額でみても、ODA事業の1地区にも満たない活動ですが、多くの地域に自ら活動するきっかけの種まきができただけではないかと考えております。

設立当初は5年も実施すれば誰か適当な人に引き継げば良いと安易に考えて始めたものの、後継者を育てることもできず、ズルズルと25年が経過してしまった気がします。最初は、右も左もわからない中での活動開始となりましたが、諸先輩のご助言・ご協力を得て、徐々に活動の形を整えることが出来ました。会の運営は委員会を中心として行うこととし、池田實（1998-2003）、池田文雄（2003～）両委員長をはじめ、関係委員（吾郷、植松、大武、荻野、金谷、木村、金蔵、竹内、茨木、原田、保崎、御崎、森本、安村、山本各氏）の皆様に変な御尽力をいただき、何とか活動を継続することが出来ました。心より感謝申し上げます。

本冊子において各支援地区の概要を紹介しております。今後の支援活動を計画する際の参考になれば幸いです。なお、2020年3月時点での繰り越し31.3万円余りがありましたが、最終報告書（20部）の印刷費と海外農業開発コンサルタント協会への寄付といたしました。

事務局 八丁

これまで（1999-2022）の支援プロジェクト実績

No	年次	プロジェクト所在地	目的	内容	実施体制*	P
1	1999	タイ	学童実習支援	学校農園整備	a 斉藤	
2	1999	バングラディッシュ	稲作普及支援	小規模灌漑	a 天野	
3	1999	フィリピン・ミンダナオ島	水利組合支援	自転車の供与	a 細山田	
4	1999	タンザニア・モシ県	学習支援	学校トイレ建設	A 里見	
5	1999	パキスタン・ファイサラバード	環境修復	塩害地営農・訓練	b 安野	
6	2000	フィリピン・ベンゲット州	生活支援	つり橋/ミシン供与	A 竹内	
7	2000	タイ・スリム県	学童実習支援	学校農園整備	A 神谷	
8	2000	パキスタン・アトック郡	農業インフラ	小規模ため池井戸	A 清水	
9	2000	フィリピン・イロイロ島	生活支援	飲料水施設整備	A 竹内	
10	2000	パラグアイ・ヒラル南部	農村インフラ	橋梁/道路整備	A 村山	
11	2000	バングラ・ダッカ市	中学生奨学基金	基金の金利で運営	斉藤	
12	2000	タンザニア・モシ県	農業インフラ	小規模水路建設	A 宇野	
13	2000	パキスタン/ファイサラバード	村落社会開発	農民訓練・婦人裁縫	b 安野	
14	2001	ガーナ国オチェレコ村	教育環境整備	小学校屋根床修理	A 榊	
15	2001	フィリピン・レイテ州	村落社会開発	多目的集会所建設	A 竹内	
16	2002	フィリピン・ベンゲット州	生活支援	ミシン、機織機	A 竹内	
17	2002	フィリピン・ベンゲット	村落インフラ	村落/学校簡易水道	A 竹内	
18	2002	マリ国ママグブー村	営農インフラ	灌漑用井戸建設	カラ	
19	2002	ラオス国シエンクアーン郡	農民職業訓練	養蚕/染色指導	cIV-J	
20	2002	パキスタン・ラワールピンディ	農業インフラ	小規模溜池・井戸	A 清水	
21	2003	バングラ・キシヨルゴンジ	中学生奨学基金	小規模金融	C 上潟口	
22	2003	フィリピン国ヌエバエシハ州	営農生活支援	信託金融基金	b 小澤	
23	2003	ボリビア国クスレ市	村落緑化支援	苗木供与研修教材	C 吾郷	
24	2003	ボリビア国コチャバンバ	農業インフラ	小規模灌漑	d 小林	
25	2004	ボリビア国ヤンバラエス町	村落緑化支援	苗木・研修教材	d 古賀	
26	2004	ボリビア国ヨタラ町	村落緑化支援	種苗供与	d 松岡	
27	2004	マリ国ママグブー村	インフラ整備	灌漑用井戸建設	b カラ	
28	2004	カンボジア国ルセサ小学校	学童支援	学校ドア・窓補修	b 日韓	
29	2004	ラオス国シエンクアーン郡	農民職業訓練	養蚕/色技術指導	b IV-J	
30	2004	ガンビア・上流州	技術向上支援	教材/文献供与	A 平田	
31	2005	スリランカ・コロombo	水質調査	資材供与	W-net	
32	2005	ボリビア・コチャバンバ	保育所栄養	ビニールハウス	d 松平	
33	2006	ボリビア・チュキサカ	識字教育	ソーラーパネル	d 村上	
34	2006	ボリビア・チュキサカ	安全な水の供給	井戸、水道	d 福間	
35	2006	ボリビア・プレスト	所得向上	ミシン、裁縫訓練	b 四野見	
36	2007	アフガニスタン・バーミアン	復興、農業インフラ	灌漑水路修復	c 團	中止

No	年次	プロジェクト所在地	目的	内容	実施体制*
37	2007	ボリビア・プレスト	所得向上	編み物、家庭菜園	d 筒井
38	2007	バングラ・シャリアットプール	所得向上	ミシン、裁縫訓練	b 菅谷
39	2008	パラグアイ・パラグアリ	環境改善	改良かまど	b.松原
40	2008	モンゴル・ウブルハンガイ	安全な水の供給	井戸の修復、研修	b 松本
41	2009	ホンジュラス・4 県	生産向上、収入	点滴、養蜂、女性	c 吾郷
42	2009	モンゴル・ウブルハンガイ 2	安全な水の供給	井戸の修復、研修	b 松本
43	2009	ボリビア・プレスト村	所得向上	洋裁、女性 G	a 四野見
44	2010	ホンジュラス・5 県	所得向上	野菜栽培	c 吾郷
45	2010	モンゴル・ウブルハンガイ 3	安全な水の供給	井戸の修復、研修	b 松本
46	2011	ボリビア・チュキサカ県	組合強化、収入	加工施設、研修	b 四野見
47	2011	ラオス・ビエンチャン	能力向上	訓練施設	b IV-JAP
48	2012	ラオス・ビエンチャン	能力向上	学校圃場整備-1	a.飽津
49	2013	ラオス・シェンクワン県	能力向上	教室増設	b IV-JAP
50	2013	ラオス・ビエンチャン	能力向上	学校圃場整備-2	a.飽津
51	2013	フィリピン・レイテ州	生活改善	育児施設	a.河原
52	2014	タイ・パヤオ県	就学支援、収入	学校養魚施設整備	c .八丁
53	2014	フィリピン・イロイロ州	生活改善	施設修復	a.河原
54	2015	ブータン	農業インフラ	ため池整備	a.園城
55	2016	カンボジア	技術普及	ため池整備技術	b .浜野
56	2017	カンボジア	生活改善	ため池改修	a.佐藤
57	2017	ブータン	生活改善	給水システム	b .園城
58	2018	カンボジア	技術普及	ため池整備・普及	b .濱野
59	2018	タイ チェンマイ県	就学支援・栄養	学校農場・施設	b.奥井
60	2019	ブータン	生活改善	給水システム	b .園城
61	2020	ネパール	農業インフラ	ビニールハウス	b .浜野

\*注 a: PMの直接実施 b: PMが監理(申請/モニタリング等)を行い現地邦人NGOが  
 監督する。C: PMが監理を行いローカルのNGOが監督する D: 会員が監査し特例のPM(青  
 年海外協力隊員等)が監督する

タイ: 4, バングラ 4, フィリピン 9, モンゴル 3, パキスタン 4, ラオス 6, カンボジア 4,  
 ブータン 3, ネパール 1, スリランカ 1, パラグアイ 2, ボリビア 11, ホンジュラス 2, タ  
 ンザニア 2, ガーナ 1, マリ 2, ガンビア 1 (アフガニスタン 1)

みなさまのご支援により  
 小さいながらも、60 地区の支援(アフガニスタンは現地情勢悪化のため  
 中止)が完了しました。本当にありがとうございました。



## 実施支援事業の概要

### No.1 バン・ナム・トアム小学校における農園整備プロジェクト

#### ～1999年完了、タイ国（東北タイ）～(斉藤専門家)

このプロジェクトでは、学校農園内の池まで水を引くための灌漑施設の建設に対して支援を行いました。資金は主に資材費として使用し、生徒たちの父母により工事を施工しました。農園では生徒たちが野菜・果樹園作り、家禽・牛・ナマズなどの飼育を行っています。収穫物は同校の給食に用いられる予定です。



父母の協力によるパイプの敷設

完成した排水用タンク

生徒の書いた絵

#### 生徒による感想文-1: カノクワン カントー (小4 女子)

私達の村ではほとんどの人たちは農業をやっています。私の父も母も米を作っています。毎年4月になると雨が降り、お米がたくさんとれます。しかし、時には雨が少ししか降らないため、私の家族や村の人達が食べるのに十分なお米がとれない時もあります。ある日の朝、先生が日本のNGOの人達が10万バーツ以上の資金を出してくれることになり、農園でいろいろな農業ができるようになることと話してくれました。先生はこのお金でプラスチックパイプ、ポンプ、スプリンクラー、ゴムホースなどを買い話しました。学校ではジュンルン川からパイプで水を引いて、学校の池に入れ、この水で魚を飼ったり野菜を作ることになりました。先生は、パイプを土に埋める工事をするのに父兄の人に手伝って欲しいと言われました。各クラスでそれぞれに野菜をつくり、栽培コンテストを行うことになりました。先生と生徒で土地を耕し、クラスごとに分けていろいろな野菜を作ります。生徒は水をやり、草を取り、害虫を取り、肥料をやるのが仕事です。私達はこれまで小川から毎日農園まで水を運んでいました。今は水運びはしなくてもよくなりました。水はタンクからパイプを通して農園まで流れてきます。私達は野菜畑にスプリンクラーで水がかかるのをすばらしいと思っています。

#### 生徒による感想文-2: マンリ マラタナ (中1女子)

農業という言葉は私が学校に入学して以来、私に深く関わっています。先生は何時も作物を作るための機具の使い方や土の耕し方を教えてくれたからです。私達は学校の用務員の人々が牛を使って農園を何時時間もかかって耕すのを見ている。私達も畑を耕すのを手伝います。生徒達は家から苗や種を学校に持ってきて植えたのですが、全然芽が出ませんでした。私達は毎日農園の世話をします。野菜に水をやるための水運びが毎日の一番大変な仕事でした。しかし、新しい灌漑施設ができて楽に多くの作物を作れるようになりました。プロジェクトにより大きく変化しました。新しい技術を使えば、あまり時間をか

けなくとも、野菜だけではなく、牛を飼ったり色々な農業ができます。私達はこのような変化を嬉しくまた誇りに思っています。もっと重要な事は全ての野菜が農薬を使わないで作られ、学校給食に使われる事です。皆が喜んでます。

## No.2 バングラデッシュにおける稲作技術普及・改善プロジェクト（小規模灌漑）

### ～1999年完了・現地NGO：グラン・バングラとの協力～

**背景：**バングラデッシュの NGO（グラン・バングラ）ではかんがいと日本の稲の品種導入により収量の向上と貧困からの脱却を目的とした活動を行っております。しかし、かんがいを行うためのポンプおよび関連施設を整備する費用がなく、農民への普及を目的とした展示圃場（タンガリ地区：ダッカの北約70km）が整備不能となっております。かんがいシステムおよびポンプの設置に関する費用を支援し、農民の稲作技術およびかんがい技術の向上に貢献できればと考えます。



灌漑のない地域



伝統的灌漑法



地域の学校

### 成果の報告（西松建設（株）進 允）

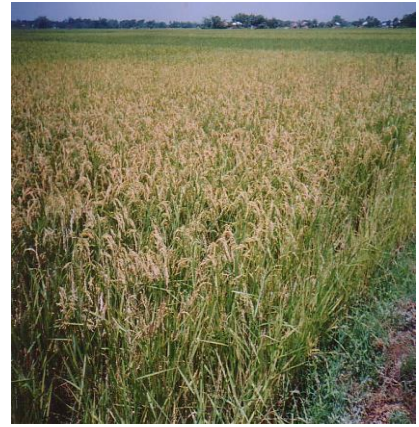
バングラデッシュ国の NGO の 1 つである、Gram bangla Dr. S.I.Khan の要請により今回のプロジェクトを実施した。実施カ所は首都ダッカ市 70km に位置する Tangail 県 Bashail 郡 Kanchanpur 村で、ポンプ灌漑用のポンプ機材及据え付け、ポンプハウスの建設、灌漑水路の整備等である。予算は US\$3,000.00 で Dr. S.I.Khan の下、Md. Zlamgir Hossain の管理で周辺地域の住民ボランティアとして協力し施工及圃場の運営を行った。私が現地を訪問した時期は 70%程稲刈りが終了していた。現地責任者 Md. Zlamgir Hossain の話ではもみの成育は大変よく今回は十分な成果があったと話している。私が今回見たカ所は Gram Bangla の NGO 組織の人々の作業であり、当然周辺農民にも十分は裨益を与えている。特にこの地域はポンプに頼らずに灌漑出は出来ない。裨益人口 3000 人ではあるが、このプロジェクトは十分な成果が上がったと現地で実感した。また周辺住民の協力的な農作業には感心するとともに、収穫量が上がり豊になると子供たちに顔がこれほど朗らかに変わるものと思わなかった。 Dr. S.I.Khan より、今年度も美味しいひとめぼれの新米が獲れたから、差し上げますと言われ、日本米の懐かしい私には快い響きであった。



天野氏による、支援金の贈呈。



ポンプ場から吐き出される水



たわわに実る秋田小町

### No.3 水利組合 自転車支援

#### ～1999年完了、フィリピン・ミンダナオ島～

フィリピンの支援事業として、ミンダナオ島のアグサン・デル・ノルテ州の水利組合の活動支援のための、自転車 70 台の贈呈が 2000 年 1 月 22 日に実施されました。



自転車の贈呈式(左端：細山田氏)



水と大地と緑の会に贈られた感謝状



自転車全体



自転車の前に整列した関係者

会場には、今度自転車を受け取る水利組合の代表をはじめ、N I A 管区局長関係所長、水利組合育成担当者等、約 40 名が参集され、各スピーチの中では、フィリピンでも当地は遠方であり、過去政府、外国からの支援が少ない地にこういった心暖まる支援は極めて水利組合活動に活力を与えるという声

がありました。とにかく支援というと大規模事業が先行する中で、水利組合に対する支援という新たな活動が始まったことに非常に感謝していました。

自転車の配分は、地域灌漑組合連合会の会議（1月11日ブターン市で開催）で決定されました。

ババガボ灌漑組合 20台 スリガオ南部灌漑組合、スリガオ北部灌漑組合、アグサン南部灌漑組合、アグサン北部灌漑組合、アンダナン灌漑システム、カバドバラン灌漑システム、ギボング灌漑組合、灌漑組合連合、タゴ灌漑システム 各5台

小さな支援が大きな輪につながるよう、今後も見守っていきたいと思います。細山田専門家のほうでも自転車の活用やメンテナンスについてもモニタリングを約束してくれましたし、N I A（国家灌漑庁）のほうでも支援を表明してもらっています。

#### No.4 住血吸虫対策支援プロジェクト(1999年支援開始、2000年10月完了)：

タンザニアのローアモシ地区で実施した水田開発プロジェクトは、日本の技術協力の成功事例の一つとされ、アフリカの大地に日本の稲作技術がしっかりと根付いております。しかし、プロジェクトの周辺では、伝統的に住血吸虫の問題が地域の住民を苦しめております。水を介して人に入ったセイカリアが便とともに排出され、再び他の人に感染し住血吸虫となります。住血吸虫予防のためにはトイレを建設し、セイカリアの水への移動→人への感染といったサイクルを切ってしまう必要があります。このため、チェケレニ小学校（生徒数1、140名、職員30名ですが、既設のトイレは10年前に建設された10室（必要数は46室）のみ）に少しでも多くのトイレを建設し、住血吸虫の問題が改善されればと開始されました。

##### 現地のKATC 里見 義則専門家より

「チェケレニ小学校のトイレ建設工事は2000年10月27日に終了し譲渡式を終えました。(中略)…現地の反応等はメッセージ等を見て頂ければ分かると思います。私の感想としては地元の期待を裏切らないよう、また、日本の恥さらしはしない様努力したつもりです。できれば、せめて100万円ぐらいの協力が出来れば幸いです、現実には厳しい日本の状況を考えるとやも得ないでしょう。何はともあれ、立派な建築物が出来ました。これに関わった我々の専門家の皆さん、そして建設工事に関わった関係者に敬意を述べたいと思います。」（現地からの声に詳しく報告）



トイレの基礎建設中



完成したトイレと手洗い場

##### 感謝の書簡

主賓(正式招待客)、そしてすべての参加者の皆様、ようこそこ小学校へお越し下さいました。親、学校の委員会、生徒と教員を代表し、我々は最新型の新しいトイレを受け取ることに感謝の意を表す。



ここに集まったことは大きな喜びである。

ここの小学校の生徒は 1,282 名、男 602 名、女 680 名です。この大人数の生徒の要求を適えるには、技術的に 52 個の便器が必要です。しかし、生活の厳しい状態と教育費の値上りから、親は我々の要求であるトイレ建設が出来ない状態です。このような状態で、学校は、これまで 10 個の便器だけであった。今日、最新型の新しい便器 9 個が出来、感謝しなければならない。

我々は、我々の問題に気づき、建設を決心してくれた我らの友人である日本からの NGO、水と大地と緑の会に感謝の意を表す。今日、正式にトイレを受け取りました。

同様に、この困難な建設に参加してくれた全ての人々に感謝の意を表さねばなりません。また、この建設の状態と財産の大きな仕事を監督した里見氏に感謝の意を表す。彼こそが、詳細な仕事の説明が出来た。普通の人間だと出来なかったであろう。彼は、問題が発生したとき、この仕事の重要性知り、生徒に対する愛情で心を奮い立たせた。人間は、反芻動物のように繰り返す、汚れは無くならない。この建設において、我々の弱さを許してほしい。

我々はこのトイレ建設に対し感謝する。生徒と家族全体の健康が継続されるように敵である大きな病気と戦っている。我々は、このトイレを管理し、最高の状態で清潔に使用することを約束する。また、我々は皆様の前で、トイレの建築だけではなく、このトイレの清掃のために頂いたバケツ、ホウキ、コップなどの備品も管理することを約束する。

最後に、あなた方が疲労しないことを願う。なぜなら、我々の問題は多く、生徒数に比較し教室、机とイスが不足している。どこへ行っても忘れないことを願う。あなたがたの援助の重要性と良好な関係を認識しているので言う事はないが、一つだけ、我々の感謝の証明を受け取るようお願いする。

#### 贈呈を記念して送られた詩

1. チェケレニ村へようこそ。

お互い奉仕することがチェケレニ村のモットーである。  
病気を防止することがチェケレニ村のモットーである。  
水と大地と緑の会、ありがとう。

2. 我々のお客さん、チェケレニ村へようこそ。

待ちかねた日が来た。  
日本人協力者に祝福を。  
水と大地と緑の会、ありがとう。

3. 日本の NGO がチェケレニ村に来た。

我々を思い、我々のために計画した。  
頑丈なトイレ建設を計画した。  
水と大地と緑の会、ありがとう。

4. 最初の協力者は日本人。

チェケレニ村の小学生を検査した。  
90%に住血吸虫が広がった。  
水と大地と緑の会、ありがとう。



トイレと一緒に整備した手洗い場



関係者によるテープカット(中央が里見専門家)

(中略)

6.我々の喜び、我々の約束は

トイレを清潔に使うこと

きれいな環境の維持

水と大地と緑の会、ありがとう。…。(中略)

13.ありがとう、ありがとう、里見さんは我らの父だ。

日本の NGO、大きくなるよう神に祈る。

別の問題も考慮し、我々を救ってくれ。

水と大地と緑の会、ありがとう。

14.チェケレニ小学校の生徒は約束する。

トイレはきれいに使う。

5年後も今のままきれいだ。

水と大地と緑の会、ありがとう。



関係者一同と（中央が里見専門家）

### 生徒からの感謝状（一部を抜粋）

MARIAEZEKIEL

私は、日本の NGO に対し、住血吸虫、寄生虫、十二指腸虫を防止するための現代的なトイレを建設してくれたことに感謝する。私自身、建設に携わった里見氏に感謝する。私や他の生徒は病気を防止するためトイレを管理することを約束する。私達は毎日清掃し、ごみを無くす。私達は、里見氏から受け取った現在の状態を維持することを約束する。日本の NGO に対し、食堂(カマド)の援助もお願いしたい。先生と生徒の食事を作る事に問題がある。生徒の靴も援助してほしい。見たとおり、生徒の多くは靴を履いていない。最後に日本の NGO に神のご加護をお祈りする。ありがとう。

PATRICEBAZIL

私たちはこのような援助をしてくれた日本人に心から感謝する。見たこともないすばらしいトイレにとっても感激をしている。この援助をしてくれたすべての日本人に感謝する。私たちは、寄生虫、十二指腸虫などの不潔さから起きる病気を防ぐため、きれいに管理することを約束する。



生徒による感謝状の朗読



生徒のダンス

THABITI

我々の学校はまず、日本人に感謝する。以前は、1つのトイレを争いあって使用していた。我々はトイレをきれいに管理し、病気を予防することを約束する。病気はコレラ、住血吸虫、その他の病気であ

る。我々はトイレをきれいに管理する。十二指腸虫、寄生虫、住血吸虫などを防止する。我々の健康を守る。教室を増やして欲しい、なぜなら教室が狭いから。多くの教室の窓はひび割れ、倒れ掛かっている。あなた方の援助に感謝する。

日本語訳:岡田 秀雄(JICA 専門家、稲作組合育成指導)

## No.5 塩害農地修復支援プロジェクト (1999 年開始、2000 年も継続)

パキスタンでは、乾燥地域における不適切なかんがいや耕作方法により塩害が拡大し地域の農業生産が徐々に低下しており、貧困問題に拍車がかかっております。2000 年は地域で利用可能な塩害対策や営農技術を農民の所へ普及するため、現地のキサーンドース (KDRSS) という NGO と協力して地域の農民に対する普及活動への支援を行いました。大学や試験場の技術者に農民への普及を直接行ってもらいました。加えて、近隣の若い世代のための情報教育を目的として、中古のパソコンを 3 台購入し、完成した農民学校 (日本の草の根無償援助による) に配置し、2001 年から開始する情報教育に活用してもらうこととなっています。(担当: 八丁氏および安野氏、現地 NGO キサーンドース: リーダー アムジャッド氏)



完成した農民学校



農民のための研修風景 (農民学校にて)

### ①パキスタン塩害修復モデル農場



1998 年 活動開始前の展示圃場と塩類集積



2002 年 2 月 塩害修復技術適用後: 小麦

## No.6 フィリピン国ベンゲット州 (2000 年支援活動、完了済み)

ベンゲット州パップ集落では雨期の出水により集落周辺の小溪流河川の水位が上昇するが、これを横断する橋がないために児童の通学や農家の耕作地への通行に重大な障害となっておりました。そこで、

このプロジェクトでは必要な材料の提供を受けてこれを用い自ら必要な役務労力を動員して歩道橋の整備を行いました。



完成した吊り橋歩道橋



ATOK村婦人会のリーダー（中央が竹内専門家）

一方、現在約800人の会員を抱え、織物や縫製などの手芸生産活動の振興による地域活性化を目指しているアトック婦人協会に電動ミシンの導入と農家婦人を対象にミシンによる縫製技能と手芸技術等についての研修を実施しました。これにより地域の特徴を生かした産品を育成し家庭経済の貢献を目指しています。

ベンゲット州の州知事より感謝状（2000年9月13日付）

「この場を借りて、ベンゲット州の Atok 女性グループおよび Pappa 村のバランガイカウンシルに代わり、貴会からの「農村生活向上プログラム」への支援に対し、感謝の意を表します。

Atok 郡の農村女性は女性の技術訓練に大きな利益を受けるでしょうし、Sablan の Pappa では Pappa の吊橋の建設により安全な通行を行うことが可能となることでしょう。ベンゲットの州政府も、このプログラムが成功するよう支援を惜しまないつもりです。本当にありがとうございました。」

Raul M. Molintas （ベンゲット州 知事）

この中で Sablan 村の Pappa 集落では全長約11Mもある吊り橋の架け替えを行うものです。一方の Atok 村では婦人会の農村婦人の縫製技術研修プログラムに対して5台のミシンと研修教材を提供するという大変欲張った内容となりました。中でも「吊り橋」に関してはその工事費は約14万円と通知されましたがあまりに低いので果たしてこれで完成できるのか内心では心配しておりました。これらの支援事業については平成12年9月12日にベンゲット州の知事の下に関係者に参集していただきまして当方から「水と大地と緑の会」の設立の経緯と活動の概要を報告し当該年度の案件としてベンゲット州の案件が採択されたことを伝えその場で事業の実施にかかる確認書に署名をしました。これに続いて支援を受けることが決定した Sablan 村の Pappa 集落と Atok 村の婦人会の代表からは日本の皆様方からの心温まるご支援に対して深い感謝の意が示されました。

これに基づいてマニラに帰った後に当方から実施機関である Pappa 集落と Atok 婦人会に各々5万4000Pesoと7万5000Pesoを送金しました。これを基に実施機関である Pappa 集落と Atok 婦人会では直ちに事業に取り掛かり、Pappa 集落の吊り橋は11月末に完成し、更に同じ時期に Atok 婦人会の5台のミシンも納入が完了しているとの報告がありました。確認検査は12月の中旬に小生がベンゲット州まで出向き実施いたしました。吊り橋の架橋地点は国道から約500mほど山奥に入った小さな谷を横断する地点です。添付した写真に示す如く Pappa 集落では古い吊り橋が新しく架け替えられており現地からの帰途にその吊り橋へと向かう周辺集落の母子の姿を見た時には素直に良かったなーと感じた次第です。もう一方の Atok 婦人会への農村婦人縫製技術研修プログラムの支援案件は翌日に現地に出

向きました。Atok 村へはバギオから車で約3時間かかります。途中耕して天に到る段々畑に圧倒されます。当日村では特別に議会が召集されこの中で「水と大地と緑の会」から5台のミシンが提供されたことが Jonny 村長から報告され日本の皆様方からの支援に対する感謝動議が決議されました。5台のミシンは Atok 婦人会の研修室に設置され早速利用されておりました。



Atok 婦人会に送られたミシン



Atok 村の段々畑

今回実施した2つの案件とも山間の集落での地道な活動に対する支援でした。日本からみれば30万円という金額は小額で大したことは出来ませんがここベンゲット州ではこれが如何に効果的な働きを出来るのかを思い知らされました。最後に両方の事業の実施状況を報告した折にモリントス知事から日本の水と大地と緑の会の皆様からの協力に対しまして重ねて感謝の意が示されたことを記します。

## No.7 タイ国ノンサワン村立学校農園整備事業（2000年開始、2001年3月23日完了）

タイ国では、本年度も昨年に引き続き学校農園の整備の支援を行いました。対象はスリン県サムロンタップ郡ノンサワン村立学校で、コーケウ地域の幼稚園児、小中学校生が学んでいます。会の支援により野菜畑の整備、池の整備、鳥小屋の整備等（資材の提供）を行いました。有機農法や複合農業に関する理解を深めるとともに、生産された農畜水産物を学校の給食に供給することにより生徒たちの栄養水準を改善できるだけでなく、生産物の販売により学校の施設整備等の収入を確保することが可能となりました。（担当：タイ国 神谷専門家）



工事中の養殖池（2m x 4m、5池）



水源地とポンプ施設



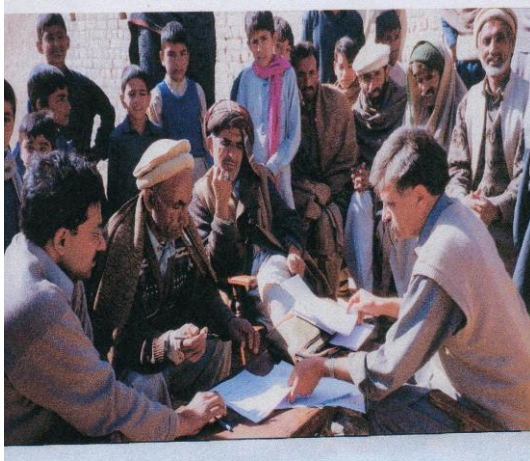
整備された養鶏場と生徒（中央が神谷専門家）



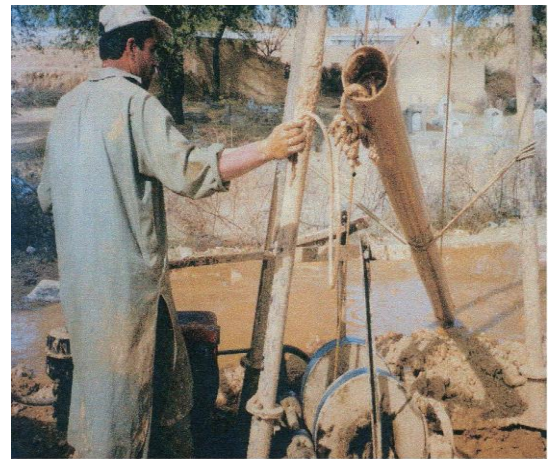
整備された野菜園で実習

## No.8 集落小池改修整備プロジェクト（2000年開始、2001年完了、清水専門家）

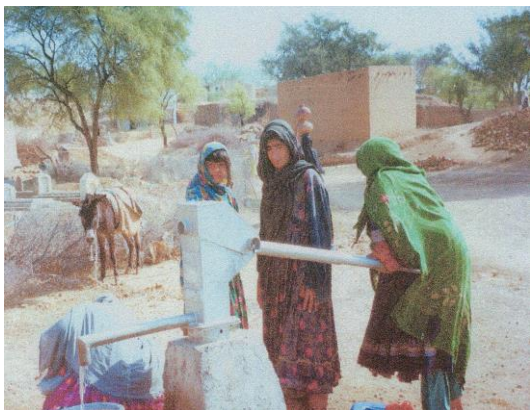
パキスタンパンジャブ州北部アットク郡の村でのプロジェクトは、既存集落小池の改修・拡大を行って年間水源利用可能量を増大させ、地域の生産性・収益性の安定向上を目指すとともに、ハンドポンプ、オープン井戸を設置した。当初は2村での改修や井戸掘削を考えていたが、マンガアル村の工事費が予算を超過したため、2村目は残念することとなった。



調印式（村の代表と活動の事務局担当）

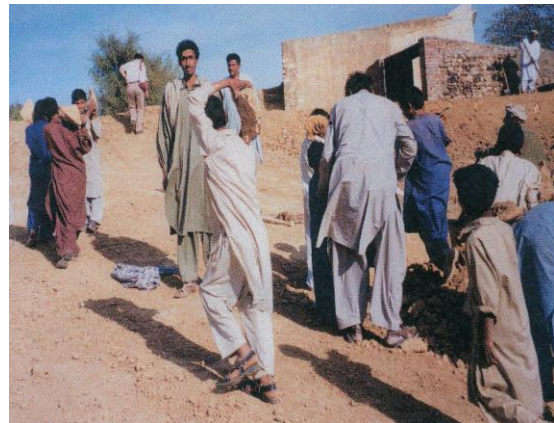


井戸の掘削（25mの掘削で水が出たところ）



近傍の女性による井戸の利用

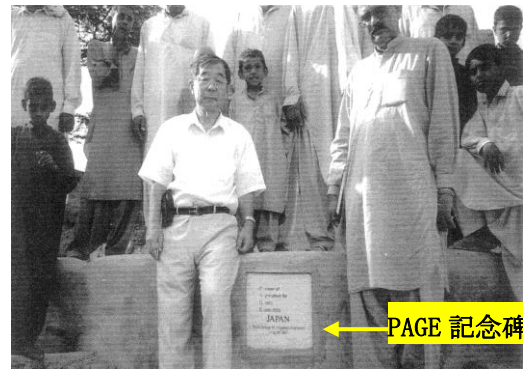
- 2 km離れたアフガン難民の女性たちも利用-



住民参加によるため池の整備



完成した溜池（水牛が水を飲んでいる）



完成後PAGEの記念碑の前で（清水専門家）

パキスタンパンジャブ州北部アットク郡の村でのプロジェクトは、既存集落小池の改修・拡大を行って年間水源利用可能量を増大させ、地域の生産性・収益性の安定向上を目指すものであります。また、村民広場整備、オープン井戸の改修、小学校にハンドポンプを新設するなど村民の生活・福祉の向上を図ることとしております。（ホームページに詳しく掲載）

### No.9. フィリピン：イロイロ州共同水洗い場整備支援（2000年支援開始）

フィリピンにおいて貧困地域にあたるイロイロ島ニュールセナ町は生活環境基盤の整備、とりわけ農村の給水施設の整備が大きく取り残されており、生活用水の確保は地域住民の日常生活の安定と健康の維持に大きな負担となっております。そのため、このプロジェクトでは生活用水確保のための「共同井戸」の拡張とそこへアクセスするための「階段歩道」の整備を行いました。その際、地域住民の直接的な参加のもとに彼らの自助努力によって農村生活環境基盤の整備を目指し、完成後にあってもこれを適切に維持管理し着実な発展が継続できる自立可能な農村社会の育成を支援します。

フィリピンにおいて貧困地域にあたるイロイロ島ニュールセナ町は生活環境基盤の整備、とりわけ農村の給水施設の整備が大きく取り残されており、生活用水の確保は地域住民の日常生活の安定と健康の維持に大きな負担となっております。そのため、このプロジェクトでは生活用水確保のための「共同井戸」の拡張とそこへアクセスするための「階段歩道」の整備を行いました。その際、地域住民の直接的な参加のもとに彼らの自助努力によって農村生活環境基盤の整備を目指し、完成後にあってもこれを適切に維持管理し着実な発展が継続できる自立可能な農村社会の育成を支援します。



感謝状の贈呈  
(Page 2050、土地提供者、功労者)

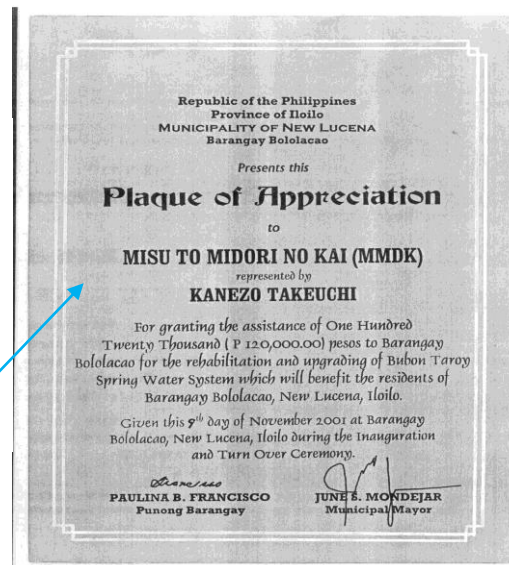
完成した共同水洗い場（ボララカオ集落）





完成を祝うボララカオ  
集落住民

水と大地と緑の会に送  
られた感謝状

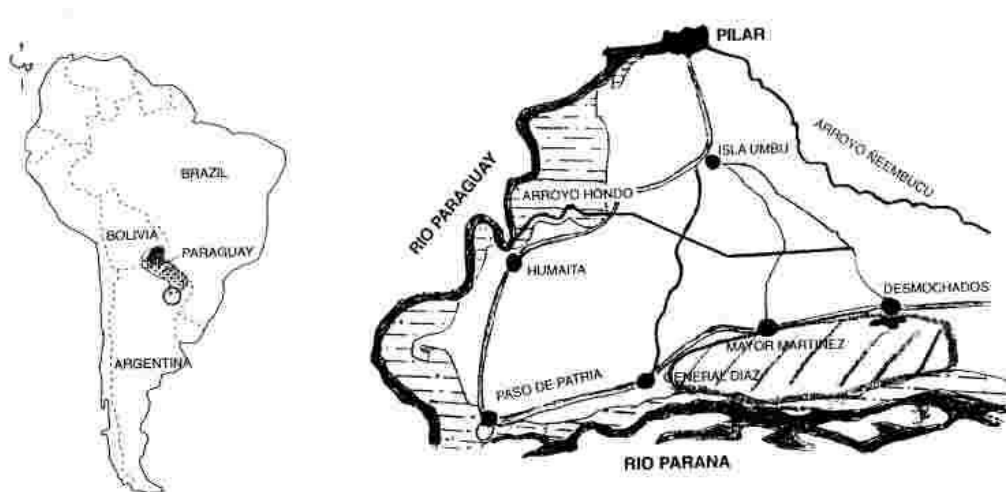


## No.10 橋と暗渠の建設資材支援 (2000年開始 2001年完了、実施中) パラグアイ・ピラール南部

パラグアイ国での排水路整備、道路整備に伴い、橋や暗渠の不足が生活に不便をきたしているため、建設資材(セメント、砂利等)として30万円相当を支援しました。(ピラール南部地域農村開発計画のリーダー村山 忠一氏が、支援の監督)

### 事業の概要：橋と暗渠の建設資材支援

南米のほぼ中央に位置するパラグアイは、日本とほぼ同じ面積(41万km<sup>2</sup>)に470万人しかいない農牧畜と林業を主体とする農業国です。パラグアイのピラール地域では、長期にわたって湛水している湿地帯に排水路を掘削し、排水改良によって農業農村開発を行うためのピラール南部農村開発プロジェクトが実施されています。排水改良や道路整備によって、新たに数千haの農地が作り出され、また地域住民の生活環境も改善されました。



パラグアイとピラールの位置図



一方で排水路整備、道路工事に伴い、通学や生活に利用する端や暗渠の不足が発生し、生活に不便をきたしております。このため道路や橋の建設資材（セメント、砂利等）として 30 万円相当を支援しました。（ピラール南部地域 村山専門家）



工事の状況



完成した橋

## No.11 バングラデッシュ：ダッカ市ゴマイル中学校奨学金支援(2001 年支援開始)

バングラデッシュ、ダッカ市ゴマイル中学校の学生への奨学金基金として、その利子（年約 8%：1 万 1 千タカ）を奨学金として、7 学年から 10 学年の生徒、各学年 2 名合計 8 名に給付する事業。ただし、利子の増減に応じて給付の人員を増減する予定であった。その後、斎藤専門家の急な帰国もあり、現在以下のような状況となっている。（斎藤専門家の 4 月 14 日付けメール）

1) . 斎藤前専門家のダッカ在任中に、「水と大地と緑の会」から、ゴマリ中学校に奨学金を送るプロジェクトが承認され、2001 年 8 月 18 日に契約を締結した。

4 月 1 日にゴマイル中学校を訪問した。今回は、2 口目の奨学金口座開設を申請に必要な実態調査のために、学校管理委員会委員長のブイヤン氏と、昨年の 9 月以来学校を訪問し、校長先生や奨学生と面談した。7 学年時から 10 学年時の 4 学年の試験結果 1 番と 2 番（2 番以内に比較的裕福な生徒がいる場合は 3 番）の各 2 名、計 8 名が奨学生となっている。バングラディッシュの学期は 1 月から 12 月までの暦年になっており、1 月に進級試験があって、今回は昨年と異なった奨学生達（中には 2 年続けて奨学生になった生徒も）に会うことが出来た。最も話題を呼んだのは、第 8 学年の試験成績が 1 番になって新しく奨学生になった女子生徒で、昨年は 11 番からがんばって 1 番になったということだった。2003 年現在、第 6 学年から第 10 学年まで、それぞれ 205 人、116 人、102 人、85 人、60 人、合計 568 名の中で奨学生は 8 名と厳しい。もう一口奨学生口座が増えれば、第 7 学年時から各学年 4 名ずつ、計 16 名となり、生徒たちの進級に向けた競争心も高まるので、学校としては大歓迎ということであった。奨学金制度は毎年契約を更新することになっており、今年は昨年の木村書記官に代わって筆者が今年の運営について、新たにこの 4 月に更新契約を交わすことになっている。また、先日満期を迎えたため、木村書記官の署名で今期 3 か月分の奨学金が支払われた。

昨年 9 月に訪問したときには各学級に照明設備がなく、暗い中で授業を受ける不便性を指摘されたが、5 ヶ月前に学校設立当初から協力を得ているライオンズクラブから寄付があり、各教室と職員室に蛍光灯の照明設備がつき、各学級とも授業を受けている生徒たちの表情が明るく「教室が明るくなってとっ

でも良くなった」と皆喜んでいたので印象的だった。（報告：上潟口専門家）



教室に蛍光灯  
設置



1 件目の奨学生

## No.12 タンザニア国： モシ県チェケレニ ウエル ウエル 伝統的灌漑プロジェクト

(2001年承認、2003年9月完了)

タンザニア国キリマンジャロ州モシ県に属するこの地域の水不足の解消を図り、安定的収量増加を支援しました。このプロジェクトでは村評議会による経済、開発、社会福祉などの諸活動や女性問題解決のための活動を行い、研修・普及・村の連携による営農支援体制強化を図るべく活動を実施中です。



整備予定の土水路



圃場内の水路状況

候補案件の発掘や事業の実施までの市町村の実施機関との連絡調整にはベンゲット州のモリントス知事はじめ州政府の関係者から全面的な協力を頂きました。こうした努力のおかげで今回はベンゲット州内から2種類の事業を最終的に支援案件として決定しました。

モシ県のチェケレニ・ウエル・ウエルの小規模灌漑水路整備では、当会の支援だけでは資金が不足する事が明確となり、草の根無償資金を導入し一体的に整備を実施した。また、農民の水管理に関する訓練、水質調査などが実施された。現地では、資金を生かして水路の整備、研修等が実施され、水路の漏水が解消されるなど、村人に非常に喜ばれていたことを申し添えます。（報告：宇野 弘氏）



事業実施前



整備された幹線水路



農民参加による掘削

## No.13 村落社会開発支援プロジェクト～2000年、パキスタン・ファイサラバード～

パキスタンでは、乾燥地域における不適切なかんがいや耕作方法により塩害が拡大し地域の農業生産が徐々に低下しており、貧困問題に拍車がかかっている。この支援活動（No.5の継続）は2年目を迎え2000年は地域で利用可能な塩害対策や営農技術を農民の所への普及活動への支援を行った。塩害で白くなっていた農地が、修復技術の適用により十分な収穫を上げられるようになり、展示圃場の効果も上がっている。さらに、EM菌用の発酵水層を整備し、地域の有機物資源の有効利用を図ることとした。加えて、農村女性自立のための裁縫、手芸の教室も新しい取り組みとして開始した。（担当：八丁氏および安野氏、現地 NGO キサーンドース：リーダー アムジャッド氏）



農民学校での栽培技術研修



塩害を受けた展示圃場での米の収穫



修復技術を用いたわわに実った稲



EM菌活用堆肥層の建設



農村部の女性に対する支援：裁縫教室

塩害で白くなっていた農地が、修復技術の適用により十分な収穫を上げられるようになり、展示圃場

の効果も上がっている。さらに、EM 菌用の発酵水層を整備し、地域の有機物資源の有効利用を図ることとした。加えて、農村女性自立のための裁縫、手芸の教室も 2001 年からの新しい取り組みとして開始した。（担当：八丁氏および安野氏、現地 NGO キサーンドース：リーダー アムジャッド氏）

#### No.14 ガーナ国、オチェレコ地域小学校修復支援(首都アクラより車で3時間)

ガーナ国では、日本の ODA で小規模灌漑施設が整備され、水田稲作、水管理に関する技術協力が実施されている。しかし、プロジェクトのオチェレコ地域に隣接する小学校は、屋根が壊れ、床もコンクリートが損傷するなど、十分な教育を実施できない状況にある。このため、屋根、床などの教育施設改修のための材料を中心とした支援を行うこととした。（2001 年案件）



学校の全景(学校とは思えない)



教室の屋根の破損状況



教室の内部



修復中の教室の壁と屋根

現地の榊専門家より(メールの報告)「教室一つの修復のはずが、なんと、教室2つと職員室が修復になっていました。私は、ずっと今回30万円(2300ドル)の援助は、教室一室の修復だけだと思っており、大分前に見に行った時に、全部の壁が新しくなっていたので、他からの援助があったのだと思っていました。ところが、久しぶりに会った校長から、話をよく聞くと、一つの教室の壁を壊したら、他の壁も壊れたから、トライしてみた。と、言っていました。そこで、まず、今までの領収書を出させ、内容をチェックしてみました。もちろん、あのお金で、全部できる訳ありません。まったく、困ったものです。それでも、壁のモルタルとペンキと数枚の屋根材料が足りませんでした。お金にすると、あと、5百50万セディ(約720ドル)程度足りないということになりました。

現在、新学期も始まり、児童は、外の木影で授業を受けていました。雨季にも入りちょっと可哀そう

です。先々週（私が、あまりに文句を言うもので、明日に、残りの資金について、運営委員会（酋長、議員さん、校長、PTA）が開かれるそうです。…やられたと、不満を、プロジェクトの専門家にもらしていたら、専門家達が少しずつ協力してくれることになりましたので、資金の事は心配なくなりましたが、少し、彼らに苦勞させようと、校長にはどうするんだ、どうするんだと脅かしつづけています。それでも、来週には、お金を持って行ってやろうと思います。（5月23日メールより）

「予算の超過分は、浄財が集まりましたので、それで対応しました。事務局にはお金の件では迷惑をかけなくて済みました。本日、校長と銀行に行ってお金を預けてきました。土曜日から、工事再開するそうです。予定では、完成まであと2週間と言う所です。」（5月30日メールより）

## No.15 フィリピン レイテ島カプドウルサン集落生活基盤支援(2001年支援開始、2002年完了)

フィリピン共和国レイテ州マッカーサー町カプドウルサン集落 農村集落多目的センター建設支援

カプドウルサン集落はその総戸数が98戸の小規模な集落であり1戸あたり平均5人の家族構成であるのでその総人口は約500人である。集落の社会基盤施設も未整備でありこうしたジリ貧の状況を脱出する起爆剤として地域住民の一体感を醸成させることが模索されており、その意味からも住民の参加による今回の多目的農村センターの建設が不可欠である。このため、集落の農家の参加により多目的農村集落センター（床面積30平方メートル）を建設し、これにより地域住民の生活環境の向上に資することを目的とするものである。支援により多目的センターの建設に必要な資材を購入し、その一方で集落の農家が無償により労働力を提供してセンターの建設を行うものである。活動実施により完成された多目的センターでは農村生活者のレクリエーション事業、職業訓練事業、更には農村婦人の生活改善活動に利用されこれにより地域農家の生活の向上と地域の生活共同体としてのまとまりのある豊かな農村集落を形成されることが期待されている。

カプドウルサン集落は本案件の申請に際して集落の定例会議に付され全員一致でこれを決議しこれを町長が確認した後マニラの小生のところに決議書と事業提案書の提出がなされておりその熱意は強い。これまでのフィリピンの同種事業の実施経験から市町村の支援によるバラングイへの協力はそのリーダーや組織などの問題はない。（報告：竹内専門家）



完成した多目的農村センター



センターの外観



会のロゴが壁に張られる

No.16 フィリピンベンゲット州カバヤン村 農村婦人会伝統工芸（手織物）育成支援プログラム（2002年～完了）

No.17 フィリピン・カパンガン村 学校および村落給水道設備支援（2002年～完了）

カパンガン村の郊外にある泉から水を取り寄せ、コンクリートの水槽に一時的に貯水してから排水を行っている。当会は、取水設備と学校に設置した水タンク及びそれに関する配管工事に対して支援を実施した。水タンクは、写真で見える学校の左側に設置されており、水源から配水されている。当会が支援してくれるまでは、写真のような水道の栓をひねったからといって水が潤沢に出てきたわけではない。水が潤沢に出るようになったおかげで学校の便所が使用できるようになった。また、この水の恩恵を受けているのは、学校だけではなく、周辺の部落の人たちの生活にも役立っている。



学校敷地内の水道



学校の全景



完成したタンク



既存の水槽



感謝記念額贈呈



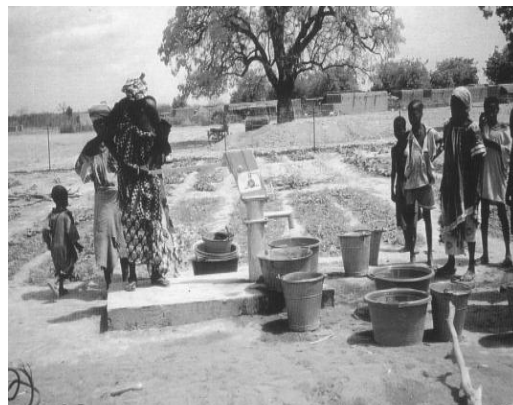
支援されたパイプ

給水栓から水が届けられるように整備されたおかげで学校での生活環境が大幅に改善され、更に学校に留まらず周辺の部落の人たちの生活にも役立っている。

No.18 マリ共和国：ママブグー村井戸掘り支援（2002年支援開始、2003年5月完了）

近年の年間降雨量の減少に伴い、農作物の生産量が減少し食料不足が生じている。これは、特に幼い子供や赤ん坊に影響が現れ、発育が遅れており、今後は、さらにこの状況が増すことが予想される。生育期の子供たちに十分なビタミン、ミネラルを取り入れた食生活への改善が急がれるなか、家族の食生活を司る主婦たちは、野菜栽培を行い食生活の改善を希望しているが、栽培に必要な水の不足、栽培技

術の未熟さがあり、これをカバーするために半永久的に涸れない水を得て栽培技術の指導を行う必要がある。本プロジェクトでは、食糧不足の補給や、子供の順調な成育のための食生活改善を目的とし、井戸の設置と野菜栽培技術の指導が行われている。本会からは、約 1/2 h a の野菜園開設のため、井戸設置に必要なポンプヘッドおよび必要な資材の支援を行った。井戸の掘削および手押しポンプの設置により 65 人の女性が参加して野菜栽培が行われており、栄養改善や、収入の増大などの効果が期待されている。（報告：カラ＝西アフリカ農村自立協会）



設置された手押しポンプ（PAGE2050 のロゴマークがポンプに貼り付けられている）

## No. 19 ラオス国：シェンクアーン県養蚕・自然染色研修会（2003 年支援開始・完了）

近年ラオス絹糸は、世界でも注目されてきているが、絹糸はほとんどベトナムから輸入し、農家で生産するのは自家用の少量だけであった。伝統的な自然染色はすたれ、簡単な化学染色が主になりつつある。しかし、国政的にはラオスで生産された糸を手で紡ぎ、自然染色された糸で手織りしたものがラオス産の伝統織物として高く評価されている。シェンクアーン県のような辺境の地では、産業も少なく、既に村民が保持している伝統工芸の織物の技術を生かせば、収入向上につながり、村民の生活も豊かになる。そこで、国際ボランティアの会のナーパーセンターに 4ヶ村の意欲ある村民代表 30 人を対象に養蚕と自然染色の講習を実施する。農家が新しい養蚕の知識と技術を見に付け、市場で売れるものを生産したり、自然染色を学び実施することで付加価値の高い糸を生産・販売し、経済的自立を達成することを目的とする。

研修は 1 月 19 日～23 日に行い、内容は桑栽培（桑の選別方法・栽培の年間スケジュール・土壌の創り方など）及び養蚕（飼育方法・必要な道具類）について行い、自然染色の方法の基礎知識、緞織りについても研修を行った。また、養蚕・自然染色の先進村（サム村、シェンケオ村）へのスタディツアーも行った。（報告：国際協力 NGO・IV-JAPAN）



修了式



染色材料の用意



桑を実際に植える



染色作業



先進村の養蚕の見学

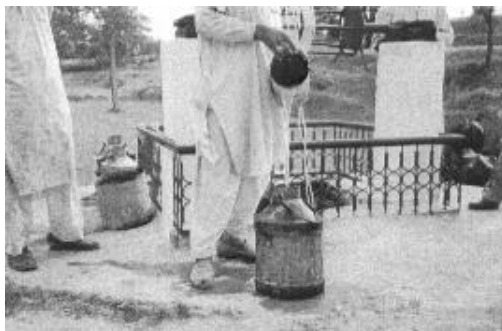


支援金で設置した井戸とポンプ

評価として、参加者は桑栽培、養蚕についてよく理解した。身近な材料で染色ができることを学び、今後の生活向上に繋げていける。スタディツアーは良い刺激になった。という意見が見られた。しかし、課題として遠方からの参加者が少なかったこと・識字率が低いため、研修内容を記録するのが困難であったことが挙げられる。また、シエンクアーン県は現在も渡航延期勧告が解除されていないため、JICA 専門家の楠瀬氏、農水省の高嶋氏によるモニタリングができないでいる。

## No.20 パキスタン国：パンジャブ州モリ村農村整備事業（2002 年支援開始・2003 年完了）

ラワルピンディ郡モリ村において、村池の改修・既存手汲みポンプの改良・ハンドポンプの新設・村池集水地域の圃場の農地保全・保育園にブランコの設置・モスクの枯渇している井戸の改良を行った。



汲み上げポンプ



保育園に設置したブランコ

事業効果として、池の貯水量の増加と水・土壌保全工事により池の集水機能・池への土壌流入が改善された。集水域の水・土壌保全工事の効果を云々するには早すぎるが、近くの農業試験場の成果を農民は知っており、期待している。手汲み井戸は水量も増加し、汲み上げが安全で容易になった。さらに、ブランコは管理の観点から保育園内に設置したが、喜ばれている。延長した任期の 10 月 23 日には事業は完了せず、以後は近くにある食料・農業・畜産省国立農業試験場のファテジャン試験地スタッフに事業管理を依頼した。（報告：清水真幸専門家）

## No. 21 バングラデシュ国：パクンディア中等部奨学金制度（2003 年支援開始）

キシヨルゴンジ県パクンディア中学校は首都ダッカから北北西に約 80 k m の農村県にあり、そこは洪水期に約 3 ヶ月も湖のように冠水したままになる低平地域が広がる。支援は、過去に行ったバングラディッシュ国ダッカ市ゴマイル中学校奨学金（2001 年支援開始、2002 年完了・継続的に利子で運営）と同様の利子による奨学金を第 6-10 学年の貧困環境にある優秀な生徒 10 名に支援する（各生徒毎月 100



タカー約 190 円ーの支援)。預金金利で運用できるため継続的な活動が可能であり、農村部の中等教育における就学率の向上（ドロップアウトの減少）に貢献が可能である。

この支援活動は、バングラディッシュで2件目の奨学金であり、銀行利子で継続的運営が可能であり、人材の育成という観点からも良い事業と考える。（報告：上潟口芳隆専門家）

## No.22 フィリピン：ヌエバエシハ州信託投資事業支援（2003年支援開始、実施中）

「日本ヌエバエシハ・ファンデーション（JNF）」に、総額30万円を Revolving Fund として、零細農民に対する融資事業に信託投資する。JNF は、融資に先立ち事業計画の審査・指導を行うなど、融資への信用を確保する。農家一戸あたりの融資額は1万ペソ（約2万7千円）を限度とする短期融資とする。JNF は、支援事業への投資契約時の立会い、あるいは個別融資事業の進捗状況の視察など、受益者と当会の会員との交流について便宜を供与する。本プロジェクトは、ヌエバエシハ州の人々に対して福祉、保険、医療、教育などの活動を通じて支援すること、および企画するに本書団体に対して情報の提供と活動の支援を行うことにより、日本とフィリピン・ヌエバエシハ州の人々との交友親善を深めることを目的とする。（小澤専門家）



JNFのある集会に来賓として招かれた時の記念写真（前列中央が木村氏）。

## No.23 ボリビア国：スクレ市周辺地域植林事業（2003年支援開始・完了）

スクレ地方を含むボリビアの半乾燥地では、自然資源は収奪的に利用されていることから山はほとんど禿山となり、激しい土壌浸食が発生している。第三者から見ると禿山に植林をすれば良いことと簡単に考えるが、実際には難しい社会問題が潜んでいる。本地域における植林することではなく、植林に家畜から木を保護することである。植林されている土地は、たとえ他人の土地であっても家畜に草を食べさせる「自由放牧」の習慣があり、これらの問題を解決して持続的な農村開発をすすめるよう、緑資源機構は1999年から2003年の自然資源保護の意識改革が進められてきた。その結果農民の意識が変わってきたが、緑資源機構の植林事業は従来から実施されてきたようなタダでの苗供給ではなく、20%の地元負担金を取って実施されてきたことから、資金の乏しい農民は100本程度しか植林することができなかった。このことから、現地農民に「水と緑と大地の会」から、集落の最も貧しい農民に対して10%の地元負担金で植林ができるように支援を行った。（報告：吾郷秀雄 専門家）



支援金で買った苗木と植林作業

### 受益農民の声

- 今年は緑資源公団のプロジェクトが終了・撤退したので、植林ができなかったと思っていたが、今回「水と緑と大地の会」から苗木代金の90%を支援してもらい植林することができたのでほんとにありがたい。「水と緑と大地の会」の会員から方々に心から感謝いたします。
- 負担金が10%になって大いに助かった。貧困農民にはなかなか現金で支払えないため、ほとんどが労賃もしくは穀物で支払っている昔は家畜の被害が怖くて植林できなかったが、緑資源機構の支援により植林の重要性を理解することができ、また「集落の社会コントロール」ができるようになったため、家畜の被害を恐れることなく植林することができた。

## No.24 ボリビア国：No.24 コチャバンバ県アンサルドの小規模灌漑：

3つの堰、灌漑水路および貯水タンクの建設に対して、材料費、運搬費の支援。2003年支援開始、2004年完了

ボリビアの農村部での貧困は深刻で1999年国立統計院の調査によると全農村人口の81.7%が貧困の状況にある。生産性においても南米諸国中、最も低い水準、具体的に言えば南米諸国平均収穫量の四～六割であり、この10年間で生産性の向上がほとんど見られない。この生産性を阻害している大きな要因の一つが生産基盤の遅れ、つまり灌漑システム整備の遅れである。また、この地域では降水量も少なく地形的な条件、つまり傾斜が激しい地形的条件のためせっかく雨が降っても大切な水が土と一緒に一気に下流へと流れさってしまう。このためこの貴重な水をいかに確保するかがアンデス渓谷地帯の農業において重要な課題となる。今回支援していただいたことにより、これまで資金不足で滞っていた小規

模管理を再開することができました。『本当に必要なところに必要な支援』をしていただいたことは、支援が必要な人々への自立支援につながるものであると確信しております。本当にありがとうございました。



完成した堰と水路



貯水タンク



ロバでの水の運搬の必要がなくなる

### 村人の声

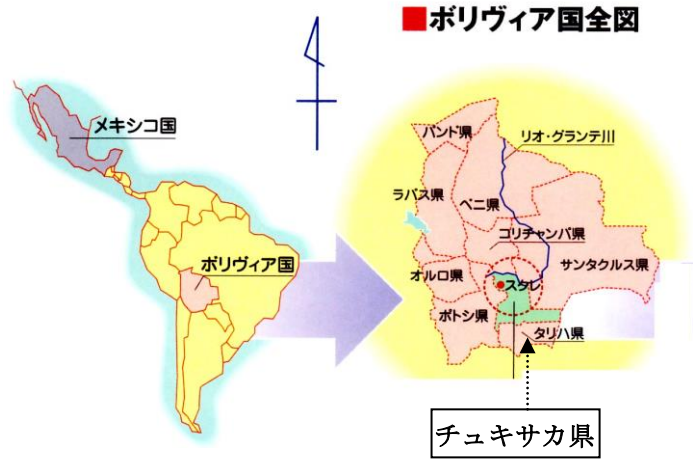
- ・ これまではロバを使って家から片道 1 時間かかる場所の水溜りから水を運んでいた。その量は農業をするために十分ではなく、天水に頼った農業をしていた。そのため、以前から灌漑を待ち望んでいた。今、こうして灌漑ができるようになったことを本当に感謝している。
- ・ 小規模灌漑は私たち農民にとってなくてはならないものです。これでこれからの農業は改善されます。みんなで管理を行い大切にに使わせていただきます。
- ・ 私が住んでいるところの近くに小さい水の流れがあり、これを溜めることができれば生活が大きく改善されるとずっと思っていた。まさか私たちの住んでいる不便な場所にこのような小規模灌漑を支援してくれ、本当に嬉しい。（担当者・報告：小林 かおり）

## No.25 ボリビア国：チュキサカ県タラワンカ村・パタヤフタ村緑化活動

（2004 年支援開始・同年完了 農村緑化支援）

チュキサカ県は年間平均降水量がいちじるしく低く、ヤンパラエス郡も特に乾季には慢性的な水不足という問題を抱えている。そこに半乾燥地と高い標高という厳しい自然環境にあり、農作物の生産性は極めて低く、住民の暮らしは安定しない。また、農作物の収穫後は家畜を誰の土地にでも放牧できる「自由放牧」の習慣があり、これが植林のための大きな制限要因にもなっている。この過放牧や薪炭林の過剰伐採などの問題により土壌の侵食も激化している。これは多くに、村民の自然に対する知識不足が起因しているとも考えられる。

村民の参加意識とオーナーシップ意識を助長するために、受益者負担として単純労働の提供と苗木購入費の 10%現金で負担してもらい、植林を行った。ボリビアの村民は単純労働をあまり負担と考えない傾向にあり、結果プロジェクトが効果を発揮しなくても自分の事として捉えない事がある。反対に、現金を支払う事にはかなりの抵抗があり、そこに必然的な責任感が表れるはずである。



タラワンカ村周辺 2004年7月撮影

このような植林実施という実質的なプロジェクトを行う事で、住民の意識改革の前進と、村の緑化、将来的な農作物生産向上、他の村への意識改革普及に貢献できたと考える。(担当者・報告：古賀 未央)

## No.26 ボリビア国：ヨタラ市緑いっぱい運動2004 (2004年支援開始)

ヨタラ町では、薪を利用しながら釜を使い、名物であるパンを作るため、ヨタラ町の山から緑がなくなるまえに、子供たちに植林運動を通じて、緑の大切さを学んで欲しいと思っていた。また、これはボリビア全域で見られるが、ゴミを道端に捨てる習慣がある。それも、それぞれの学校の前にあるプラサの花植え、水やり、清掃作業を分担することにより、環境教育、および美化衛生意識を高めていくことがねらいである。



競技場周辺



広場の状況

プロジェクトの主な活動は、土壌侵食を防ぐための植林活動、コミュニティーにおける農林活動の改善、土着の木々の植林活動、生徒の意識改革授業の実施である。活動実施により期待される効果は地盤侵食を防ぐことが出来る、子供たちの環境への意識が高まる、生徒たちが、分担して作業を行うことにより、責任感・協調性を養うことが出来る、植林の知識を得た子供たちが、自分の村でそれを広め、2重3重の効果が期待できる、町の美化により、観光のアピールポイントが増える可能性も期待している。

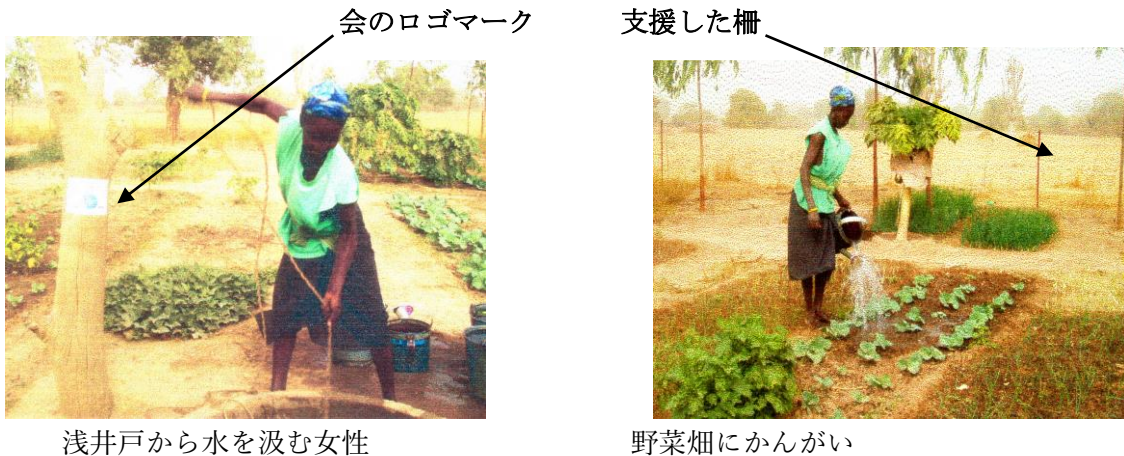
(担当者・報告：松岡瑠理子)

## No.27 マリ共和国： ウエニャン村 野菜園造成事業（2004年10月～2005年3月）

（手掘り浅井戸掘削、家畜避け金網防護柵 300mの材料費支援）

今回の事業は井戸の掘削から始まり、家畜避けの防護柵の資材購入から始まりました。井戸の完成は予定より2ヶ月遅れ、家畜避けの防護柵もほぼ同時期に完成し、事業はすべて終了しました。

ウエニャン村では女性野菜園自主管理委員会が発足し、カラ＝西アフリカ農村自立協会のスタッフのバンバ・ケイタの指導で女性たちが野菜栽培を行うようになりました。現在ではキャベツ・タマネギ栽培が主で、区画の隅ではパイアが栽培されています。現在参加者は75人ですが、さらに多くが参加を希望しており、栽培する野菜の品種も増やしていく予定にあります。



浅井戸から水を汲む女性

野菜畑にかんがい

ウエニャン村の普通の食生活はトウジンビエを粉にして作られるトウと言われる団子状のものに、パオバブの葉、オクラの粉を入れたソースをつけて食べるのが通常の食事でした。しかし、この頃はキャベツやタマネギ等の野菜が使われ、子供たちは野菜類をたくさん食べるようになった事が母親から報告されました。このように、多くの月に野菜が栽培可能で食糧不足の補給や子供の順調な成育のための食生活改善となっています。これまでの例では女性委員会では食生活改善のみならず、販売収入の一部を蓄え共通の資金として小規模資金を貸付したり、穀物銀行を開設しています。ウエニャン村の女性たちも同様の成果をあげるとおもわれます。（報告：カラ 村上 一枝）

## No.28 カンボジア国：ルセイサン小学校設備改良事業（2004年支援開始・同年完了）

ルセイサン小学校は、学校が所在するプラッカー村と、日韓アジア基金が基礎教育プロジェクト対象地区としているアンロンコン・タマイ村から約400名の児童が通う公立小学校である。コンクリート製の校舎2棟（3教室1棟、5教室1棟）を有するが、比較的新しい5教室からなる校舎は、ドア、窓の多くが破損、欠損の状況にあったため、これを修復して、1年を通して効率的な授業が行える様になるとともに学校のセキュリティを向上させた。

### ルセイサン小学校校長、教師、児童より

これまで私たちの学校は窓とドアが壊れてなくなっていたため、雨季は雨が吹き込みために机や教室が濡れ、授業を中断することが度々ありました。教師、児童にとっては学校に来ることも大変なのですが、勉強することも困難だったのです。また、強い日差しが差し込むことも大きな悩みの種でした。ま

た、（安全面での不安のため）教材や書類などを教室に置いておくことができませんでした。こうした問題は、児童の出席率を低下させる原因にもなっていました。



修復されたドア



修復された窓



当会のロゴの提示

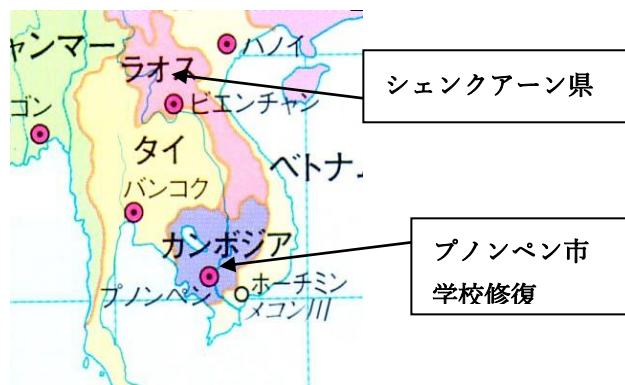
この度、水と大地と緑の会様の助成に拠る、日韓アジア基金の事業が行われ、私たちは非常に喜んでおります。授業内容もよくなり、子どもたちの出席状況も次第によくなって来ています。窓とドアが入ったことで、学校の景観もよくなり、教材の収納も可能になりました。雨季が来ても、授業の進行に支障が出なくなると皆期待しています。新しい窓とドアを取り付けていただいたことに対して、学校職員と児童を代表しまして、校長である私から皆様に感謝の意をお伝えしたいと思います。（担当者：日韓アジア基金 代表 江本）

## No.29 ラオス国： コメ銀行、家畜銀行プロジェクト（2004年開始、同年終了）

ラオス北部のシェンクアーン県は交通アクセスの不便な山岳地域に位置し、LLDCのラオスにあっても最貧困県に指定されていて、貧困改善に対する取り組みの強化が求められている地域です。この地域での持続的な経済開発には豚や鶏といった家畜飼育や果樹栽培が有望視されており、交通が不便な状況を考えると畜産開発は国連などからも推奨されています。しかしながら伝統的な家畜飼育を経済活動に発展させるためには、技術的な支援と初期投資に対する支援、開発が軌道に乗るまでのつなぎ資金の手当てが必要とされています。このため、地域にコメを低利で融通する仕組みとしてコメ銀行を創設し、住民の相互扶助により一時的コメ不足に陥った農民に安心してコメを借りられる体制を作ります。同時に狭い農地しかない農民でもコメ購入資金を稼げるように家畜飼育を促進普及させるため、家畜貸し出しを行う家畜銀行も創設します。つまり、短期的生活資金不足をコメ銀行で支援し、長期的な生活資金の柱のひとつとして畜産開発を支援するために家畜銀行を設立するものです。これらの初期資金を調達するために水と大地とみどりの会の資金が使われました。

コメ銀行の設立に向けて対象3ヵ村でワークショップを開催し、その意義や目的を村人に理解させるよう努めました。その上でコメ銀行の会員を募ります。会員はコメ銀行にそれぞれ20Kgを出資します。会員からの出資では不足するコメは水と大地とみどりの会の資金で購入しました。保管のためのコメ倉庫も住民参加で作りました。今回のIV-JAPANのコメ銀行、家畜銀行は、ラオスの貧困地域での農村開発の実験事業として極めて興味深い試みをしています。コメ銀行、家畜銀行ともにまだ始まったばかりで、5年後、10年後にどのような結果になっているか予断を許しませんが、各地のコメ銀行の進め方を調べたり、畜産専門家による調査、技術指導を踏まえたり、職業訓練プロジェクト以来のカウンターパートであるシェンクアーン県の学校制度外教育局と密接な協力の下に進めたりと、周到に準備されてい

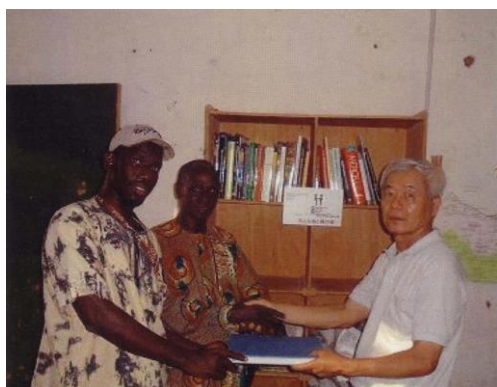
るとの印象を受けました。長期的に定点観測を続けていけば、さまざまな知見が得られるのではないかと期待させるものがあります。（報告：内海 晋、実施：IV-JAPAN）



ラオス・コメ銀行の活動状況

### No.30 ガンビア国：能力強化のための図書資料供与(2004-2005) (担当・報告：平田 四郎)

ガンビア川上流地域農村開発調査のカウンターパート機関である州農業事務所は比較的有能で意欲のある人材を置いているが、予算不足から資料・参考書の類はほとんど所持していない。そのため彼らには新しい知識が入りにくく、技術水準が停滞している。このため、現地技術者の技術水準向上のため、野菜栽培、稲作栽培、畜産に関連した学術図書の供与を行う。この活動は、2005年11月に図書資料の購入・供与を終了している。担当していただいた、平田専門家からは、以下のメモが寄せられています。「予算が少なく参考書もほとんどない事務所なので、両所長とも今回の学術図書の供与を大変喜んでいました。知識に飢えている面があるので、有効利用されることは間違いありません。個人が独占することなく、必要な人には誰でも利用でき、かつ、きちんと管理するよう約束を取り付けています。調査団としても、調査に加え事業を行ったことは、現地のことを真に考えていることの証明ともなり、現地の信頼をさらに加えられたものと確信しています。どうもありがとうございます。」



平田氏より所長への目録の贈呈



購入図書の一部

### No.31 スリランカ水質モニタリングと啓発活動（2005年開始、継続）：

この活動支援は、地域資源循環技術センターの特別基金により、スリランカのNGO NetWwater (Network of Women Water Professionals: 代表 Kusum 女史)の活動を3ヵ年支援する活動で、ピンガオヤ流域の上、中、下流の水質を長期にわたって計測、モニタリングすることにより、水質問題に対する理解や啓発を行おうという活動であった。先日届いたKusum 女史の報告によると、「昨年は、いろいろな問題により活動を実施できなかった。今年の3月の世界水の日には水問題意識向上会議を開催し、この計測・モニタリング活動に関心を示した4つの学校を選定し、8月から具体的な活動に入る。」とのことであり、活動の推移を継続的にモニタリングしていきたいと考えます。

### No.32 ボリビア共和国：保育所の菜園の改善支援（2005～2006年3月末）

- ・ ボリビアコ国コチャバンバ県 タラタ村には16の保育所があり、それぞれの保育所の菜園で、野菜を栽培し、子供たちの給食の栄養源になっている。3000メートルを超える地域では、低温・強風のためビニールハウスの利用が有効で、いくつか設置されているが、そのほとんどが破けているため、その役割を十分果たしていない。子供達の健康・栄養状態改善のためのため、父母会、村の人々の協力により7つのビニールハウスの修復（4）及び新たな建設（3）を実施した。併せて、肥料作り、土作りの講習や父母会保育所などの組織の強化を実施し、栽培用の資材として、農具、コンポスト用バケツ、野菜の種子の贈与も行った。今年度、ボリビアを訪問する松平さんから、現地のモニタリングをしてくるとの連絡をもらっています。（担当・報告：松平亜希隊員）



破損したビニールハウス



保育所での給食風景



ビニールハウスの修復及び新たな建設を実施（保育所での野菜栽培）





### No.33 ポリビア国共和国タラブコ村に識字教育を：ソーラーパネル設置（2006）

町役場、集落と共同して、タラバコ村の4集落にソーラーパネルと蓄電により夜間の電灯を確保し、識字教育（参加者の90%は女性）を行う。早朝から水汲み・料理・洗濯・家畜の世話等の多くの家事に追われ女性は、昼間のクラス参加は困難である。このプロジェクトに対し、各集落のメンバーが集会を開き、以下の5つの事項を約束した。

1. ソーラーパネルが壊されないように、パネルの回りに堀（囲い）を作る。
2. 講習会を開き、子供たちや家畜が入らないように社会的なコントロール行なう。
3. 蓄電器を購入し、雨の日・曇りの日等でも電気が使用できるようにする。
4. 電池が切れた場合は、集落の資金（及び学校のメンテナンス資金）で買い直す。
5. 識字教育受講者は、諦めず怠けず休まず学習を継続する。



ハトゥンチュリカナ小学校



ピシリ小学校



石鹼作り（ピシリ集落）

今回のプロジェクトにより、より多くの女性が、より効果的に学習する機会を持つことができることが、各家庭の所得向上につながり、知識・所得の向上さらには基礎衛生や農業、保健の改善にもつながると考えられる。（担当者：村上 玲子、監理：四野見 専門家）

### No.34 ポリビア国共和国チュキサカ県チャコ村 水供給システム改善（2006-）

#### ～チャコ村に安定した飲料水の供給と管理運営の持続性を！～(2006)

チャコ村では、水供給システムが老朽化、安定的供給や、新規地域への供給に問題が生じている。このためチュキサカ県、スクレ市、チャコ村と共同し、1) 老朽化した現在の飲料水の供給システムの改善、供給増の増大と新規供給の拡大、3) 水委員会への組織強化のための研修による持続的な維持・管理の確保、を行う。（担当：福間 あき子、監理：四野見 専門家）（村上隊員、2006年5月申請、6月承認、6月-8月実施：JICA 四野見専門家が管理・モニタリング）チュキサカ県タラブコ町の4集落（小学校）への女性のための夜間の識字教育実施のための太陽発電パネル（50W）の設置。2006年9月より夜間の識字教育実施。2007・3/19付けで報告書および関連書類受領。後任の協力隊員が活動のフォローアップ。

ハトゥンチュリカナ集落 マリアノロケ氏（集落の教育ファシリテーター）：

「貴団体のご支援のおかげで、我々の集落のような忘れられた僻地にも明るい灯火を点し、住民のやる気を高めてくれました。大変感謝しています。私はこの集落で学習プロジェクトのリーダーを務めており、今後、責任を持って、みんなの力で、日本の皆様の愛情がたっぷりこもったソーラーパネルを大事にし、守っていきます。併せて、我々は、パネルを利用して日々一生懸命学び続け、こんな僻地からでも、先住民でも立派に社会進出できることを証明したいと思えます。本当に有難うございました。」



設置状況



設置後のワークショップ

(福間隊員 2006年6月申請、承認、10月活動終了：JICA 四野見専門家が管理・モニタリング)  
 チュキサカ県オロベサ郡チャコ村における給水システムの更新(県、市、村、本会による共同事業であり、本会は深井戸の吸水ポンプおよび関連部品などを支援。  
 2006・10/20 付け、報告書および関連書類を受領。村の水委員会が維持管理の責任を持つ。



チャコ村：約 120 世帯、約 700 人



水汲みや薪拾いを手伝う子供たち

#### 四野見 専門家からのメール 2006・10/23

福間JOCV隊員に支援いただいた Choco 集落の水道案件ですが、先日 11 日に完成式典がありました。JICA 事務所長、チュキサカ県の社会開発部長が出席しましたが、私も顔を出しました。村の子供たちに日の丸で歓迎され、集落の代表者などから次々と感謝の挨拶がありました。工事の経過報告で日本の NGO から 2,550 ドル (30 万円) の支援があったことが報告されました。式典後、焼肉もご馳走になりました。この模様は地元テレビのニュースでも報道されました。集落の住民に代わってお礼申し上げます。ありがとうございました。写真を何枚か添付し、報告します。



## No.35 ボリビア国チュキサカ県プレスト村 女性グループ活動支援プロジェクト(2007)

(JICA 専門家 四野見氏 2007年1月申請、2月承認)

ボリビア国チュキサカ県プレスト村 (アラマシ、コチ、ロデオ 3 集落) 女性グループ活動支援プロジェクト。洋裁機材、研修経費、野菜種子を支援。(女性グループも1部負担:約20%)

### 2007 6/10 四野見専門家より

お世話になっています。女性グループに対する支援ありがとうございます。洋裁研修の写真を送ります。これはPASOPAYA 集落のグループです。初めてミシン(足踏み式と手回し式)に触れてみなさん大変喜んでます。うれしい悩みは参加者が50人にもなり、5人ぐらいのグループごとに時間割で研修を行うのですが、片道1時間以上も歩いて通う女性もいて、ミシンが足りない、研修時間が足りない、ということです。

一番最初に研修を開始したRODEO(スクレから車で片道3,5時間から4時間)の女性グループが2ヶ月の研修期間を終え、この間に製作したスカート、エプロン、ブラウスなどの展示会が6月1日に開催されました。プレスト村の村長、集落の代表者、女性グループ、集落住民などたくさんの方が出席しました。挨拶では、村長はじめ皆さんから貴会の支援に対する感謝が述べられました。私が代表で感謝に気持ちを込めた飾り(パンで作られている)を頂き、昼食をご馳走になり、集落の伝統音楽が紹介され、みんなで集落の踊りを行い、とたいへん盛大でした。作られた衣類は、女性と子供向け(女の子)であり、質も高いように思いました。次の研修は村が経費を負担して行われることになっています。今回の支援で、このRODEO 集落がかなり活気付いているように感じました。女性グループから洋裁研修の後に編み物の研修を受けたい、編み機購入に是非支援して欲しいと要請されました。



洋裁の研修中



制作した作品の前で

コチ集落での研修成果の展示会が6月14日に開催されましたので、そのときの写真を送ります。この催しでも村の議員、集落の代表者、女性グループから貴会に対する感謝の挨拶が続きました。2ヶ月間の研修を終えたので、次の1ヶ月は村が資金を出して行うことになっています。



コチ集落：製作品の前で記念撮影 パソパヤの集落：女性グループ代表の挨拶

パソパヤの集落では7月12日に同じように展示会が開催されました。そのときの写真を送ります。

### 〔JICA プロジェクトの終了時評価〕

6月28日にJICAプロジェクトの終了時評価団一行がプレスト村を訪問した際、村長がモデル集落2村（JICAプロジェクト）のほかに3つの集落で日本の協力を得ていると評価団に感謝の言葉を述べました。横井団長（JICAのグループ長）は3つの集落とは何ですかという質問をしたので、日本のNGO（貴会）による支援だという説明を村とともにすることになりました。形の上ではJICAプロジェクトの成果を他の集落でもやっているということで、評価団からも評価されました。

7月24日にプレスト村の祭り（Feria）があり、支援を受けている3つの集落の女性グループが自分たちの活動を紹介する展示を行いましたので、そのときの写真を送ります。私たちが取り組んでいるJICAプロジェクトと並んでコーナーを設けたのですが、3集落研修成果品（スカートやブラウスなど）のできばえに関するコンクール（来訪者の投票）をやったこともあり、JICAのコーナーよりも盛り上がったように思いました。（活動を紹介する写真とコンクールの賞品代（マカロニ16kg：賞品はグループの行事などに使う食品が良いということでした）は私が負担することにしました）。各々の集落からトラックか何かで来たのではないかと思います。女性たちは久しぶりに遠い村の中心部まで出てきたこともあって、元気いっぱいに来訪者にスカートのできばえなどを説明したりしていました。プレスト村には33の集落がありますが、「NGO水と大地と緑の会」が大分有名になったと思います。3集落や村の人たちから感謝され、私が貴会員に代わってその気持ちを受け取りました。なお、洋裁研修は現在村の負担で3回目の研修をしています。



3集落の展示コーナー



「ありがとう NGO 水と大地と緑の会」書かれたパネル

3集落からの要望で、現在編み物研修のための支援申請書を準備しています。女性グループには洋裁研修を終えたあとに申請すると伝えてありますので、今年分の支援要請は9月下旬か10月ごろになると思います。これにつきましても、是非よろしく願いいたします。ポリビア 四野見（8月9日）



伝統的衣装で正装したコチの女性たち



コンクールで1位に賞品授与（マカロニ8kg）

コチ(集落)、2007年10月5日     ボリビア国プレスト村コチ集落より     礼状

日本のNGO“水と大地と緑の会”様     感謝状

コチ集落女性グループ代表者バルトリナ・シザ(Bartolina Siza)よりこの手紙を通し貴会に対し心からご挨拶申し上げます。

この機会を利用し、私たちがより支援を必要としている分野、女性組織強化への大きな支援を得たことを心から感謝いたします。貴会の支援により実施された“洋裁研修プロジェクト”により我々の女性グループは大きな利益を受けました。今後は自分たちが着るためだけでなく商品化に向けた衣類の製作を継続していくつもりでいます。最後に、このプロジェクトは計画する各段階で貴会との窓口になった四野見様の協力の上に実施されたことを申し添えます。

今後とも貴会のご支援をいただけますようお願いいたします。女性グループ代表者（6名の署名）



コチ集落の女性たち



パソパヤ集落の女性たち

### No.36 アフガニスタン国バーミアン州ダシュテ・エサハン地区（緑資源機構 團専門家）

CDCs（3村コミュニティ開発委員会）による、灌漑施設の修復

当国は乾燥・半乾燥気候に属し、限られた水資源を有効に利用した農業が行われている。農業には多数の国民が従事すると共に、人々は生活の営みの場である農村社会を過去数百年かけて築き上げてきた。しかし、20年以上にわたる内戦によって灌漑農地や施設は放置され、農村は疲弊した状況にあり、また、干ばつにより農業生産が深刻な打撃を受けている。

事業の目的は、今年度3月に生じた集中豪雨によってダメージを被った、農業農村の生命線である用水路の復旧工事に対して支援を行うことにより、ダシュテ・シュライ村の農業農村復興に寄与する。

活動として、特に脆弱かつ重要なシュライ村の谷部を対象として、用水路の補修工事に支援する。

復旧工事に係る、掘削等の労務はシュライ村の農民自身による出役とし、石積み工らへの人件費も全て地元負担とする。現地での本活動の管理責任者は施工管理を、本会からはセメント等の工事に係る資材および運搬費に対する支援を実施する。



水路の破損状況



農民リーダーとの現地踏査

この支援は、2007年度に承認した活動であるが、承認後現地の治安の悪化に伴い、現地の専門家の引き上げが行われた。このため、現地情勢の改善を待って活動を実施することとなっている。なお、今年度中に、活動実施が見込めないため中止とし、会からの支援金は返還してもらった。

### No.37 ボリビア共和国チュキサカ県プレスト村（2集落：コチ、ロデオ）女性グループ活動支援プロジェクト（青年協力隊 プレスト村役場所属 筒井 氏 担当）

この支援プロジェクトは、チュキサカ（Chuquisaca）県北部にプレスト（Presto）村は位置している。当会より2007年に洋裁研修、家庭菜園などの活動を支援（No.35）したコチ（Q'ochi）集落およびロデオ（Rodeo）集落の女性グループが織物技術の習得を中心としてグループ活動への支援である。活動費の一部はプレスト村役場が補助し、参加者が一部負担金を支払うこととなっている。なお、2007年に支援を受けた3集落のうちパソパヤ（Pasopaya）集落の女性グループは参加者が多いなどの要因で洋裁研修の進捗が遅れており、今回の申請には参加していない。活動の目標として、2集落の女性グループが編物の技術を身につけ、家族の洋服の一部を自ら製作できるようになる、供与されたミシン・編み機などを使い洋裁・編物が女性グループ活動として定着し、グループ活動が活性化し、野菜および果樹栽培の技術を習得することにより食生活が改善され、健康の増進につながる、会合が習慣化し、学習の場としても機能するようになる、事が期待されている。



女性グループが作製した衣類  
サンティアゴ祭の間、役場前に展示された。



コチ集落の会合の様子  
講師の問いかけに応じて、活発な意見交換

## No.38 バングラデッシュ国シャリアットプール県ベダルガンジ郡

### ベダルガンジ郡婦人グループに対するミシン 23 台の供与と研修 (菅谷 専門家)

この活動は、農村地域の婦人生活改善支援を目的として、ミシンの供与と縫製技術の研修（12日間）を、現地の NGO（SDS）の協力により実施しました。対象地域は、洪水常襲地帯であり道路などの整備も遅れた、貧困地域である。ミシンの代金は女性グループから返却をもとめ、その資金を回転資金として、グループの他のメンバーに貸与し、活動の拡大を行うという趣旨で実施されました。また、12日間の、縫製の技術訓練を行い、また製品の販売についても訓練を実施しました。その後のモニタリングのレポートでも、ミシンと習得した技術を活用し、多い人は1月1500タカ（3千円）近くの収入を得る女性も報告されています。



現地へはボートを利用



農家の庭先でトウガラシを乾燥



受益婦人および関係者



研修風景

#### 受益者のその後：



**Josna Begum** さん：3年前離婚。彼女は片足が悪く、離婚後父親の家で悲惨な生活を送っていた。ミシンと研修により、現在約1日30-40タカ（60-80円）程度の収入がある。



**Aysha Begum** さん 2年前、ご主人に捨てられ、父の家に住む。他の家に、日雇いとして働いている。会より贈られたミシンと研修により、現在約1500タカ（3000円）程度の月収がある。

## No.39 パラグアイ国パラグアリ県 SRGSC 市とアカアイ市でのかまどの改良（松原、花野専門家）

2008年度支援を開始したこの活動は、この地域の小農のかまどの改善を支援し、それにより、燃料効率の向上による調理時間の短縮、燃料効率向上による薪の節約、排煙設備（煙突）の設置による気管系健康被害の防止、女性の労働負担の軽減（薪集め、調理）、森林減少の軽減を目的とする。

地域の小農は、調理に当たり、貧弱な調理場でレンガ又は石で支えを作り、薪を燃やす方式が多く、簡易な作りのため、燃料効率が悪く、調理には多量の薪で長時間かける必要があり、その上調理場には煙が充満し、調理に当たる主婦は長時間煙の中での立ち仕事を強いられている。また森林減少により、薪の確保が困難になりつつあり、主婦の負担は増加している。

支援においては、農家にとっては高額の、鋳物製の上板と灰落とし、トタン製の煙突、及び土台を作るために必要なレンガを各戸に供給するものである。農家は、材料費の30%相当である一定額（75,000Gs/戸）を支払うとともに、材料をもとに自らかまどを立ち上げる。この支援では、9集落の要望が強い農家の約50戸に対して、かまどの改良を行うものである。



改良前のかまど



改良かまどの事例

地域の小農は、調理に当たり、貧弱な調理場でレンガ又は石で支えを作り、薪を燃やす方式が多く、燃料効率が悪く、調理には多量の薪で長時間かける必要があった。調理場には煙が充満し、調理に当たる主婦は長時間煙の中での立ち仕事を強いられている。さらに、森林減少により、薪の確保が困難になりつつあり、主婦の負担は増加している。支援では、農家にとっては高額の、鋳物製の上板と灰落とし、トタン製の煙突、及び土台を作るために必要なレンガを各戸に供給する。

農家は、材料費の30%相当である一定額（75,000Gs/戸）を支払うとともに、材料をもとに自らかまどを立ち上げる。この支援では、9集落の要望が強い農家の約55戸に対して、かまどの改良を行う計画であったが、2009年2月末現在、20戸のかまど改良にとどまっている。これは、本年は50年ぶりという大干ばつで、農家所得が減少し、自己負担分の30%を支払えない農家が増加したことによる。また、バラマキ型のNGOがパラグアリ県内でかまどを無料設置するプロジェクトを始め、せっかく芽生えた自己努力で生活改善しようとする意識を損なう動きとなっていることも影響している。ただし、2月中旬以降降雨が見られるようになっており、現在15戸程度の農家が負担金支払いの見込みがたっており、順次整備を進める予定であるしたがって、今の状況では2009年3月末までにプロジェクトを終



了することは困難であり、期限を延長し、2009年8月までに残り35戸分のかまどを設置することとした。

## No.40 水供給改善事業(井戸修復・研修) 2008年～、モンゴル・ウブルハンガイ～

(松本、山中専門家)

事業地域は、モンゴルの黄砂発生源地域であり、市場経済導入以降、家畜の私有化・頭数の自由化がおこり、さらに失業者の遊牧民化も伴って、主にカシミア用の山羊頭数の増加による家畜構成の急激な変化が見られる。また、社会主義時代に建設された井戸の多くが、ネグデル(共同農場)の崩壊により、管理体制が崩れ故障や管理不十分のため利用が困難になっている。零細牧民は、井戸修理の技術、資金もなく、インフラの維持管理が十分でない。利用可能な井戸が偏在していることから地域的な過放牧の状態となっている。これらのことは、草地植生の後退や草種バランスの悪化などの植生劣化をもたらし、飛砂発生増加の原因のひとつと考えられている。

このため、住民参加により補修が可能な井戸を対象として、井戸管理グループの組織化を図り、持続的に井戸が利用管理できるようなプロジェクトを実施する。これにより、草地植生の回復を図り、持続的な牧地の利用による牧畜経営の安定と飛砂防止による環境対策に資する。牧民のオーナーシップを高めるため、プロジェクト経費の10%を牧民負担とし、徴収した資金は、牧民グループの積み立て資金として井戸の修理・管理に充てることとする。



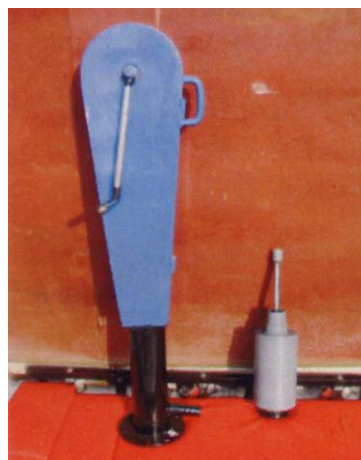
植生の乏しい草地への羊、山羊の放牧



修理を要する井戸



揚水試験



ポンプの上部とシリンダー

## No.41 「ホンジュラス国マルカラ市周辺等における点滴灌漑設備などの導入計画」

### (ホンジュラス派遣 JICA 吾郷専門家)

ホンジュラスの農村部では、貧しい農民が小額ながら自分たちで資金の積み立てを行う、頼母子講的なマイクロクレジット事業による集落の開発が行われている。このため、当会の支援により、マイクロクレジットが設立されている集落において、零細農民に対する小規模灌漑施設を導入した野菜栽培研修および養蜂技術の研修の支援を行うこととする。

具体的には零細な農民を 5~6 人をグループ化して、グループの 1 人の土地において約 0.5ha の点滴灌漑施設を整備する。そこで、グループのメンバー全員が NGO (Funder という現地 NGO) から野菜栽培の研修を受けながら個人ごとに数本のウネの栽培を担当して栽培を行い収穫物は販売する。なお期間は 1 年間で、3 作の栽培を考えている。また養蜂部門では 7 つのマイクロクレジットのグループに対して 1 箱ずつの養蜂箱を支援する。グループメンバーは NGO から野菜栽培の研修を受けることができ、また生産物を販売することによって収入を得ることができる。これらの儲けた金額は、個人の点滴灌漑設備投資に回されることになっている。

なお本事業により点滴灌漑施設の支援を受けた農民は、少なくとも 50% の代金はマイクロクレジットの資本金へ返済してもらうことを考えている。これにより零細農民に対して、①野菜栽培の技術が移転され、②本事業により農民の収益があがり、この資金がグループメンバーの新しい灌漑投資に結びつく、③本事業で資金提供を受けた農民が、その一部分の資金をマイクロクレジットに返済することからマイクロクレジットの資本金が強化され集落内の農民への貸し出し金額が増額する、などの効果が考えられる。養蜂部門については、全額資本金へ返済してもらう考えである。

### 活動成果報告

この度、水と緑と大地の会に、ホンジュラスの農村開発事業に対してご支援をいただき大変ありがとうございました。実施されました事業は次の 4 つの事業で、いずれも受益者は大変感謝をしております。これらの事業は、いずれも現地 NGO・Funder の技術支援によって実施され、その後のモニタリングも実施される予定です。ここに事業報告と、お礼を申し上げます。

#### 1. チョルテカ県 El Trifunfo 市 Tres Pieda 集落 Venceremos Unido 地区

##### (1) 援助事業内容

- ・ Venceremos Unido 地区では頼母子講的な農村銀行 (CRAC) を 26 人の会員で運営している。この中の会員 4 人が今回の受益者である。
- ・ 今回 PAGE の資金援助によって、「パイロット的に点滴灌漑事業」を実施できることになった。ここで地域住民に成果を啓蒙して、将来は他の会員も参加して規模を拡大し実施する予定である。
- ・ 工事は、NGO・Funder 技術者の支援を得て、農民が灌漑計画を作成。営農計画は 200 本のプラタノ (食用バナナ) と 200 本のパパイアの点滴栽培である。工事は、受益者が参加で実施。200 本のパパイアの苗を苗畑で管理し、植え付けのための準備中。

##### (2) 受益者の声

- ・ …我々の地区は、干ばつの被害を受ける地区で、毎年、天水栽培ですので運が良い年でも 1 回しか収穫できません。今回の施設ができれば、年間通じて果樹生産できますので雇用や収入増大ができると期待しています。

- ・ 支援していただいた資金は全額、農村銀行に種資金として返済することを約束いたします。これにより、他の会員も同じような施設を建設することが可能になります。他の会員が同様な事業を始めるとしては、設置方法や作物の栽培方法を指導いたします。



購入した機材

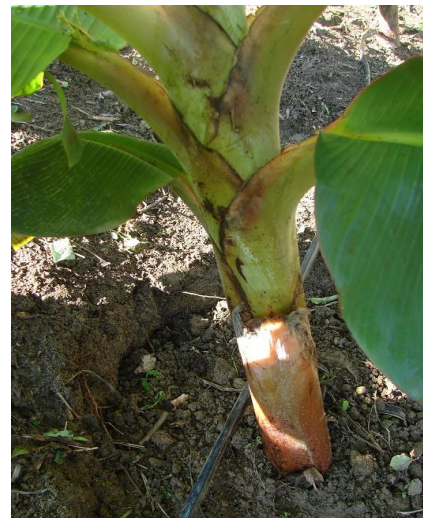


パイプ設置のための掘削

## 2. コルテス県プエルト・コルテス市 El Balsamo 集落 Vision Futurista 地区

### (1) 援助事業内容

- ・ Vision Futurista 地区では頼母子講的な農村銀行（CRAC）を運営している。会員は 14 人で、このうち女性は 8 人である。事業はプラタノ生産のための 0.52ha に対する点滴灌漑施設整備である。当地方ではプラタノを主食のように食することから、この需要が非常に高い。またこの地域の土壌と暑い気候に合っているが、今までは灌漑施設がなかったために生産ができなかった。現在までにプラタノ 800 株を植え付け、その子供（横に付く子株）も利用できるようになってきた。



食用バナナへの点滴灌漑

### (2) 受益者の声

- ・ 受益者は CRAC の全会員である。このプロジェクトは昔から実施したいと思っていたが、PAGE の支援でようやく実現しました。ありがとうございます。この灌漑システムがあれば、年間を通じて、何の心配もなく生産ができます。
- ・ またプラタノは子株ができるので、それを植えつけることによって簡単に規模を拡大できます。さらにプラタノは地域の土壌に合っているし、自分たちの主食ですので市場もあります。
- ・ この灌漑施設と作物は CRAC 全員で管理し、我々の収入の改善を図ることができます。この圃場は我々に働く場を与えておりますし、また産物を市場に販売でき収入の改善に貢献します。改めまし

て PAGE の資金支援に感謝をいたします。

### 3. コマヤグア県サンヘロニモ市 Plan de Buey 集落 Nuevo Porvenir 地区

#### (1) 援助事業内容

- Nuevo Porvenir 地区では頼母子講的な農村銀行 (CRAC) を運営している。地域はアクセスが悪い、山の中に位置している。この CRAC は 07 年に Funder の支援で設立され、現在会員は 28 人で、その内 80% は基礎穀物栽培農家で 20% はコーヒーを栽培している。
- 当地区の収入を改善するためには、現在のような基礎穀物栽培やコーヒーのモノカルチャの継続では難しいため、生産の多様化が求められていた。多様化の一つとして、山の中という地形的な優位性を活用した養蜂事業が計画された。
- CRAC 会員の中の 8 人が参加して事業を実施する。PAGE の資金で 3 個の養蜂箱と必要な機材を購入。なお養蜂の技術指導は COAPIL (養蜂組合) から受けている。
- 受益者は PAGE からの援助資金を、既に CRAC へ種資金として返済し始めている。今までに技術指導を受けて、蜂蜜生産が急激に増加できたので、更に自分たちで 3 個の養蜂箱を追加購入し、2010 年 3 月には蜂蜜の初収穫を計画している。これらの資金は CRAC に種資金として返済され、その後、他の会員にも融資される。

#### (2) 受益者の声

- 養蜂事業は地域では初めてのパイロット的な取り組みのため、短期間で収益を上げて他の会員にも啓蒙したい。そして、この経験を他の会員にも普及したい。蜂蜜は天然の産物なので、集落内はもとより周辺集落でも簡単に販売できます。
- 養蜂技術者から習ったことを実践し、将来は養蜂箱を自分たちでも作りたいと思っています。



受益者のグループ



養蜂の訓練

### 4. ラパス県サンホセ市 Barrio Nuevo 集落 Esfuerzo del Futuro 地区

#### (1) 援助事業内容

- Esfuerzo del Futuro 地区では役場の近くで、頼母子講的な農村銀行 (CRAC) を運営している。この CRAC は 07 年に Funder の支援で設立され、現在会員は 17 人、その内 14 人は女性である。
- サンホセ役場が主催する農業フェアが毎週土・日曜日に開催されるため、本女性グループが参加して食べ物を販売することになった。
- 役場ではフェアを開催する広場を確保するだけであるため、フェアに参加する女性グループでは簡易テントやコンロ、ナベなどを準備する必要があった。
- 今回のフェアへの参加では、自分たちでテントやイス・テーブルなどを購入した。また、PAGE の

支援により、この資金を活用してコンロやナベなどを購入できた。

## (2) 受益者の声

- PAGE からの贈与は CRAC 総会で紹介された。これに対して会員から、次のようなコメントがあった。「このプロジェクトは、今は小さいが今後、“努力”という CRAC の名前のように努力して活動を大きくしていきたい。我々のスローガンは、我々レンカ・エスニックの“伝統の食べ物を再評価して復活してお客さんに提供しよう”」であることから、この活動により女性の収入を向上させたい。



食事の販売状況



販売された伝統料理

- PAGE の支援に感謝したい。名もない我々を信用してもらい、我々の小さなプロジェクトの支援をしていただいた。できるだけ早く規模を大きくして、収入を改善したい。なお、支援をいただいた援助資金は全額、CRAC の種資金に返済いたします。

## No.42 モンゴルにおける牧畜業の持続的な発展のための水資源開発：

(2008 年 No、40 として開始、全体計画は 3 年) (報告 NGO: Risk-free animal husbandry center” )代表：D.UUGANBAYAR 氏、監督・調整：JIRCAS 松原氏)

放牧地で壊れた家畜回転式ポンプの深井戸を手押しポンプに改修する。家畜回転式ポンプの深井戸に手押しポンプを設置することによって放牧地における水資源が回復し、使われていない草地が活性化される。そのことにより、放牧地の利用が分散され、牧養力が高まることが期待される。遊牧民や牧民グループが飲料用水や家畜用水を確保できるために、バグ、ソム、県レベルで協力し、技術的な支援をする。事業は現地担当者 Uuganbayar. D 氏と JIRCAS の調査団との協力の下で実施される。放牧地で壊れた家畜回転式ポンプの深井戸 3 ヶ所に NGO で製造した手押しポンプを設置する。また、地域（遊牧民グループ、バグ、ソム）が事業実施後も持続的に他の井戸を維持管理および修理ができる能力を身に付ける。修理した井戸の利用と井戸管理について井戸修理の前と後に遊牧民世帯にモニタリング調査を行う。



修理を要する井戸（現在はロープによる手汲み）



設置を計画している手押しポンプ

（１）現況調査とポンプの開発

タラグトソム（郡）トヤバグ（村）において、今から約 30～40 年前に建設した家畜回転式の井戸は沢山ありますが、その 80%は故障し、修理の部品が見つからないため、現在使われていないものが多い。そこで、先ず、家畜回転式の井戸ポンプの改修のため、深さ 15m 程度まで汲み上げることができると手汲み式の井戸ポンプを開発することとしました。ウランバートルのダンザン鉄工場とポンプ図面を描いて製作にとりかかり、2008 年度に 5 基開発しました。これを 2009 年度に、現在使われていないか、または使いにくい井戸に設置し、牧民参加で井戸修理、水槽設置の作業を行いました。この作業の結果、現在 5 ヶ所の井戸に手動ポンプを 5 基設置することができました。

（２）持続性のある管理グループの設立と浅井戸の修理システムの確立

遊牧民、遊牧民グループ、バグが独自で牧草地にある井戸を修理できる能力を身につけることができるよう、次の作業を行いました。

- ① 「井戸の手動ポンプの利用説明書」ハンドブックを作成し、遊牧民たちに配布しました。
- ② これら井戸を利用している遊牧民たちを対象に井戸の利用及び保護に関するトレーニングを実施



開発されたポンプ



牧民達の井戸ポンプ設置状況

- ③ 開発した手動ポンプの機械図面を県及びバグの関連専門家に手渡ししました。

そして、バグレベルに井戸修理チームを作り、遊牧民グループとバグの責任者が協力して、井戸修理チームを主体に井戸を修理していくシステムを考案しました。井戸管理チームは 3 人で構成し、チームの要員は、貧困対策を狙って所得が少ないこと、技術研修を受けることなどを条件に編成しました。

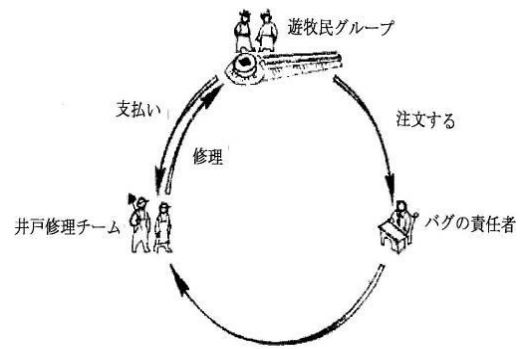
それぞれの役割は、次のとおりとしました。

#### バグの責任者

- 遊牧民たちから修理する井戸の注文を受ける。
- 井戸修理チームに注文を入れ、彼らの事業を監視する。

#### 井戸修理チーム

- 遊牧民たちと相談し、作業計画書の作成、実行
- サービス手数料として受け取った金銭を自分たちの給料または流動資産として分配する。
- 事業過程をバグの責任者に報告する



牧草地の浅井戸の修理システム

#### 遊牧民グループ

- バグの責任者に修理する井戸を注文する。
- 修理チームと相談し、井戸ポンプの汲み上げ効率よくしてもらう。
- 修理チームと相談し、サービス手数料を支払う。
- 遊牧民グループ中で井戸修理に使う資産の共同ファンドを開設する。

#### (3) 羊ファンドの設立

トヤバグの遊牧民世帯それぞれに、羊一頭で井戸修理用のファンドを開設するプロジェクトを始めています。羊ファンド開設の利点を次のように整理しました。

- 1) 当該地域で初めての試みで新しい手段。
- 2) 遊牧民は手持現金不足のため羊ファンドをつくるのは効果的。
- 3) ファンドの家畜を遊牧民は自ら飼うので、損失が少ない。
- 4) 雌の羊でファンドを構成させているので、設立後も頭数が増加していく。
- 5) 遊牧民たちは井戸を修理する資金を集めることができ、以後も自力で井戸を修理できる上、他のスポンサーの支援を受けることが可能になる。
- 6) 遊牧民たちは井戸修理に、自己資金を使った場合、その井戸の利用、保護が良くなる。
- 7) 現金で管理しないため、管理者の不正経理発生など資金トラブルが少なくなる。

おわりに：「水と大地と緑の会」の支援を得て、よちよち歩きを始めた NGO ですが、国際農林水産業研究センター（JIRCAS）の調査団員の励ましも得て、試行錯誤を繰り返しながら少しずつ成果を出せるようになったと自負しています。モンゴルの牧民が井戸を自分達で利用管理でき、持続的に放牧地を管理して遊牧による安定した生活ができるように少しでも役立ちたいと考えています。「水と大地と緑の会」の八丁先生はじめ、会の関係者の皆様の支援に改めて感謝申し上げますとともに、今後とも暖かい支援をお願いします。



牧民を集めた研修



羊ファンドの耳かんの装着

## No.43 ボリビア国チュキサカ県プレスト村パルマル集落

### 女性グループ活動支援プロジェクト (JICA 専門家 四野見 氏)

#### 事業内容

ボリビア国内でも最も貧困地域であるチュキサカ県北部、プレスト村の集落パルマル(PARMAR)の女性グループを対象に洋裁研修、果樹・野菜栽培などの活動の実施を支援する。主な活動は次のとおりである。

- ① 集落施設の一部を女性グループ活動の拠点として整備する。
- ② 洋裁研修に必要なミシン(足踏み、手回し)などの機材を購入する。
- ③ 外部講師により4ヶ月間の洋裁研修を実施する。
- ④ 洋裁研修修了時にプロジェクト活動の評価を実施する。
- ⑤ 研修・評価を終えたら、集落住民に対し製作された衣類の展示会を開催する。
- ⑥ 研修を受けた何人かの女性が講師となり、集落内の他の女性に対して自主的研修を継続する。
- ⑦ 女性グループ構成員に対し果樹(リンゴ)苗木と野菜種子を配布し、栽培研修を実施する。

プレスト村には33の集落があるが、今回のパルマル集落はプレスト村の中心地からおよそ60km離れた遠隔地にあり、他のプロジェクトやNGOの活動が入っていない集落である。このため、女性グループの活動も停滞しており、これまで経験のない洋裁研修というグループ活動に大きな期待と参加意欲を持っている。この女性たちの活動を支援するため、パルマル集落では既存の集落施設の一部を女性グループの活動拠点として提供し、必要な整備を実施することになっている。

水と大地と緑の会」への感謝のポスター

ミシン、研修用机などの機材と一緒に記念撮影



製作品の展示会 (第2回目)

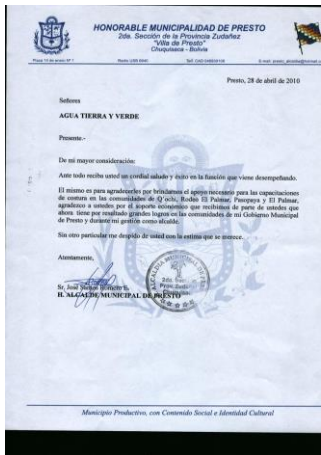
洋裁研修の様子



村長より感謝状

プレスト村、2010年4月28日

水と大地と緑の会の支援を受けたチュキサカ県プレスト村エル・パルマール集落の「女性グループ支援プロジェクト」が終了しました。24名のグループに対して5ヶ月間の洋裁研修を実施し、最後に購入したミシンの維持管理研修を行い、そのためのマニュアルも配布しました。お陰さまで、彼女たちは自分や家族が着る衣類を自分で作ることができるようになりました。プレスト村の村長はじめ村の関係者からも大変感謝されています。



水と大地と緑の会 様  
拝啓

貴会に対して心からの御挨拶を申し上げますとともに貴会の成功をお祈りします。さて、プレスト村内のコチ(Q'ochi)、ロデオ・エル・パルマール(Rodeo El Palmar)、パンパヤ(Pasopaya)、エル・パルマール(El Palmar)集落における洋裁研修に対して必要な経済的支援をいただいていることに心から感謝申し上げます。私の村長としての任期中にいただいた皆様方からの支援により、現在、各々の集落では大きな成果を上げております。最後に、貴会に対して感謝と敬意を込めてお別れの言葉を申し上げます。

敬 具

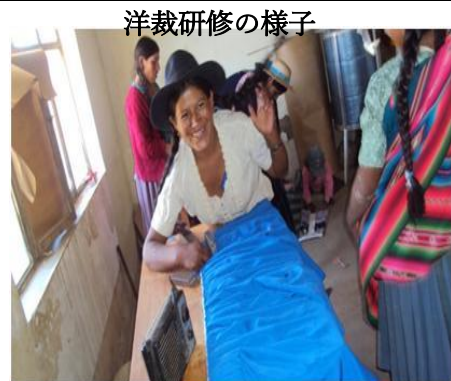
プレスト村村長 ホセ・サントス・ロメロ (José Santos Romero)

当該集落はなにしろ遠隔地にあり交通手段が限られるため、製作品の販売は簡単ではないのですが、村のフェアなどの機会を利用して販売できればと期待しています。集落のみんなとともに重ねてお礼申し上げます。ご支援 誠にありがとうございました。

プロジェクトの実施状況写真



洋裁研修の様子



洋裁研修の様子

製作品の展示会 (第1回目)



製作品の展示会 (第2回目)





女性グループ規約への署名



各自の製作品の前で記念撮影

## No.44 「ホンジュラス国農村女性活動支援による貧困削減計画」 (吾郷専門家)

### 1. 背景

- ・ 貧困支援はいろいろな方法で実施されているが、日本が援助を行っている一つの援助方法は、貧しい農民たち自らに小額の資金を積み立てさせる、頼母子講的なマイクロクレジット事業（農村銀行）による集落の開発である。これを集落単位で組織化することを支援し、農民はその資金を活用しながら肥料などを購入するもので、これにより仲買人から高い金利で肥料などを借りざるを得ないなどの、仲買人の悪影響が排除され効果がでていく。
- ・ 今後はマイクロクレジットを活用した女性の野菜換金作物栽培などの生産の多様化や、農産加工などの付加価値付け活動への支援が求められている。

### 2. 事業内容

#### (1) 事業計画

- ・ Funder という現地 NGO は前述のマイクロクレジット支援に加え、野菜栽培などの技術支援を行っている。今回、本 NGO から日本の援助でマイクロクレジットが設立されている集落において、零細農民に対する女性支援事業の要請がだされた。
- ・ 具体的には組織化された農村銀行の会員の中で、収入向上活動に参加したい女性 5~6 人をグループ化して、そのグループに対して Funder からの技術支援と、それらの活動を実施するための材料費を PAGE からの支援により行う計画である。農産加工のためのナベ、コンロや、生産の多様化のための養蜂箱や果樹の苗畑材料などの支援を要望。

#### (2) 事業の成果

- ・ グループメンバーは NGO から野菜栽培や養蜂管理の研修を受けることができ、また生産物を販売することによって収入を向上させることができる。
- ・ PAGE 支援による事業費は、全てクレジットの貸し付けとして、月額 2%程度で CRAC から貸し付ける。つまり PAGE の支援により材料が購入されるが、その金額は農村銀行からのクレジットとして受益グループに渡し、グループは利子を付けて返済する。さらに、その資金はリボルビングファンデーションとして他の農民にも貸し出される。
- ・ 本事業により女性の零細農民グループは、①農産加工などの研修が受けられ、②その事業を実施す

ることにより収益があがり、③それら全額を、利子を付けて農村銀行に返済する。このことから農村銀行の資本金が強化され、集落内の農民への貸し出し金額が増額する、などの効果が考えられる。

### 3. 事業予定地区

- ・ 南部地域 2 ヶ所：チョルテカ県、バジェ県、中央部：ラパス県、インチブカ県、北部：コロソ県、コパン県

### 4. 事業の成果

#### (1) . 全体事業費精算額

- ・ 2010年5月31日付けドル・円相場：91.0円。\$=18.8877。換金額：300,000円/91円=\$3,296.7。  
Lps=\$3,296.7x18.8877Lps/\$=Lps 62,267 (L. 1.0は約5円)
- ・ 使用額=①Funderの事業費=62,267-550=61,725 (\$ 3,268)、②その他：カカオからチョコレート製造のレシピづくり代等：カカオ材料代：L. 250+チョコレート加工レシピ作成代 L.200+郵送料費 92=542。合計 **Lps 62,267**

#### (2) . 全体の事業概要

- ・ 支援費は、次のように 8 県、8 地区の農村集落銀行 (CRAC) 会員の女性活動に支援された。資金支援の方法は、農村集落銀行 (CRAC) へのシード資金として回収され、再び他の事業に貸付けられることになっている。(注：1mz は 0.7ha)

CRAC 名	県名	活動内容と支援	PAGE 支 援費	女性参加 人数
1) Ologos No.1	Intubuca	パンの製造活動：機材と材料代	5,867.0	2人
2) Lluvia de Benducion	Comayagua	0.25mz のジャガイモ栽培：改良種子と農業資材の購入	14,220.0	13人
3) Manos Divinas	Comayagua	鶏飼育による卵販売：在来種のひよこの購入	11,975.5	12人
4) Union Sociedad	La Paz, Marcala	パンの製造販売：カマド建設と機材費代	7,200.0	12人
5) Mujeres Liberadas	Valle	服などの販売事業：ショウケースなどの資材購入代	15,000.0	19人
6) Esfuerzo Unido	Choluteca	ハンモック製作：多色のハンモック用の糸の購入代	1,837.5	3人
7) Nueva Esperanza	Choluteca	民芸品のカゴ製作販売：多色の糸の購入代	1,164.5	10人
8) Union Esfuerzo	Cortes	ナカタマルという在来の食品製造販売：製造機材の購入代	4,460.5	11人
合計：8 CRACs	8 県	8つの活動	<b>61,725.0</b>	<b>82人</b>

\*8つの活動への支援事業費は L. 61,725.0 (40%) であり、受益者は L. 94,104.5 (60%) のカウンターパート資金を負担した。事業費の合計は、L. 155,829.5 (100%) であった。

### 5. 各 CRAC の活動概要

#### (1) 活動計画の立案

- ・ NGO の Funder の技術者が CRAC 会員と一緒に地獄診断を行い、活動の可能性調査を行い、

会員からだされた活動計画の可能性を検討した後、可能性のある事業について活動計画を立案して支援した。

## (2) 各 CRAC の活動概要と受益者の声

### 1) Ologos No.1

- ・ 「計画概要」：2人の女性から「**家庭的なパン製造**」の要望がだされた。これは周辺集落でパンの需要があると判断された活動である。まずは毎週1回の製造により、当該集落内での販売から開始することになった。
- ・ 「CRAC（農村集落銀行）の会員である Sra. Julia Hernández の声」：「集落での生活は大変です。その理由は集落の中での儲ける方法は限られているからです。主人は日雇い労働者で、少ししか収入にならなりません。私がお陰さまで FUNDER を通じて PAGE からの資金援助を受けられ、小さな起業で、パンを作って販売し始めました。これにより少しでも家族、子供たちに支援ができると思います。将来、パンの販売が軌道に乗って規模が大きくなり、他の集落にも販売できることを期待しています。またエスペランサ市の雑貨店にも販売したいと思っています。今は、日本の PAGE からの援助があったため、以前より将来に希望を持っています。
- ・ 本当のところは、連絡があるまで、このパンの事業が承認されるとは思っていませんでした。私たちは以前からパンづくりをする起業のアイデアを持っていました。だけど、単なる夢だと思っていましたが、いつかは必ず実現したいと思っていました。このパンづくりによって、私たちの家族が発展することを確信しています。ご支援をありがとうございました」。

「Sra. Ludís Velásquez Mejía. の声」：「私は CRAC の会計をしています。私たちは PAGE プロジェクトの支援を受けられるため非常に喜んでます。これにより、生産を多様化できるようになりました。私たちは今まではコーヒー生産だけをしていましたが、多様化の試みが必要でした。PAGE からの支援金は、CRAC に返済することを誓います。これにより、他の人にも融資してコミュニティビジネスを始めることができます。この支援は CRAC の強化にもつながり、我々がより支援しあうことができます。ありがとうございました。



### 2) Lluvia de Benducion

- ・ 「計画概要」：13人の女性が参加して0.25mzの面積に3種類のジャガイモ栽培が実施されることになった。計画では、この面積で7,500ポンドの収穫が予定され、純収益はL. 17,009の予定である。この栽培のための技術支援は、Funderの技術者が行っている。
- ・ 「計画概要」：12人の女性により、各々10羽ずつの鶏飼育による卵販売が計画された。今までの鶏飼育は庭に放置した形式で飼育されていたため、十分な卵の収穫ができなかった。今回は Funder の技術者の支援により、簡単な鶏舎を建設して鶏の飼育をすることになった。計画では月・羽当たり21.5個の卵を産むことが計画され、そうすれば年間の純収益は全部でL. 19,915.2と計算されている。

### 3) Manos Divinas

- ・ 「La señora María Corina Martínez の声」：「私たちは CRAC を設立して貧困から脱出するための戦いをしています。今は資本金も少ないですが増加し、融資や貯金もできるようになりました。私は、鶏やアヒル、豚などの小家畜を保有することが好きでした。PAGE の支援のおかげで、鶏のプロジェクトを開始することができました。これにより、今では卵を収穫し販売できるようになりました。これで子供たちにも栄養をつけさせることができます。これを引き続き進め、その後、鳥を売るなどして収入を増加させたいと考えております。ありがとうございました」。
- ・ 「Sra. Sara Adriana Fúnez. の声」：「鶏の卵生産計画に支援していただいた PAGE に感謝いたします。我々は一人当たり 10 羽の鶏の支援を受け、すでに卵を生産して子供に食べさせたり販売しております。この取組を始めてうまく行くことがわかったため、既に新たに鶏を購入し、夫がより大きな鶏小屋を作ってくれました。」



### 4) Union Sociedad

- ・ 「計画概要」：12 人の女性が参加して、「家庭的なパンの製造」と販売が計画された。このため Funder はパン製造の研修と先進地訪問を実施して動機付けをおこなった。資金はカマド建設と受け皿などの機材費代として使用された。
- ・ 「Sra. María Eleuteria Martínez の声」：「パン製造施設に支援をいただき大変ありがとうございました。以前から、私はパンづくりが好きでした。材料費が確保できないため、月 1 回程度しかパンで作れませんでした。しかし PAGE の支援のおかげで、小さな企業が設立でき、パンがいつでも製造できることになり少し儲けができるようになりました。」
- ・ 材料を購入して、薪の消費量が少ないパンづくりのためのカマドを作ることができました。私たちはとても喜んでおります。CRAC も喜んでおります。というのは、この資金は返済しますので、その後、その資金で他の人の活動に支援できるようになるからです。
- ・ 今では 12 人で、パンづくりのルールを決めました、そしてこのカマドでおいしいパンができるようになりました。また薪の消耗が少ないのも助かります。改めて PAGE に対して資金支援をしていただいたことを感謝いたします。私たち女性は、よりよい品質で衛生的なパンを作って、集落だけでなく他の集落にも販売し、これによって自分たちの会社を大きくするよう努力することを約束いたします。

### 5) Mujeres Liberadas

「事業概要」：19 人の女性が参加して服、履物、化粧品などの雑貨販売事業が計画された。その理由は、集落内にエビ加工工場があり、これらの消費のニーズがあると判断されたことによるものである。また集落の中に小学校があることから、将来、学校用品を融資事業お菓子などの販売で拡大する計画である。

- ・ 「Sra. Nora Díaz Turcios の声」：PAGE の資金支援で雑貨屋開業に必要な、ショウケースや服などの雑貨の購入ができました。PAGE に対して、感謝いたします。



- ・ 私たちは商売が好きでしたが、具体的に動き出すことができませんでした。しかし PAGE の資金支援があり、この雑貨店を始めることを決心しました。なお、必要経費は PEGE と自分たちの資金も約 50% 準備しました。これによりこの会社が大きくなると思います。また将来は販売量も増加させ、資本金も増加させたいと思いますので、FUNDER の会計研修などは大変助かります。
- ・ 「他の会員 Julia Isabel Rodríguez の声」：私たちは PAGE に大変感謝しています。この雑貨店で、いくらかの収入を得ることができ、またこの事業によって CRAC も大きくなるためです。また集落内の人たちも、他の場所ではなくここで買いたちとってくれています。
- ・ 「Iris Yaneth Alvarado Rivas」の声」：私たちの考えは、店を大きくすることで、自分たちの資金を追加して、学校用品やコピーサービスもしたいと考えております。

## 6) Esfuerzo Unido

- ・ 「事業概要」：3 人の女性によるハンモック製作が計画された。ハンモックは大きさや色の異なったものを製作し、集落内や外で販売することになっている。
- ・ 「Sra. Emilia Ordoñez の声」：私たちは以前からハンモックを製造して販売をしています。ただこの頃、経済的な問題から材料の購入できなくなり、製作をやめていました。うれしいことに FUNDER の人から日本の PAGE からの資金援助の話を知りました。たいへんありがとうございました。お陰さまで、材料を購入することができました。これにより、たくさんハンモックを製造して販売し、生活を改善したいと思います。ハンモック製造は主婦の仕事として、いいと思います。主婦は、家からでることが難しいため、子供たちの世話をしながら、ちょっと空いた時間を活用して製作しています。



## 7) Nueva Esperanza

- ・ 「業務概要」：10 人の女性が参加して、色や大きさが異なるカラフルな民芸品のカゴ製作を行い、集落内外で販売する計画である。
- ・ 「Sra. Rubia Elías Betanco の声」：以前からナイロン糸を使ったカゴづくりをしようとし、2 年前に INFOP という職業訓練所で研修を受けました。資金援助をしていただいた PAGE に感謝いたします。これにより、カゴづくりができるようになりました。現在は量は少ないですが、継続的に生産して販売することによって、家族のための収入向上に貢献すると思います。今後とも PAGE からの支援を我々、あるいは他の CRAC にもお願いいたします。

## 8) Union Esfuerzo

「業務内容」：11 人の女性が参加して、ナカタマルという在来の食品を製造して販売する計画である。地元にあるメイズと鶏肉を活用して、2 週間ごとに 800 個のナカタマルを作り（月間 1,600 個）、1 個あたり L. 7.0 で販売する計画である。これにより収入の向上を目指す計画である。「Sra: María Antonia Pineda の声」：ナカタマルをみんなで作って販売して、少しですが収入を得ることに喜んでおります。援助していただいた資金は、CRAC の返済いたします。PAGE の資金援助に大変感謝しております。なぜなら、以前からナカタマルの販売は考えておりましたが、資金的な問題から実際に取り組みができずにおりました。ありがとうございました。

### 支援 NGO の Funder から、東北地方太平洋沖大地震に寄付

「今回、訪問の際、配属先の所長さんより、東日本太平洋での津波と地震についてのお見舞いのお言葉をいただき、お見舞いのお手紙とお見舞金の送金証明書のコピーをいただきました。FUNDER の従業員は約 130 名ほどおり、従業員全員が同意し半時間の賃金を寄付したとのことで、L. 27, 591. 60（1400 ドル程度）が送金されました。」

「また全国 420 件の Cajas Rulares（農村の金融事業部）で働いている人々（主に農村部の人々）からの寄付金が集められ、L. 42, 000. 00（2200 ドル程度）が送金されました。「日本にはこれまで様々な形で協力を受けており、お世話になっています、なんとか今回の地震災害の被害者に役に立ちたいとの思いから寄付金を集めました」とのことでした。添付の封書を受け取った際、個人個人の寄付がこんなに多額になったことに驚くとともに、皆様の気持ちにとっても胸が熱くなりました。FUNDER と Cajas Rulares の従業員の方々の暖かい寄付金の貢献に感謝の意を伝えました。」

**No.45 モンゴルにおける牧畜業の持続的な発展のための水資源開発 (No.42 の継続事業)**  
**井戸修復、研修 (全体3年計画:最終年) 現地 NGO「損失のない畜産業」(NGO Risk-free animal husbandry center、協力:ウブルハンガイ県:食料農業部、タラグトソム、バローンバヤンウランソム、JIRCAS: 松原 氏):** 牧草地での水資源を確保し井戸利用の保護改善をする目的での井戸改修、井戸修理チームの創設、井戸修理研修(on the job)、羊ファンドの創立などの活動を実施。

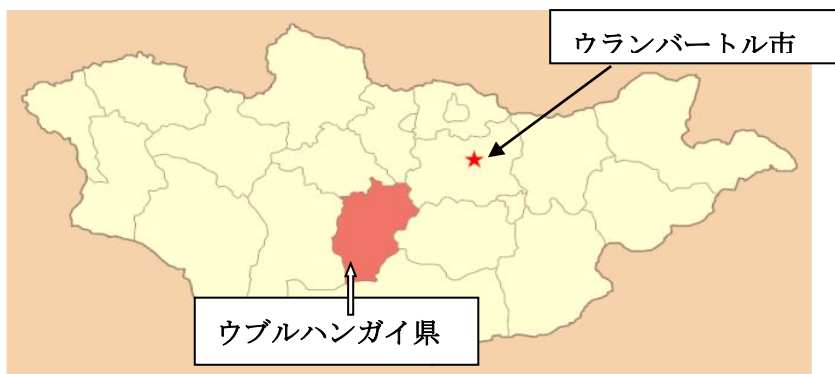
**1. プロジェクトの概要**

放牧地の井戸を改修し、遊牧民に井戸維持管理の技術移転を実施する。あわせて遊牧民に自立的に井戸改修、維持管理ができる体制を創設する。

**2. 2010年度の実施内容**

昨年度まで手押しポンプの設置を含めた井戸改修を5基実施し、遊牧民への技術移転を行った。最終年度となる今年度は、当初予定した残り一基の改修・手押しポンプの設置とあわせ、対象地の遊牧民の利用範囲が大きく展示効果が高い2つの井戸を修理・改修し、遊牧民が自立してその維持管理ができる技術移転の拡大を図る。また、その技術の周辺への波及を図るため、これらの井戸の周辺井戸を利用する遊牧民の参加を促す。また、最終年度としてこれまでの実施の評価を取りまとめる。

**プロジェクト実施対象地図**



(ウブルハンガイ県はウランバートル市から 440 km)

**実施内容と期待される成果**

No.	実施業務内容	実施方法	期待される成果
1	井戸の修理・改修。 (3基)	故障している井戸を修理用機材(発電機、排水ポンプ、セメント等)を使って、遊牧民参加で修理・改修をする。	・利用できない井戸が利用できるようになり、放牧地が有効利用される。 ・井戸の改修・修理方法を遊牧民が理解できる。
2	井戸修理チームを作らせる。	バグ(村に相当)単位または一定の井戸の利用単位毎に井戸修理が専門に行える井戸修理チーム(3名から構成)を組織させる。	井戸修理チームへの井戸改修・修理方法、維持管理方法の技術移転ができる。 これにより自立的な維持管理が可能となる。
3	羊ファンドをつくらせる。	井戸利用の遊牧民をグループにし、そこに羊の生体による羊ファンドを作り、それを原資とし	井戸修理、維持管理が遊牧民によって自立的に行える体制を作り出すことができる。



	て井戸の修理や維持管理を実践させる。	
--	--------------------	--

### 1. 地方の行政員との協力活動について

1) タラグトソムとバローンバヤンウランソムのソム長、バグ長などと協議。

a 修理する井戸の選定、b 地方での井戸改修チームの創設、c 牧民世帯による羊ファンドの創設、d 井戸改修チームおよび羊ファンドの創設について、各バグの人民会議で承認させ、活動実施することの決定、e 井戸修理チームへの研修の実施

2) ソムの副ソム長とバグ長は“損失の無い畜産業”NGO と協力してこれらの活動を実施。

### 2. 井戸の調査

井戸の調査として a 手押しポンプの設置と改修に井戸の実態があっているか、b 改修する要求があるか、c 改修された後何世帯の何人の牧民、何頭の家畜が利用するか、d 井戸周辺の放牧地の面積、e 位置（GPS の測定による）、f 必要な修理の内容、を実施。本調査の結果、計 5 つの井戸改修を計画。

### 3. 手押しポンプの設置

手押しポンプを地方で製造できるようにするため、地元ウブルハンガイ県で金属加工を行う会社到手押しポンプの作成を注文した。この結果、本手押しポンプは作りやすく、地方での製造が可能となった。手押しポンプを設置した際には、井戸利用牧民達に手押しポンプの使い方と管理の仕方について研修を行った。

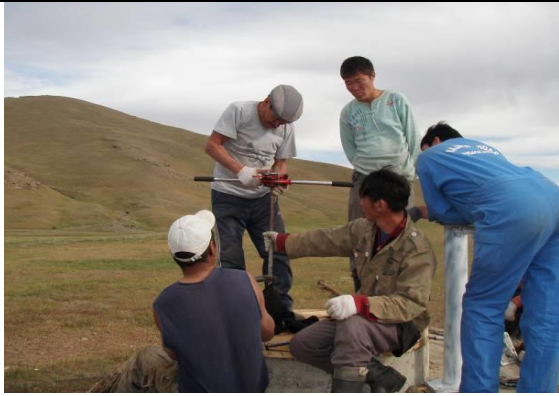
### 4. 井戸改修状況

これら井戸改修は、井戸の底ざらい（堆砂の排除）、地表部の嵩上げ、水場（家畜水そう）の改修、井戸周辺をコンクリート床で覆うなどの作業を井戸修理チームにより実施した。各ソムの各バグ長、井戸修理チームが井戸改修作業と研修(on the job)に参加した。研修には周辺バグへの普及・技術移転を図るため、タラグトソムの 3 つのバグから 10 人、バローンバヤンウランソムの 3 つのバグから 10 人がそれぞれ参加した。

作成した手押しポンプ



設置作業



修理前

修理後



井戸修理工程



修理した井戸計5箇所

## No.46 「ボリビア国チュキサカ県スダーネス村コイロロ集落 果樹加工施設整備支援プロジェクト」 (四野見専門家)

### 1. 背景

チュキサカ県北部地域はボリビア国内でも最も貧困地域とされるが、そのなかでスダーネス村は比較的自然条件に恵まれ、伝統的な穀物生産に加え、果樹栽培や酪農などの農業がおこなわれている。スダーネス村のコイロロ集落の果樹生産組合はこれまで集落内で生産されるリンゴ、モモなどの果樹の大部分をジャムなどに1次加工してラパスなどの2次加工業者に販売してきたが、今回スダーネス村などの支援を得て、最終製品まで加工する新たな加工施設を建設することになった。しかしながら、村役場も資金不足から必要な全施設建設のための事業費を手当てすることができないため、「水と大地と緑の会」に建設事業費の一部について支援要請するものである。なお、村の支援で加工施設建設及び機材購入は現在進められており、今回の申請が承認された場合は、加工施設に併設して加工原材料および製品の保管庫など（煉瓦造1棟28㎡）が整備されることになる。

### 2. 対象国・地域

ボリビア国、チュキサカ県、スダーネス村（チュキサカ県北部地域9市村のうちの一つ）



### 3. 対象分野主要対象グループ

プロジェクトの主要対象グループはスダーネス村のコイロロ集落で果樹や野菜の生産・加工に取り組んでいる農業生産者組合である。コイロロ集落には75戸、276人の住民がいる。同集落ではほとんどの農家がリンゴやモモなどの果樹を栽培しているが、現在同組合で中心的に活動している生産者は26戸であり、この施設が完成すると残りの生産者の組合加入が促進するとみられている。同組合は従来から集落内で生産される果樹や野菜を購入して加工・販売しているので、今回のプロジェクトの受益者は集落全体の75戸になる。

### 4. プロジェクトの目標

- ① コイコロ集落の農業生産者組合（APACC）に国の衛生基準をクリアーする果樹・野菜の加工施設を建設し、スダーネス村 29 集落のモデルとなるよう同組合の育成強化を図る。
- ② 地元産のジャム、ジュースなどを村内の小学校の給食用として安定的に供給する。
- ③ 衛生的な果樹・野菜の加工製品販売を通じて農産物の生産性向上、農家収入の増大を図り、組合員および集落住民の生活向上に資する。

#### 5. プロジェクトの主な活動計画

- ⑧ コイコロ集落の農業生産組合（APACC）に国の衛生基準をクリアーする果樹・野菜の加工施設（支援要請は加工原材料・製品保管庫等）を建設する。
- ⑨ APACC の組合員が果樹・野菜の 2011 年 12 月までに加工技術研修を受講する。
- ⑩ APACC の組合員が加工施設の企業的運営管理に関する研修を受講する。
- ⑪ 2012 年 1 月に国の食品衛生管理を所管する SENASAG から基準を満たす加工施設として認証を受ける。
- ⑫ 2012 年 2 月からジャム、ジュースなどの果樹加工製品を村内の小学校の給食用として供給するとともに、村内及び県内の市場に加工製品を販売する。

#### 6. 活動実施により期待される効果

- ① スダーネス村の果樹・野菜生産者グループのモデルとなる国の機関である SENASAG の基準をクリアーする果樹・野菜の加工施設が整備される。
- ② 26 人の果樹・野菜生産者グループがレベルの高い果樹・野菜の加工技術、施設の企業的運営管理技術を取得することができる。
- ③ 村内の小学校に衛生的な果樹・野菜の加工製品を低価で安定的に供給することができるようになり、地元産農産物に対する子供たちの愛着心が増大する。
- ④ 果樹、野菜の加工製品(最終製品)の販売を通じて、集落内の生産者に収入増大の機会を与えることができる。
- ⑤ これらの組合活動が良い成果をあげれば、同じような条件にある集落のモデルとして、周辺集落の農業生産者グループに大きなインパクトを与えることができる。

#### 7. 必要経費と負担割合

区分	スダーネス村	果樹生産グループ	水と大地と緑の会	合計
建設資材費	0	0	25,620	25,620
建設労務費	11,550	11,550	0	23,100
計 (Bs)	11,550	11,550	25,620	48,720
同上負担割合 (%)	23.7	23.7	52.6	100
換算額	米ドル	1,650	1,650	3,660
	日本円	135,300	135,300	300,120
	支援要請額			300,000

注：1 US\$=7.0 Bs、1 US\$=82.0 円で換算。

#### 8. 活動実施状況

加工施設は完成し、5月2日に竣工式が行われる（水と大地と緑の会 会長よりお祝いのメッセージをおくる。出席した四野見専門家がメッセージを読む。）。施設の完成後小学校の給食用にリンゴや桃のジャムが供給されている。また、「村のプロジェクトとして生産した加工食品が小学校などに販売さ

れており、生産組合の経営も安定しているため、建設した施設も長く使われ、村の農業生産や子供たちの栄養改善に大きく貢献していくものと思われる。」（四野見専門家）。



村から送られた感謝状

### スダーニェス村村長からのお礼状（仮訳）

スダーニェス村、2012年5月10日

日本の水と大地と緑の会御中

APACC組合の生産活動への支援に関する感謝状 スダーニェス村コイロロ集落

尊敬する各位様；

スダーニェス自治村、スダーニェス村議会、スダーニェス村経済開発・生産・自然環境部は、コイロロ集落農業生産組合APACC-の果実加工センター拡大整備プロジェクトに関してスダーニェス村にいただいた貴会のご支援に対して衷心からの感謝の意を申し上げます。このプロジェクトはコイロロ集落にある加工センターにおける果実と野菜の集荷・選定のための施設を建設することを主要な目的にしたものです。今後も引き続き当村の生産分野への発展にご支援をいただくことを期待し、今回いただいた当村の農業生産発展への支援に改めて感謝を申し上げ、心からのお礼といたします。

敬具

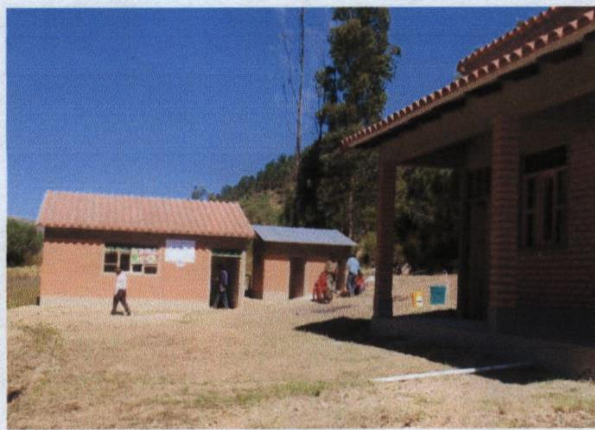
スダーニェス村村長ほかの署名



生産者組合のメンバー達と



建設工事の様子



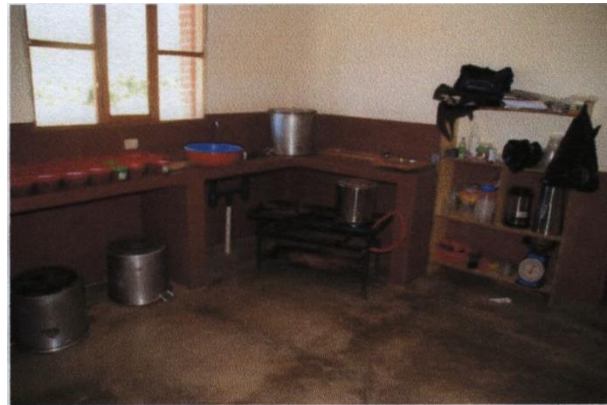
完成した施設の全景（手前が既存の建物）



建物のテープカット（スダーニェス村会議長と四野見）



出席者で記念撮影



加工施設の内部



加工されたジャム（1kg と 500g 詰め）



私たち APACC が作った美味しいジャムを食べてください（組合員の女性たち）

## No. 47 ラオス国ビエンチャン「短職業訓練トレーナー育成のための職業訓練プロジェクト」 NPO「IV-JAPAN」と協力（代表理事兼ラオス事務所長 富永幸子）

### (ア)背景

ラオスでは通常過程の学校教育を終了していない15歳～40歳を対象に学校制度外教育で識字教育と職業訓練を実施しているが、2009年に教育省方針で職業訓練を重視することになり、パイロットプロジェクトがボリカムサイで始まった。しかし資金不足およびトレーナー人材育成が進まず、地方の職業訓練はあまり進んでいない。当会は長年の職業訓練実績があり、当会が作成した短期職業訓練（1年未満）カリキュラムと教科書が教育省学校制度外教育局によりベストモデルと称賛され、当会が開発した上級コース、On The Job Training=OJT方式はトレーナー要請のためには不可欠と位置付けられて、既にシェンクアーン県トレーナー3名、ボリカムサイ県トレーナー2名、他が産出されている。

当会は現在ヴィエンチャンの訓練所2カ所（シクタボン郡とナーサイトン郡）で初級と中級コースの訓練を実施しているが、上級コースはシクタボン郡の1カ所だけのため、希望する生徒を受け入れることができない。そのため上級コースの第2訓練所を建設する予定で、教育省技術職業教育局職業教育開発センター（VEDC）が所有するシサタナー郡の土地提供が決定している。建設資金は当会会員の400万円の寄付を当てるが、不足分を本会より支援（30万円）。

### (イ)プロジェクトの目標

職業訓練上級コース（On the Job Training:OJT）を既存のものに加えもう1箇所別の場所に新設し、集客数を増やし、訓練生に今まで以上に豊富な経験を積ませ、卒業後の起業・就業を促進し、最終的には地方の職業訓練所のためのトレーナーを育成する

### (ウ)主要対象グループとその活動概要

対象グループ：農村・地方出身の15歳～40歳のラオス女性・青少年

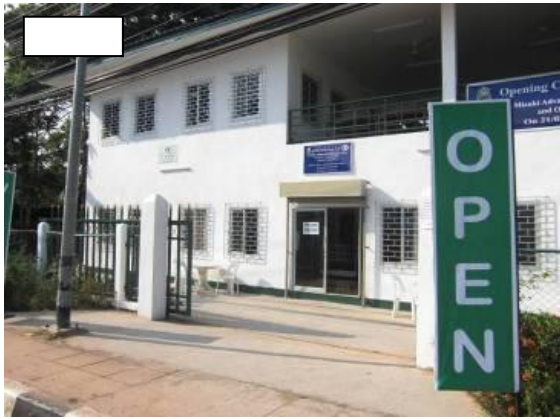
当会は1994年より山岳民族を対象にシェンクアーン県で農村開発、職業訓練を行ってきたが、2000年ヴィエンチャンに職業訓練所を建設、2008年に職業訓練生徒寮を建てたことにより、ラオス全土に対象者を拡大することが可能になった。教育省学校制度外教育局およびヴィエンチャン都教育局をカウンターパートに初級2ヶ月間、中級3ヶ月間、上級6ヶ月間の各コースを設定、調理、縫製、理美容、家具の職業訓練を実施、約2000人の卒業生を輩出した。

### 活動実施状況について

2011年12月からJICA草の根技術協力事業にて行っている「ラオス・短期職業訓練トレーナー育成のための職業訓練プロジェクト」の一環として、職業訓練の上級コース（OJT：On the Job Training）を実施するための店舗の2号店を建設した。プロジェクト運営費用には同店舗の建設費用は含まれておらず、当会自己資金（当会会員からの寄付金）での建設であり、その建設費用\$50,428USDの一部に貴会からの助成金30万円を充てた。（写真1、2、3）

今回上級コース・OJT第2店舗を建設したのは、教育省技術職業教育局（TVED：Technical & Vocational Education Department）に属する施設・VEDC（職業教育開発センター）の敷地内一角。ラオス教育省副大臣、横田順子駐ラオス日本国大使、JICAラオス事務所所長、各関係機関の他、今回の建設費用のメインドナーである伊藤裕子氏等も参加しオープニングセレモニーが行われた。（写真4）

新店舗のOJT2及び2km地点にある既存のOJT1の2店舗にて、調理・縫製・理美容の3分野・全6ヶ月の上級コース（OJT：実地訓練）の職業実地訓練を行っている。2012年4月から第10期、10月から第11期訓練を実施中。10期は20名、11期は19名の生徒がそれぞれ入学。地方出身や、自宅から通学が困難な生徒はOJT1と同敷地内にある寮を無料で利用可能。（写真5）



建設された施設



施設内のレストラン



レストラン



開所式典

将来的には、地方の短期職業訓練センターでトレーナーとして従事する人員を育成するのが目標。現在、各店舗にラオス人マネージャー・アシスタントマネージャーを1名ずつ、ラオス人トレーナーを調理・縫製・理美容各分野に1名ずつ配置。日本人OJTコーディネーターの指揮の下、マネージャー等と協働し、毎日の店舗運営・管理に加え、上級コースのレギュレーション、カリキュラム、教材内容等を検討・作成を行っている。

OJTとして、レストラン、美容院、ブティック店舗を研修生が運営。

写真5





## No.48 ラオス国立大学農学部付属農場かんがい施設等補修支援活動報告

(ラオス大学で支援活動を実施している飽津氏より報告)

### 1. 活動の概要と成果

- 1.1 対象グループ： ラオス国立大学農学部
- 1.2 プロジェクト名： 付属農場かんがい施設等補修プロジェクト
- 1.3 支援金額： 300,000 円 (ラオス通貨両替 30,119,500Kip)
- 1.4 活動期間： 2012 年 10 月から 2013 年 9 月 30 日まで(完了)

#### 1.5 活動内容：

- (1) かんがい用水管理ゲート 11 か所の新設、横断管渠改良 2 か所
- (2) 圃場の大区画 1.2ha
- (3) ポンプ施設送水可撓管接続位置変更用チェーンホイスト導入 1 基
- (4) 中耕除草器 (田車) の試作 2 台

ラオス大学農学部付属農場の灌漑施設は用水管理が行える状況にない。管理設備としては、支線水路分水柵が有るだけで、仕切り版は紛失しブリキ板で代用されている。また水田への取水は管が有るだけでゲートはない。分水操作が確実にできる状況になかった。さらに揚水システムが老朽化、送水管の亀裂等で用水供給自体が不安定なため、用水管理秩序が全く存在しない。そのため、ラオス政府が力を入れている灌漑農業の普及を担える人材教育が満足に行えていない状況になかったため、灌漑用水管理ゲートを新設した。

また、慣行農法では密植と常時湛水により雑草抑制を行うが、必ずしも抑制できるわけではなく、除草は不可欠な作業である。しかし手作業で行う満足に行えていない。除草作業を容易にするため、日本製中耕除草器 (田車) を見本に、ラオスに適した除草機の試作を行った。

#### 1.6 活動の成果：

最大の成果は、農学付属農場の水田が、まともに灌漑管理が可能となる道筋がついたことです。今後、マネジメントを含めたソフト活動を継続していかなければなりません。農学部内における活動実施計画作成過程で、活動の重点が当初の用水路補修から機械化水稻栽培試験が可能となる圃場の大区画化に変更されました。付属農場を今後どのように利用・管理していくかが議論され、情報共有と目標が作られたことは大きな一歩となるでしょう。

また、農学部から強く支援の要請があった揚水ポンプシステムそのものの補修工事が大地の会の紹介により (公社) 土地改良測量設計技術協会の支援により実現したことにより、相乗効果により水稻栽培実習教育、栽培試験機能が向上しました。

ポンプの不安定な稼働、ゲートの無い土水路という灌漑施設そのものの課題、マネジメントの欠如という課題が浮き彫りになりました。教師や学生に尋ねると、実際の農家はこれほどではないというのですが、教育方針の問題もあって、ラオスが現在抱える灌漑農業の課題が明らかになってきました。灌漑管理能力や体制は、従来のやり方が身につけてしまっていますので、簡単には向上しません。まずは、まともな灌漑管理ができるようなハードを整備し、その運用を通じて能力を高める方策を農学部と相談し、大地の会に支援の要請を行いました。



教師も率先して作業、奥は区画整地工事作業、



取水ゲート

## 2. 支援活動の内容

### 2.1. 用水路補修を縮小し圃場を大区画化

当初、配水管理が容易になるようゲートの設置と水路の簡易装甲を計画しました。

まず、幹線水路に分水ゲートが1つもありませんでしたので1ヶ所（幅 50cm）新設、支線水路には5か所（幅 30cm）新設しました。圃場取入管にはフラップ式のゲート（幅 30cm）を4か所設置しました。簡単に開閉できますので、取水管理操作は容易になりました。製作・施工も村の小さな鉄工所で可能でした。

学内で用水路位置を検討しているうちに、圃場区画の議論に発展しました。そもそも水が乗らない圃場があり、高低差の修正をおこなわなければならない。稲作の機械化は、現在、耕起・代掻き作業が水牛から小型耕運機に置き換わった段階だが、コンバインや田植機も試験的に入りつつあり、農学部としても研究・教育として取り組まなければならない。しかし学内の圃場は小さすぎて機械が動かせない。まず区画の整理を優先することになりました。

水路は後回しになりましたが、学内で農場の将来構想、圃場区画のあり方の議論に発展したことは、圃場実習教育の向上も期待できますので、支援活動の長い目での成果となるでしょう。

因みに、狭い圃場区画が SRI 栽培試験に影響しています。試験圃場は1区画 300m<sup>2</sup>程度と小さく、ここを小型耕運機でラオス流に代掻きすると、枕地ばかり深くなり、中央部と 5cm 以上も高低差ができました。この差が施肥効果、単位収量と病害発生に大きな影響を及ぼしています。図らずもの試験成果ですが。



学生による畦畔づくり



大区画圃場での田植え

区画整理工事は、ホイールトラクターの排土板で行われました。全体面積 1.2ha、従前 14 枚の区画を 3 枚に整理しました。高さ管理は農学部の先生とオペレーターの目測でした。余盛りの指示が効きすぎて、一部に 20~50 cmの高低差が出てしまいました。一般にラオスのオペレーターの腕は相当なものですが、畦畔で囲われた部を平坦にするには少し厳しかったようです。圃場作業で均平していきますが、もう一度修正作業をすると良くなるでしょう。それでも、今雨季作はほぼ万遍なく水が乗りましたので、生育ムラも昨年までと比べると大違いです。圃場実習の意欲も向上しつつあります。

## 2.2. 中耕除草器（田車）の試作

ラオスの慣行農法では、成苗を密植し常時湛水することにより雑草の生育を抑制しています。しかし最低限 1 回の除草が望ましいのですが、全て手作業であり、敬遠されています。SRI を含め多収を目指すために株間隔を広げ、間断かんがいを行う農法を導入すると除草をしっかりと行わなければなりません。しかし除草剤は高価で、雑草の種類やタイミング、周辺圃場への影響等十分な注意が必要です。



農薬や雑草に対する知識、使い方に関するノウハウ等は蓄積されていない現実を考えると、農家に奨められる状況にはありません。

そこで最初、インドネシア型試作モデルを使用しましたが、抜き取り効率が低く、かつ重くて、学生に相手にされませんでした。そこで筆者が新たに日本から取り寄せて試してみたところ使い勝手が良く、使ってもらえることがわかりました。輸入すると高価ですし、持続的ではありませんので、基金によりラオスで製作が可能な改良タイプの試作を地元の農機製作会社に委託しました。2 台試作しましたが、材質は鉄製で多少重くなり、浮力のバランスに未だ改良の余地はあるにしても、ほぼ実用的なものができました。価格は、日本のアルミ製 2 万円以上に比べ、1 万円で販売しています。生産量が増えれば、さらに価格は下がるでしょう。

慣行農法はランダム移植で、ある程度成長すると隙間が無くなり、歩くのも困難となります。田車除草はもちろん、生育のチェック、追肥・防除等の栽培管理もできません。列状移植は慣行農法改善の一步であり、田車の普及はささやかですが、インパクトとなるでしょう。

日本製（奥）、ラオス製（中央 2 台）、インドネシア型（手前） ラオス製による除草作業

## 2.3 ポンプ施設送水可撓管接続位置変更用チェーンホイストの導入

農学部には専用の灌漑ポンプ施設があり、メコン川の支流から揚水しています。メンテナンスが容易なポンツーン方式ですが、河川水位の変動に合わせて、送水管とポンプを接続する位置を変更しなければなりません。位置替え作業は、ゴム可撓管を川に入って人力で支えなければならず、大変危険な重作業となっています。



メコン川の取水施設



送水管位置替え作業

そこで、チェーンホイストを購入し、重作業を軽減しました。従来と比べると、とても楽になったと、作業する学生は評価しています。

### （公社）土地改良測量設計技術協会へのポンプ設備補修工事支援の紹介

灌漑施設につきましては、そもそもポンプ設備の補修、不安定なポンプ施設の補修工事、オーバーホール、制御盤の交換、可撓管接続システムの改良が緊急の課題でした。経費も基金の支援とは比較にならない規模ですので、大地の会に支援をお願いできそうな団体等の紹介をお願いいたしました。その結果、極めて幸運にも（公社）土地改良測量設計技術協会が創立40周年記念事業として支援をお引き受けくださいました。支援総額430万円で工事は8月31日に完了しました。工事引き渡し式と記念セミナー「ラオスにおける土地改良とSRI」及び大地の会の支援活動の紹介が、ラオス大学で9月9日に開催されました。



### 支援活動にラオス大学から感謝状

この日（9月9日）、ラオス大学から大地の会及び事務局長に対し感謝状が贈られました。（在ラオス日本大使館藤澤友美書記官が代理授受）改めて、大地の会会員の皆様の暖かいご支援に感謝申し上げます。皆様のご支援をラオス農業教育の向上に生かしてまいります。

（この感謝状は、飽津様より送っていただき、事務局に保管しております。）

## No.49 ラオス「シェンクアン県における教育施設の衛生環境・教育環境整備事業」

(2012年、教室増設：IV JAPANと共同で実施)

### 助成金用途について

当会が2012年度より実施している「シェンクアン県における教育施設の衛生環境・教育環境整備事業」の一環として、ナムトム小学校の2教室増設の総建設費用1,155,700円の一部として貴会助成金を活用した。

#### 1. 助成対象

ラオス人民民主共和国シェンクアン県ペーク郡ナムトム村のナムトム小学校  
村人口686人、小学校就学年齢児童数133名

#### 2. 成果

2014年1月6日(月)に当会代表及びラオス事務所日本人職員が現地を訪問し、2教室完成を確認、寄贈式を行った。新教室用の児童用学習机やベンチ、教師用机・椅子は村が用意し、児童たちが学ぶ環境が整った。

#### 3. 事業実施前後の変化

村民がお金を出し合って建設した旧校舎は資金不足のため3教室しか建設できず、壁はレンガがむき出しで、土間のままの床と、屋根のトタン材も錆びて雨漏りが酷い状態であった。隙間が入りこんでほこりも多く、衛生的にも良いとはいえない状況であった。また、児童用学習机やベンチも老朽化し数も不足していた。

当会は2012年度支援として旧校舎の修繕および児童用学習机やベンチを寄贈した。旧校舎の修繕により学習環境が大幅に改善され、出席率もあがり、学校運営・授業がスムーズに進められるようになったが、依然として133人の全就学児童数に対して教室数が不足していた。

2013年度は貴会支援をうけ2教室を増設。教室増設により、これまで村外の学校で学ばざるを得なかった5年生児童15名が、ナムトム小学校にて学ぶことができるようになった。

#### 4. 現地受益者の声

別添のナムトム村ブアラー・ピーラヴォン氏(ダーヴォン前村長より交代)、ナムトム小学校ラムドゥアン校長、ナムトム小学校児童ブアヴォンさんの手紙を参照。

#### 5. 写真及びメディア掲載実績

報告書作成日時：2014年1月30日 特定非営利活動法人 国際協力NGO・IV-JAPAN





新築の教室の様子



校の旧舎と、定時で児童の拍手

現地英字新聞 Vientiane Times 掲載

4 | Home news | Tuesday January 14, 2014



The renovated Namtom primary school and its additional two classrooms.

## Japanese NGO builds new classrooms in Xieng Khuang

Times Reporters

Two newly built classrooms for the Namtom primary school in Namtom village of Paek district, Xieng Khuang province were handed over to local authorities recently. The school also benefitted from an extensive renovation programme made necessary by considerable decay developing in its walls and ceilings.

The Namtom primary school

classroom construction and renovation was supported by the international NGO IV-Japan, Saitama International Association (SIA) and Partners of Agri for Green Earth 2050 (PAGE) in cooperation with the villager's own contributions.

Previously the school's three classrooms were not large enough to accommodate the 133 pupils, therefore 15 of the 5th grade students had to go to schools in different villages. IV-Japan supported the

renovation of the old school building with funds from SIA in 2012 and added two new classrooms with funds coming from SIA and PAGE in 2013.

IV-Japan has been contributing to improving the livelihoods and education of Lao people through vocational training in Laos since 1994 and was awarded Labour Order Class-2 by the Lao government in 2012. It will soon celebrate the 20th anniversary of its history of contributions to Laos.

【ナムトム小学校校長・ラムドゥアン・ピンマソン先生】 私は当校の教師と生徒全員を代表し、IV-JAPAN、日本の国民の皆様、特に ms.Sachiko が現在・そして将来の子供たちの勉学のため、私たちに 2014 年の新年のプレゼントとして教室増室の資金援助を下さったことに、非常に感謝しています。来賓の方がおっしゃられたように、今回の資金援助は IV-JAPAN のナムトム小学校に対する 2 度目のとても貴重な援助です。これは、シェンクワン県教育スポーツ課、及び郡教育 スポーツ課が小学校の実情を見て、私たちの小学校のためにドナーを探してくれたおかげでもあります。今までこの村にこのように綺麗でりっぱな学校があったことはありませんでした。私、教師、そして生徒全員からこの度の IV-JAPAN 及び Ms.Sachiko の援助に対し、心から感謝の意を申し上げます。私たちは学校を大切に、長期間使えるように大事に使います。

## No.50 ラオス国立大学農学部附属農場区画整理・かんがい農業教育支援活動

ラオス国ビエンチャン（2013年継続案件：管理責任者：飽津博史）

### 1. 活動概要

- (1) 対象グループ： ラオス国立大学農学部
- (2) プロジェクト名： 附属農場区画整理・灌漑農業教育支援プロジェクト
- (3) 支援金額： 300,000 円（ラオス通貨 24,093,000kip）
- (4) 活動期間： 2013年11月から2015年8月まで
- (5) 活動内容： (1) 区画整理 2.3 ha、圃場大区画化 0.9 ha、平坦度改善 1.4ha  
用水路移設 200m、灌漑用水取入口新設 3 か所、排水横断管渠新設 4 か所  
(2) 灌漑農業実習教育支援 1 式

ラオス政府は食料供給力確保及び農村生活の向上の視点から、農業とくに水稻栽培の振興を最も大きな政策目標の一つとしています。そのための農業分野人材育成分野ではラオス大学農学部は最も重要な機関ですが、教育設備等が未整備で十分な教育が行われていないのが現状です。灌漑農業技術を学ぶ最も重要な施設である附属農場の水田には、取水ゲートが無く、適切な水管理操作が困難で、区画も狭小で機械化栽培実習も行えないことから、整備は緊急な課題ですが、教育予算は極めて乏しい状況にあります。このため貴会の2012-13年のご支援により、圃場の一部1.4haの大区画化と用水取入れ口の整備及びラオスに適した除草機（田車）の試作を行うことができました。

今回、附属農場の水田3.5haのうち主要区域2.3haのうち残り0.9haの大区画化と用水路の再編等の圃場整備及び灌漑農業教育支援活動のため、再度ご支援をいただきました。

2014年は、4月の大雨により圃場が軟弱化し大区画工事は不可能でしたが、誘蛾灯による害虫モニター教育支援・展示を行いました。2015年は延期していた区画整理2.3ha（うち1.4haは高低差修正のみ）、用水路新設200m等の圃場整備を行いました。整備後の大区画圃場では、国立農林業研究所と連携し、田植え機を利用した種籾生産に取り組んでいます。田植え機の利用は附属農場では初めての試みであり、慣行の手植え法との比較を含めた教育実習及び近傍農家への展示を行っています。

### 活動報告

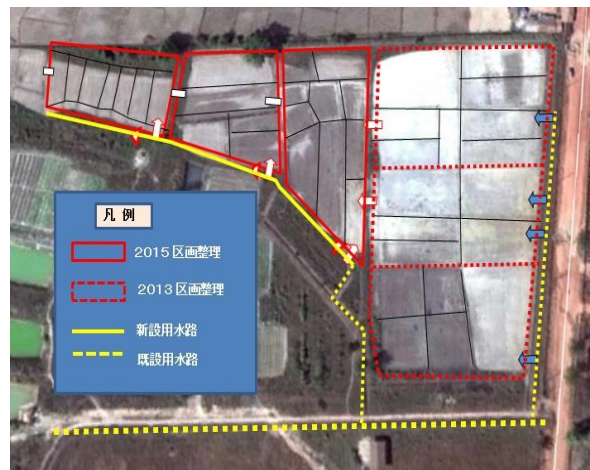
#### 1. はじめに

今回は附属農場水田の主要区域の区画整理を仕上げるとともに、整備された圃場において、灌漑農業実習教育と近傍農民への展示に対する支援活動を行いました。2014年は、誘蛾灯による害虫モニターを支援しました（昨年度中間報告済）。2015年は大雨により1年延期した水田の大区画化圃場整備と灌漑農業教育の支援活動を行いました。

#### 2. ラオスにおける農業技術普及状況

ラオスでは各県の農林局の下に、郡毎に農林業事務所が設置され、灌漑係や普及係等の職員が、農家に対し技術指導を行っている。しかしながら職員の知識・経験・指導能力に限界が見られます。そもそもの職員配置数も少なく、農業協同組合等の政府以外の営農技術指導組織も存在しないことから、農民の要望に対応できる技術普及が行われていない状況にある。

普及職員は通常、農業短大や灌漑学校を卒業しているが、農業技術に対する体系的な基礎知識が不足している。そのため、技術プロジェクトによるトレーニングや海外等も含めた派遣研修を受講する機会はあるが、学んだ知識が消化不良となっている。また、現場で活かす機会も少なく、経験の蓄積が乏しい。この大きな原因の一つとして農業教育の不足があげられる。



区画整理され機械移植された圃場      区画整理図（赤枠が区画整理後の区画）

### 3. ラオスにおける農業教育

ラオスにおける農業教育システムは、3年制の農業短大と5年制（制度が変更され現在は4年制に移行中）の大学農学部からなっている。農業短大はラオス北部、中南部及び南部の3地域に1校ずつ設置されている。灌漑分野は灌漑学校で別途行われている。大学教育は、農学部は首都ビンエンチャンのラオス国立大学（以下、ラオス大学）農学部その他、前記3地域の総合大学に夫々設置されている。なお、土地改良の圃場に直結する圃場整備と水管理分野は農学部の栽培学の範疇であるが、水工学分野は工学部水資源工学科が担っている。ラオス大学農学部は1995年に総合大学に統合されるまでは高等農業教育機関として機能しており30年以上の歴史がある。しかし、他の3大学は2003~9年に設置されたばかりで、人材供給の歴史は浅い。

### 4. 灌漑農業教育改善の動き

このような現状に対し、農学部長と副学部長の危機感は大きく、水稲栽培教育の改善を最重点課題の一つとしていた。そのための環境整備の一環として、灌漑ポンプの補修、農場の圃場整備等の支援の要請があった。これら要請に対し、土地改良測量設計技術協会様による灌漑ポンプ設備の改良オーバーホールの支援及び貴会による2回にわたる農場整備のご支援をいただきました。

その結果、後述します農場実習教育の改革が始まりました。

### 5. 2015年の圃場整備活動と成果

活動は、まず機械化稲作に必要な区画の検討とそれに伴う用水路の再配置、取水口位置、排水管渠の配置等の区画整理設計を教師自らで行うことから始まった。その結果、農場の主要水田2.4haが、従前41枚、平均0.06haから、整備後6枚、平均0.4haと、区画は7倍に拡大し、トラクターが効率的に稼働できる規模となった。また、用水路200mを付け替え、より目に付き易く、効率的な管理を行える配置に再編された。耕作道は、実習農場という性格から、全水田にトラクターが直接アクセスできる配置と幅員が確保された。区画整理工事は、前回の工事では最高60cmもの田面差ができてしまった反省から、今回は水準測量による施工管理を試みた。それでも最大30cmの田面差が残ってしまった。しかしながら、教師達にとっては圃場整備は初めての経験であり、機械化圃場レイアウト、平坦度の重要性と施工管理方法、及び水管理の視点からの用水路配置、等を学ぶことができた。いままで品種改良、土壤肥料、病害虫という知識はあったが、灌漑農業のための土壌管理、水管理と圃場基盤に関する意識と知識が乏しかったことから、圃場整備は良い実習となった。





整地工事



平坦度施工管理

圃場基盤が概ね整ったことから、農学部長の強いリーダーシップのもとに、2015年雨期作から、教育・研究目的を明確にした農場実習・実験が開始された。今作期は、国立農林業研究所と連携し、機械移植による種籾生産に取り組んでいる。自家消費米と生産と異なり、きめ細かな栽培管理が必要とされるので、指導教官と学生たちにとって大きなチャレンジである。



農学部における初めての機械移植

機械移植は農学部にとって初めての試みであり、教師たちは苗づくりから移植作業まで初めての体系的に学習した。比較のために手植えも行っているが、学生たちが得意な伝統のランダム植えではなく正条植えを行っている。学生たちに何故正条植えが有利なのかを理解させる学習としている。

栽培実習は、併せて圃場整備と機械移植栽培は近傍農家に対しても展示普及を行われている。



人力移植



正条植え用の回転式田植定規の試作

## 6. まとめ

現場における貧弱な灌漑農業技術普及能力の大きな原因の一つである不十分な農業教育を改善するため、最高学府であるラオス国立大学農学部附属農場の圃場整備と実習教育の支援を行った。その結果、教師たちは先ず圃場整備の必要性和設計施工方法を学んだ。さらに、農場実習プログラムの改善に取り組むことにより、教師及び学生は近代的な灌漑稲作技術を体系的に学び、指導する授業となりつつある。

農学部長ポーンカムペン博士から、この改善は本学のみならず、他大学と農業短大にも普及されることが期待出来るので、農民の要望に応えられる農業技術普及人材の育成に大きな貢献となるとして、皆様のご支援に対する感謝の言葉がありましたことをお伝えします。

### No.51 フィリピン レイテ島農村地域多目的センターの復旧 (河原専門家)

1. 対象国、地域：フィリピン国レイテ島、マッカーサー町ポブラシオン2バラングイ

2. 対象分野

農村地域多目的センター整備 (Day Care Center : 託児施設兼地域センター) の復旧

3. 主要対象グループとその活動概要、代表者:

(1) 主要対象グループ：ポブラシオン2バラングイ (集落)

(2) 代表者 Ms. Trina Burawis (バラングイ チェアーパーソン)

4. 協力機関及び協力者

(1) 協力機関：マッカーサー町役場 (修理工事設計および施工管理)

(2) 協力支援者：Mr. Nick Baoy. (バラングイ ボランティア アドバイザー、

現JICAフィリピン事務所契約コンサルタント)

(3) 在フィリピン農村開発分野日本側関係者 (予定)

5. プロジェクト地域の状況と協力の必要性

(1) プロジェクト地域の状況

フィリピンのレイテ島周辺地域には昨年11月に超スーパー級台風(ヨランダ)が襲来し、多数(6000人以上)の人命が失われている。更に社会インフラ施設や家屋の破壊、農作物や農業用施設そして灌漑施設などの農村インフラにも甚大な被害が発生し、これに対して日本を始め世界の援助機関による支援が精力的に展開が企画されており早急な復興が急がれている。

レイテ島ほかの地域における被害が最も甚大であり、今回のプロジェクトの対象地区であるポブラシオン2バラングイにあっても家屋の9割、75%以上の集落インフラが破壊されたと報告されている。(2) 協力の必要性

今回の対象施設である託児施設兼多目的センターは地域の就学前の5歳以下の幼児25人を預かり運営されてきたが、台風により施設の屋根が吹き飛ばされ、ドアや窓、壁や水道施設が破壊され、センターの運用が不可能な状況になっている。レイテ島は先の大戦における激戦地であるが、両国の国交の正常化以後フィリピンにおける日本と日本人に対する信頼度は強く今回の災害復旧に際しても日本国政府の迅速かつ適切な援助の展開により両国の信頼度は更に強くなっている。大規模インフラや地域復興がこうした政府レベルで中長期的な取り組みで展開されているなかで、これらの対象から取り残されているこうした施設に対する協力についての地域の住民の期待は強く本件プロジェクトを実施する意義は特に大である。

6. 活動実施により期待される効果

(1) 直接的な効果

本プロジェクトの実施により、ポブラシオン2集落の託児制度が強化され、幼児教育の充実により地区の人材開発が促進される。更にこうした幼児を抱えている母親の負担が軽減されるために婦人の就業機会の増加と社会進出が促進され、地域経済の活性化されひいては地域社会の安定と周辺地域への波及効果の拡大も期待される。

(2) 間接的な効果

本プロジェクト地域には2002年に、隣の集落において当会による多目的センターが建設され、今回の台風被害にも耐えてバランガイ事務所兼保健施設として利用されている。今回の協力により地域とその関係者に、当会に対する親しみ、信頼感が更に醸成されるものと期待している。

7. プロジェクトへの相手側の参加・熱意（リーダーや組織の存在、労働力の有無）

当該地域では12年前に実施した隣の集落に対する当会の協力事業を実際に見ており今回の事業の実施に対する期待は非常に強い。これは総事業費15万ペソに対して工事に必要な労務費の負担と完成後の施設の維持管理に必要な経費については地域が責任を持って対応することが約束されており事業実施面さらに施設完成後の運営管理面における障害はない。

(参考)

1. 総工事費	15万ペソ
材料費	12万ペソ（本会による支援対象）
労務費	3万ペソ（バランガイで負担）

2. 完成後の運営維持管理：

総額1万8000ペソ（電気代：6000Peso, 保母手当12,000Peso）バランガイが負担する。

8. プロジェクトのモニタリング方法、容易さ（距離）、管理責任者

プロジェクトサイトは、レイテ州の州都であるタクロバン市から日比友好道路で50Kmの地点に位置しておりアクセスは容易である。

プロジェクト着手から完了まではマッカーサー町役場の建設担当技師が責任を持って担当するので問題はない。（ちなみに申請者（竹内）がフィリピンで在職した2002年に実施した類似プロジェクト（多目的集会センター）においても同じ町役場において施行しており建設する上での支障はない。一方起工式や工事完了などの工事施行における重要な節目にあっては現地調査及び竣工検査などに対しては必要に応じてMr. Nick Vaoy氏あるいはフィリピンの農業農村開発分野で活躍している日本人専門家やJICAの現地調査団ほかによる協力が期待できる。



## プロジェクトの実施状況

- 1) 屋根及び天井の復旧、2) ドア及び窓、3) 電気施設（天井扇風機）配線復旧
- 4) 給水施設の復旧：水道管（80 m）、バルブ及び給水栓、5) トイレの修理、6) 塗装 1式



## 感謝状（バランガイから水と大地と緑の会あて）



**No.52**モン族生徒の就学・生活支援及び将来の自立に向けた技術習得（タイ国パヤオ県ポン郡クンクアン ウイッタコム中高校）

### 1.事業の目的

対象とする中高校に養魚およびキノコ栽培の施設を整備し、寄宿生活するモン族の生徒に、その管理を行わせることにより、収穫したきのこや魚を寄宿舎の給食として活用するとともに外部へも販売する。これにより、モン族生徒の就学・生活支援を行うとともに将来の自立に向けた養魚、キノコ栽培の技術の習得を図る。

### 2.事業の必要性

クンクアン、ウイッタコム中高校は、タイ北部パヤオ県（チェンライ県に隣接）ポン郡に位置し、401名の生徒が学ぶ比中高校である。この地域の産業は、農業が中心であり、ほとんどの生徒は農業の経験を有している。生徒はタイ族とモン族にに分かれており、約20%は山岳民族のモン族であり、遠隔地からきているモン族の生徒は校内の寄宿舎で生活し、勉強を続けている。モン族の寄宿生活を送る生徒に対して学校は、無料の食事と寄宿舎を提供しているものの、予算も少なく、十分な食事が提供できていない。また、野菜など食事の材料の多くは校内で栽培している状況である。モン族の生徒の多くは、非常に真面目で、優秀であり、農業に興味を持っており、将来は村に帰って、両親の手助けをしたいと望んでいる。しかし、政府やその他機関からの支援はなく、学校としてはモン族の生徒に十分な食事や学習支援を行いたいと考えている。

### 3.事業の内容

事業は、12 x 6mのケージ養殖（6）および45m<sup>2</sup>のキノコ栽培施設を整備する。施設の運営は、30名のモン族の学生が担当する。

#### ケージ養殖

-パヤオ県の漁業事務所職員から淡水魚やケージ養殖について学ぶ

-ケージ養殖の池（既存）の整備を行う、-養殖機材の提供、-養殖稚魚の放流、-モン族の生徒による生育、維持管理

#### キノコ栽培

-農業教員よりキノコ栽培について講義

-キノコ栽培場の整備、資機材の提供、-キノコ栽培施設の整備、-キノコ栽培とモン族の生徒による生育、維持管理

#### 野菜栽培

-農業教員より野菜栽培について講義

-野菜栽培圃場の準備、種および資機材の提供、-野菜栽培圃場の整備、-野菜栽培とモン族の生徒による生育、維持管理

### 4.事業の運営・監理

#### 4.1 施設整備後

##### （1）ケージ養殖

施設整備後の運営管理は、校内に寄宿するモン族の生徒の責任となる。餌やりから販売までを担当。

##### （2）キノコ栽培

施設整備後の運営管理は、校内に寄宿するモン族の生徒の責任となる。生育から販売までを担当。

##### （3）野菜栽培

施設整備後の運営管理は、校内に寄宿するモン族の生徒の責任となる。生育から販売までを担当。

#### 4.2 収入資金の使途

養殖魚、キノコ、野菜の販売で得られた資金は以下の様に活用される。

-50%：生徒の食事用、-30%：生徒の奨学金、-20%：学校の運営、次年度事業

#### 5.事業の費用

全費用（施設の整備のための労働力の提供は除く）は 80,000THB で、内訳は以下の通りである。

-ケージのための鉄枠：10,000 THB、-ケージ：6,000 THB、-稚魚：6,000 THB、-餌：15,000 THB、-キノコ栽培施設整備資材：8,000 THB、-キノコ：20,000 THB、-野菜種：3,000THB、-野菜栽培圃場整備および小規模貯水タンク（5個）

#### 6.事業の担当責任者

- 1] Mr. Jinda Tathip ,：クンクアン ウイッタコム中高校教頭
- 2] Miss. Pattaya Intanade：クンクアン ウイッタコム中高校教員
- 3] Mr. Monthon Khamwangchan：クンクアン ウイッタコム中高校農業教員
- 4] Mr. Khemmarat Wanlangka：クンクアン ウイッタコム中高校教員

#### 7.位置図（北部タイの位地図）と生徒



寄宿舎とモン族の生徒



寄宿舎とモン族の生徒



支援金引き渡し



養魚池整備前



いけすの制作



いけすの運搬



いけすの設置



完工式典（魚の放流）



魚の放流

PAGE2050 と表示



整備したキノコ小屋



収穫したキノコ

### 9.事業の実施とその後の状況

対象とする中高校に養魚およびキノコ栽培の施設を整備し、寄宿生活するモン族の生徒に、その管理

を行わせる。収穫したきのこや魚を寄宿舎の給食として活用するとともに外部へも販売する。これにより、モン族生徒の就学・生活支援を行うとともに将来の自立に向けた養魚、キノコ栽培の技術の習得を図るという目的で2014年度に支援を実施した



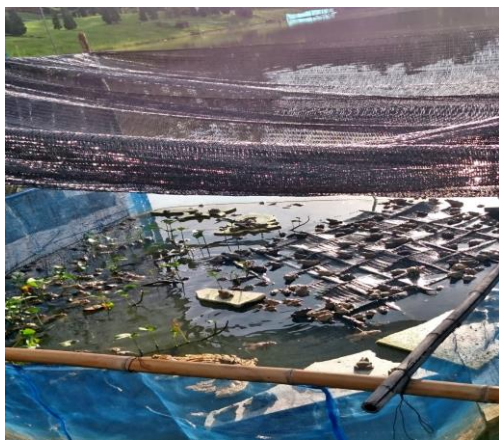
養殖ゲージと餌やりの状況



収穫したテラピア



収穫したナマズ



カエルの養殖ゲージ



被害を受けた養殖ゲージ

養魚用のゲージは学校内で2014年度に自作し、2015年の夏より、稚魚の放流とカエルの養殖を開始した。2016年の1月までに順調に生育した魚は、一部を寄宿舎のモン族の生徒の給食で利用し、残りは販売した。全体でゲージを6つ製作し、その内2つにナマズを、2つにテラピアを、残りの2つをカエルの養殖とした。ナマズは、100kgほどの収穫があり、70バーツ/kgで販売、約7,000バーツの収入となった。テラピアは、モン族の生徒の給食に使用した(約300匹)。また、カエルについては、約120kgの収穫となり、その内40kgを給食用に、80kgを80バーツ/kgで販売し、約6,400バーツの収入となった。その結果、収入として13,400バーツあり、7,000バーツを今年度の稚魚およびカエルの購入にあて、6,400バーツが残金として残っている。(これについては、教員の委員会で用途を決定する予定)。その後、5月に嵐がこの地域を襲い、大風のため養魚施設も被害を受けたとのことで、昨年度の活動の残金(6,400バーツ)を利用して、修復するとの報告を受けています。



## No.53 農村地域多目的センター整備（託児所兼保健所兼地域避難センター）の復旧

フィリピン国ビサヤ地域イロイロ州パナイ島(竹内氏->河原氏)

### 1. プロジェクトの目標

本プロジェクトは、被災した農村多目的センターの1階部分(40.5M<sup>2</sup>)の託児施設兼保健所、(兼緊急時避難センター)を復旧し、幼児教育の向上と地域保健サービスの向上、そして災害時の避難施設の確保による住民福祉の向上を図るもので、特に託児施設の整備により、農村婦人の育児負担が軽減され、これによる地域経済の活性化と住民福祉サービスを拡充させることを目標としている。

### 2. プロジェクトの主な活動

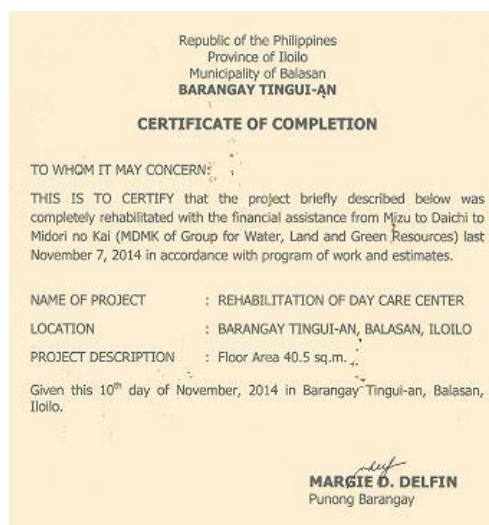
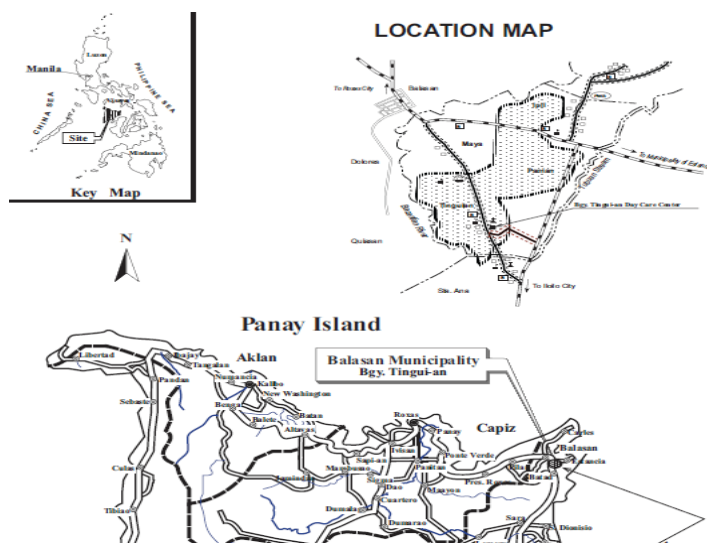
本件プロジェクトの事業内容は以下のとおりである。

- 1) 柱及び梁の補強・修理
- 2) 壁、ドア及び窓の修理
- 3) 教育用施設(勉強机、キャビネット、黒板)の修理・補充
- 4) 給水施設の復旧  
水道管、バルブ及び給水栓、
- 5) トイレの修理
- 6) 電気設備、塗装および表示板の設置 1式

当会は資材費を提供、修復のための労務費、完成後の維持管理費はバランガイが負担。

### 3.位置図と事業完了公告

イロイロ州パナイ島バランサン町テイングイアンバランガイ(集落)



「水と大地と緑の会の支援によって修復された」と書かれたデイケアセンター・多目的ホール・健康ステーションの入口



修復中の施設



関係者の記念写真



地域の住民と子供たち



修復されたセンターの内部



センターの外観



センター内部の児童

## No.54 BebakhaVillage 灌漑用モデルため池プロジェクト (2015 年度支援)

対象国・地域：ブータン王国、Wangduephodrang 県 Daga 郡 Bebakha 村

担当：JICA シニア海外ボランティア 園城典雄 氏

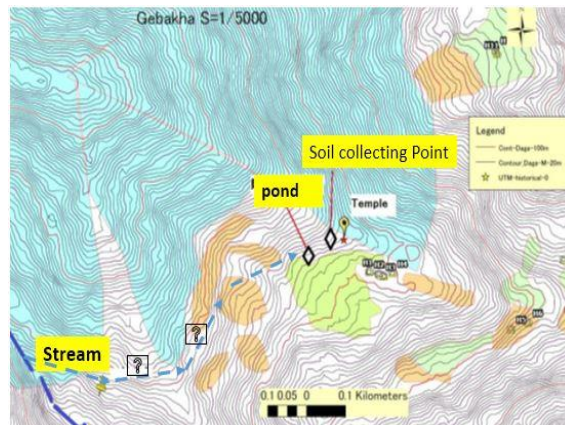
### 1. 支援プロジェクト概要

Bebakha 村は 23 軒の農家があり、水田の他トウモロコシやジャガイモ等各種野菜も栽培しているが、主要作物は稲作であるが、灌漑用水確保に苦労している。Bebakha 村は、国道より農道を車で約 30 分（雨期は道路がしばしば降雨災害で通行不能となる）。標高約 1700m であるが、気温は高く付近の植物は熱帯性の植物がみられる。耕作地の土はブータンの他の地区にくらべて比較的大きな石が少なく耕作に適している。よって各種の農産物の栽培が可能であると判断できる。しかし、乾期（10 月から 3 月頃）の農業用水の確保に苦労をしている。このため、灌漑用の小型の貯水池を計画したい要望書が管轄地区の事務所を通じて農業省の本省に提出された。このため農業省の担当技術者が現地を訪問し候補地の測量を実施している。農業省より上記の情報を入手し、7 月 24 日現地調査を実施した。

ブータンの農村は、灌漑用水の確保に苦労している地域は多い。そのため、ブータン農業省では最近灌漑用の貯水池（コンクリート製）を 2 か所建設したが、貯水池建設の設計施工の経験が少なく、いずれも貯水機能に支障をきたしている。このため、日本のため池技術による貯水池の建設をブータンに支援する必要性は高い。ブータンには、古くから建築用として丈夫な土壁を作る技術がある。そのため、この技術を応用し、日本のため池の建設技術を組み合わせれば、ブータン独自のため池建設が可能となる。



ため池建設予定地



位置図

このため、乾期に水を貯水し農業用水を補強する（今回は規模が小さいため、その効果は限定される）。農民が主体となってため池を建設する。農業省技術者及び農民に対し、今回の建設の経験と技術を生かして将来さらに多くのため池をつくる方向性を持った技術支援を行う。

### 2. プロジェクトの主な活動

ブータンはこれまで、土を利用して、灌漑用池をつくる発想がなかった。そこでブータンに最初の日本のため池技術を応用した小さな池を造り、将来その数を増やす事ができれば、乾期や干ばつ期の農村の水の利用環境を大きく変える事ができる。そこで農地の上部に、貯水池を作り乾期に水供給の補助する企画を考えた。今回計画の貯水池は、規模は小さくその効果は限定されるが、主目的は、日本のため池技術をブータンの農村に導入する事である。また、今回の事業は、地元の農民が主体の事業であるという事である。従来の援助は、ほとんど地元民が積極参加するものではなく、海外から与えられた物を受け取るという、受動的なものが多かったが、今回の事業は農民が主体で取り組まなければ成功しないものである。援助資金も多くはないので、農民が労力を提供し、主要材料の多くを自分たちが調達しそれを自分達で、完成させなければならない。

ブータン農業省の紹介で 7 月 24 日に現地を訪問し、地区政府の担当者と農民に説明をした。その後農民の意向を聞き、かれらが、小さな貯水池でもその完成を希望していること、及び彼らの協力する意思を確認する事ができた。また工事対象地区の選定と土取場の調査、及び土のサンプルを採取する事ができた。工事は稲作作業の終了を待って(10 月予定)開始する事も決定した。

### 3.活動実施により期待される効果

- ① 乾期の農地への用水供給の補助 (貯水量が少なく限定的)
- ② 土を使用した、ため池技術をブータンに最初に紹介できる。
- ③ 指導したため池築造技術を応用し、ブータン政府及び農民自身が自分達で池を作る事ができる可能性を示すこと。

プロジェクトの管理体制

管理責任者：Kelzang Tenzin (Engineering Division /Department of Agriculture)

地区農業担当者：Dendrapg Wangchuk 村代表者：Thinley Namgyel



村人



集会



村の様子



村の様子



池底の軟弱地盤はセメント安定処理



工事の状況



人力による壁面の締め固め



完工式 (2015/12/19)



完工式にて (園城氏)



式典後 (県都プナカから高僧が出席)

#### 園城氏の事業実施後のコメント

- わずか4日間の現場指導で、村人が本当に指導した池を完成できるのか不安であったが、12月19日に水の貯水式典の招待を受けた。
- 完成した池は私の2回目の変更案に基づいて施工されているが、垂直コア部分の前面のランダム層が施工されていなかった。しかし、村人はこれで今年は水を貯水し、池の様子みる予定であると述べた。
- この状態で貯水された池の問題点を農業省と村に提出し、その対策法を示し帰国した。
- 村の担当者からは、2016年1月現在、池は水が貯水された状況であるとの連絡があった。今回のプロジェクトは今後多くの問題点を解決する必要があるが、ブータンで最初の日本の技術を応用した、ため池を完成させた事に意義がある。

## No.55 カンボジア国王立農業大学ため池普及技術検討

(信州大学 浜野 充、Lor Lytour カンボジア王立農業大学農業工学部 学部長)

(1) **事業期間**：2017年5月-2018年3月：申請が2017年3月のため、2016年度事業。

### (2) **背景**：

カンボジアの農村の多くの地域では、水田稲作が中心の農業で営まれているが、降雨量が少なく不安定であり、農業用水の安定した供給の確保が望まれる。これまで国際協力を中心とした支援により大規模な灌漑整備が試みられてきた。その国土のほとんどが平坦な地形であるカンボジアでは、重力灌漑の開発が技術的に難しいうえ、伝統的な社会がポルポト時代に破壊され、水利や栽培に関する共同作業の経験が乏しい。それらの理由から、大規模な施設と組織運営を要する灌漑開発は、むしろ適さない地域が多いと考えられ、国際協力による灌漑開発事例も他地域へ波及することが困難である。

カンボジアの多くの農村地域においては、家族もしくはごく限られた近隣の農家同士の協力によって整備・管理が可能であり、長距離水路を要せず、技術的开发が容易な小規模なため池灌漑が有効であると考えられる。カンボジアの農村の一部では、家の周辺にため池が作られるケースがあり、生活用水、灌漑、養魚、家畜飼育と様々な目的で水が利用されている。しかしながら、効率的な集水や排水、適切な深度や法面の設計、土壌の性質による浸透性を考慮した基礎地盤構成や法面保護など、技術的な配慮がなされないまま、ただ掘られている状態の池がほとんどである。その結果、効率的な集水が難しく、降雨や池周辺の水の流入によって土壌浸食が発生し、法面が崩れ、土がたまりにくい状態になり、持続的な水の利用が困難になる池が多いと考えられる。

さらに、このような状況の中、カンボジアでは、ため池およびため池を利用した灌漑開発や整備・管理・普及のための人材育成が行われていないのが現状である。

### (3) **事業概要**

インドシナ半島の中でも、特に乾燥の激しいカンボジアでは、主食である稲作を中心に天水に頼った農業が営まれており、灌漑率は2割と周辺国と比較して低い。気候変動により、頻繁に発生する干ばつにより不安定な農業生産を強いられている。カンボジアで唯一の4年生農業大学である王立農業大学では、農学部や農業工学部が農業生産の安定と生産性の改善を目指し、教育・研究を行っている。農業工学部は、カンボジアの農村における灌漑開発とそれに資する人材育成を重要な役割の一つとしているが、効果的で継続的な教育・研究が実施されている段階ではない。

そこで、実践的かつ継続的な教育・研究体制の構築を目指して、農業工学部の敷地内に小規模なため池と作物栽培のための灌漑・栽培試験圃場を整備し、ため池整備およびため池を活用した灌漑システム技術の開発と農村における整備・管理および技術普及の人材育成を行うことを目指して、同学部の試験圃場にため池および灌漑・栽培試験圃場整備を行い、実践的な教育・研究開発の体制を構築する。

### (4) **プロジェクトの主な活動**

王立農業大学農業工学部敷地内に、ため池と畑作・水田稲作圃場の整備およびため池から水を供給する小規模灌漑整備を行う。施設を整備することで、添付資料(同大学農業工学部長作成)のような教育・研究体制を構築する計画である。主な内容は以下の通り

- ① ため池の設計と施工(施工方法の違ったため池を2つ整備することで、その違いを比較し、より効率的持続的なため池貯留の方法を明らかにする。(浸透抑制および蒸発抑制方法の検討)
- ② ため池用水を利用した灌漑システムおよび稲作・畑作圃場の整備
- ③ ため池整備技術の開発のための教育・研究の実施

## (5) 活動の成果

王立農業大学農業工学部において、ため池や小規模灌漑整備のための実践的教育・研究モデルの構築を行い、農業土木・灌漑整備に関して、実践的に基礎的知識を習得するとともに、農村におけるため池・灌漑整備の課題解決を図るための研究・普及施設として活用可能となり、ため池整備、灌漑技術の教育、普及が期待できる。



大学構内に掘削した3箇所のため池。砂質土壌のためプラスチックシートを施用。(2017年8月訪問時)



池は、養魚および野菜栽培の水源として学生の研究・実習用に活用されている。(2018年8月訪問時。)

## No.56 カンボジア王国スバイリエン州ドンタイ村

生活用共同雨水ため池の整備（2017年度案件）（Water 耕房 佐藤俊明氏（北海道開発局 OB））

### （1）ドンタイ村の現状

ドンタイム村はカンボジアの首都プノンペンから東方へ190km離れ、ベトナムとの国境付近に位置している。村では222戸、695人の住人が暮らしている。小規模な水田で米を作りながら、男の人はベトナムへ建設関係の日雇い仕事、女の人はベトナムの縫製工場に働きに行っている。この村では以前、赤十字社などをお願いして何度か井戸を掘ったが150m掘っても水を得られず、水はすべて雨水に頼っている。飲料水は屋根に雨樋を渡し、水瓶等に貯めている。その他の生活用水（シャワー、洗濯、洗い物、トイレ用等）は家の近くに素掘りのため池を掘り貯めて、乾期はこの水を利用している。



飲み水は水瓶に貯める、一般的活用水は各戸の池に貯めて乾期をしのぐ 案件のため池（乾期の終盤）

### （2）今回の案件—共同雨水ため池

今回の共同雨水ため池整備の案件はドンタイ村のソット村長さんとため池利用の代表者タムさんにより要請された。現況のため池：大きさ：26m×31m、深さ：約2.5m（素掘り）、利用家族数：20戸、雨期6月～10月、乾期11月～5月（乾期はほとんど降雨がない）

問題点：①十数年前 NGO に掘ってもらったものであるが、だんだん浅くなってきており、容量が不足している。（2015年に見た時池は干上がって水が一滴もなかった。）②水牛に水が汚される。

この地域では小規模稲作とともに水牛を飼育して収入を得ている。水が豊富にある雨期や乾期の始めには、水牛は水たまりの水を飲み問題がないが、乾期も終盤に近づくと、飲める水がなくなり隙をみてため池に入り込み、その時糞尿をし水が汚される。村人はこの池の水で顔や体を洗い、洗い物や洗濯をする。牛にも水を与え汚されない工夫が必要である。

### （3）整備の方針

#### ①ため池容量の拡大

乾期の終盤にため池が干し上がっているのを見ると容量が不足している。現在の池は10数年前に掘ったものらしいが、村人の話では少しずつ浅くなっているとのことである。このため、池の深さを1.0m掘り下げて容量を拡大する。また、幅2.0mのステップをつけて集水域を広げる。

#### ②人用と水牛用の分離

水を汚されないように人用のため池には柵を設置して水牛が入れないようにするが、これに隣接して水牛の水飲み場を作る。スロープをつけて水牛も容易に水を飲めるようにする

#### ③安全対策

有刺鉄線による柵の設置は水牛の進入防止のためだけでなく、人の転落防止のための安全柵でも



ある。近くには小学校があり、子供たちがたくさんいる。また、現在は水を汲みに行くとき、斜面を降りて水を汲んでいるが、降りていなくても汲めるように手押しポンプを設置する。

#### ④施工

池の掘削は重機で行うため、ため池の水が無くなり、かつ雨期が始まる前に施工しないと、機械が池には入れなくなる。従って施工時期は五月下旬に行わなければならない。

柵の設置などの作業はこのため池を利用している村の人達と協働で行う。

### (3) 施工経過

本格的な雨期に入る前に、施工したいと考え5月25日にドンタイ村にいったが、今年は雨期が早く、既に雨期に入っていた。施工の可否を心配したが何とかやれそうであった。

建設業者との施工費の交渉は、現場を見ながら見積もりをしてもらうと予定以上の額となった。一度はOKしたが納得がいらず精算方式とすることで合意した。バックホーを搬入し、掘削を始めようとしたが、今度は搬入したバックホーが故障した。先が思いやられる出だしであった。古い機械なのでうまく修理出来るか心配したが二日後には稼働した。掘削が始まると貯留池の西側の地権者からクレームがついた。その地権者は金持ちで村人とも折り合いが悪く、その地権者の土地を掘削して貯留地を拡大できないことがわかった。従って、ため池の西側は不施工とした。掘削土の搬出には地元の農家のトラクターやトラックを使用することとした。



掘削が始まると村の人たちが見に集まってくる。



いよいよ掘削開始。



掘削完了間近。



8月完成した貯留池に雨水が貯まり始める

また、池の上には架線があり、また、傾斜面での掘削作業もあるなど注意を要した。また、雨期に入っていたため、時折来る降雨の後にはトラックがスリップし難儀した。

総掘削土量は計画図から約1120m<sup>3</sup>と推定される。これはトラックの運搬台数445台からの推定土量ともほぼ合致する。5月30日に開始した貯留地の掘削は5日間かかり、6月3日に事故もなく無事に終わらせることができた。このプロジェクトでは村の人たちがトラックやトラクターによる掘削土の運搬回数をカウントするなど協力してくれた。

コンクリート柵柱や有刺鉄線、セメントなどの資材は15km位離れた町まで調達に行かねばならない。コンクリート柵柱の立て込み、有刺鉄線張りは村の人たちでは無理なので作業員を依頼した。手押しポンプを設置することで池の下まで水を汲みに行かなくてすむし、フェンスの設置で子供が池に転落する心配や水牛に水を汚されなくてすむようになる。



掘削を終えて村の人たちと



八月現地まで八丁先生に来ていただく



銘板を設置



(6) おわりに

掘削の途中で村長さんが車椅子に乗りながら現場を見に来てくれた。村長さんは昨年の2月脳梗塞で倒れ、治療するも現在半身不随で車椅子の生活である。このプロジェクトは3年前に村長さんが元気な時、依頼されたものである。その時2件依頼され一つは村の小学校の水の確保である。小学校の方を優先させたため、今回やっとこの貯留池の整備に着手できた。今回、この雨水貯留池を整備して池の水を利用している村の人達に喜んでもらえ、また、村長さんとの約束も果たせて嬉しい。

2017年度に実施したため池整備（北海道：佐藤氏）について、その後の状況について佐藤氏より以下の報告がありました。



2017年8月ため池の状況（まだ濁りがある）

2018年)の11月水が十分貯まり、濁りもとれていた。



## No.57 ブータン王国：既存飲料用水給水システム改良プロジェクト(2017年度案件)

申請者 ADCA 技術参与 園城典雄 申請者 ブータン在留邦人 石上陽子

### I. 支援プロジェクト概要

1. 対象国・地域：ブータン王国、Mongar 県 Mongar 郡 Takchu 村

2. 主要対象グループとその活動概要、

代表者：Takchu 村 Gamdongla 水源利用者代表：ツェワン（現地管理責任者\*11 項 (Page3) 参照)  
Takchu 村でこの Gamdongla 水源を利用している農家は 6 軒あり、とうもろこしが主な作物でありジャガイモ、唐辛子、大根等各種野菜も栽培しているが、飲料、灌漑用水確保に苦勞している。このため今回のプロジェクトは既存飲料用水システムを改良し、①水質の向上、②水供給の安定化および③水供給量の増加を目的とする事業を段階施工方式で事業を実施する。

3. 協力期間： 2017 年 12 月—2018 年 10 月

4. プロジェクト地域の状況と協力の必要性：

#### 4-1. 地域の状況

Takchu 村は、国道から農道を車で約 45 分（舗装されていない道路のため雨期はさらに時間を要する）。標高約 2100 m であるが、雨量年平均 900mm(資料-1 参照) である。しかし、特に水量の減る乾期（10 月から 3 月頃）の飲料水の確保には苦勞をしている。

#### 5-2. 水源と集水地点の状況及び貯水タンク

a) 飲料水の集水地点の状況（写真-1-6 参照）

現在の飲料用の水源は周辺の密生した樹林の表面水の集水と地下の湧水のある小さな窪地で集水を行っている。この水源の取水可能水量は一年中枯れることはないが、乾期は非常に少ない取水量となっている。

b) 貯水タンク（写真-2 参照）

貯水タンクはモルタル石積み製で集水地点（集水池）から、パイプでタンクに水を引いている。タンクの容量は約 1.5m\*1.5m\*2.0m である。このタンク取水が下記の理由で現在正常に機能していない。

b-1：水源の水が家畜の移動により乱されて水質が汚濁される。

b-2：集水池の水が落葉や水源の汚濁により濁り、そこから貯水タンクまでのパイプが容易に閉塞し、円滑な貯水が困難となっている。

b-3：水源から末端農家までが 1 本のパイプで直列に結ばれているため、上流農家が多の水を消費すると末端まで必要な水が供給できない。

#### 4-2. 協力の必要性

ブータンの農村は、飲料水の確保に苦勞している地域は多い。また、ブータン農村の飲料水の供給システムは、多くがこのような状況下であり、同様な問題を抱えている。そのため、今回はこれらの問題を解決するため、以下に述べる村の農民が主体となって考えた解決策を PAGE 資金で支援する事は、他の農村にもよい影響を与え、この地域の農村環境の改善につながるものと考え

5. プロジェクトの目標：（段階施工方式の採用）

現状の飲料用水供給システムを農民が主体となり、最初に全体計画を立て、予算に応じて各年度毎に段階的に各種の問題点を解決していくプロジェクト方式を採用する。PAGE の予算はその第一段階に使用し、このプロジェクトが成功すれば、村人はこの実績を基に再び村長を通じて、県に対し

てさらなる支援を要請できる可能性が出てくると期待している。

このため、この事業の目的は5-2-1に述べた項目のうち、本年度は家畜侵入防止柵と、集水池の整備と、新規水槽の基礎部分を重点にした支援を行うこととする。（資料-5 参照）

**6. 活動実施により期待される効果：**

- a) 乾期の農家への飲料用水供給の安定供給（当面は貯水量が少なく限定的であるが将来は増加）
- b) プロジェクト実施に際し、長期計画の元での段階施工技術をブータンに実例で紹介できる。
- c) 少額の援助であっても農民の参加によるプロジェクトが農村環境を改善できる可能性を示すことができる。

**7. プロジェクトへの相手側の参加・熱意（リーダーや組織の存在、労働力等提供の有無）：**

このプロジェクトには村の責任者の同意と指導性が必要である。

責任者はまず村のなかで話会を実施し、関係者の要望書をまとめている。（資料-2 参照）

また村の上層部と交渉し、今後このプロジェクトへの支援を要請している。

7. に述べたように、このプロジェクトは村のリーダーが存在し、労働力の提供はすべて村が提供する。また、主要材料(除くセメント等の購入材料)を村が提供をする事になっている。

**10. 必要経費の使用概略〈最大30万円まで〉：**

本事業の労務費の大部分は農民参加で実施されるが、購入資材（防護柵、セメント、パイプ等の調達費、作業機械費、付帯構造物用資材費）等に必要経費を使用する。

**11. プロジェクトモニタリングの方法、容易さ(距離)、管理責任者：**

**a) 管理体制： 管理責任者（申請者） 園城典雄（日本）**

管理責任者（申請者）：石上陽子（ブータン）在ブータン在留邦人（ペルキル私立学校美術教師）

現地管理責任者：A: **プンツォ・ワンディ**（石上の夫）Takchu 村出身の仏画師

B: **ツェワン** 上記の父親 Takchu 村 **Gamdongla** 水源利用者代表責任者

**b) 事業の進捗管理の方法**

改修工事はまず設計・施工法については申請者園城が申請者石上を通じアドバイスを与え、村の現地管理責任者 A: **プンツォ・ワンディ** 及び B: **ツェワン** を通じて材料調達と村人の自主参加による工事を実施する。完成後は来年秋の園城の現地訪問により事業確認及び完成写真を入手する。

問題発生時の対処及び工事管理は園城が現地管理責任者と石上を通じ常時施工を管理指導する。

**<添付資料>**

事業対象地区

給水システム(緑色ラインが現況、黄色ラインが改善案)



写真一 プロジェクト予定地



写真二 プロジェクト予定地



写真-3 集水地点



(上手く集水・排水できず溢れ出している水が小川になっている様子)



写真-4 既存タンク (外観)



写真-5 既存タンク (上部)



写真-7 Takchu 村住民



写真-8 申請者、現場管理責任者  
(プンツォ・ワンデイ、園城典雄、石上陽子)

今年度完成項目は以下の通りである。

1) フェンス (写真10~11参照)



2) 受水タンク (写真12~15参照)



3) メインタンク (写真 16~19 参照)



事業概要と経過の項で述べたとおり、当初予定していなかったメインタンクの工事を完成させたため、メインタンクを加えると当初予算をオーバーしたが、村出身者等が主にメインタンクの費用の寄付援助を行ったため当初計画ではメインタンク基礎のみの範囲の予算が、タンク全体を完成させる事ができた。(園城氏報告より)

## No.58 カンボジアタケオ州 July 1 高校支援

(信州大学 浜野 充、Lor Lytour カンボジア王立農業大学農業工学部 学部長)

(1) 事業期間：2019年1月～(2018年度案件)

(2) **背景**：No.55の事業で、カンボジア王立大学に支援を行い、ため池の整備と灌漑・栽培試験圃場整備が完了したことを受けて、ため池の技術および乾季の営農技術の普及を目的として、タケオ州バティ地区の7月第一高校 (July 1 Highschool) にため池を整備し、大学の教員・学生の支援のもと学校農園を運営し、大学の持つため池を活用した乾季営農の普及を行う。

### ため池の掘削



ため池の掘削状況(掘削土を盛り土として活用し、雨季にも圃場が水浸しないよう整備)



高校生と教員・学生の活動の説明



八丁が現地を訪問 (2019年3月)



生徒も参加して漏水防止のためプラスチックシートの敷設





太陽光発電・ポンプシステムの訓練



圃場の整備と植え付け

整備したため池（堀）の整備状況



点滴灌漑システム整備



関係者による視察(2020年9月)

学校関係者



## No.59 タイ国チェンマイ郡 Pa Chee Wang Daeng Witthaya School の学校農園・加工施設

の整備（チェンマイ大学 奥井氏、学校校長）（2018年度案件、2019年3月～）

1. 背景：この学校は、チェンマイ市の北約50kmに位置し、270名の生徒（小・中学校）がいる。この半数が、タイヤイと呼ばれるミャンマーからの難民・労働者の子弟である。学校にある農園を活用し、米、野菜の栽培、魚、豚の飼育などを行い、収穫物を給食として利用するほか、加工・販売しその収入をタイヤイの子弟の就学費用の一部に当てている。このため、学校農園での有機米の栽培と精米・加工施設の整備に支援の要請があった。



タイヤイの人たちの住居



タイヤイの生徒

この地域は、第2次世界大戦の時に、チェンマイにいた日本軍の部隊がメーホンソンを經由してビルマに通じる道路を建設した出発点で、当時多くのタイ住民やシャン族が道路建設に動員された。また、学校の近くにはタイの主要ダムであるメーガットダムがある。

### 事業活動の状況

支援は有機米の栽培、加工施設の整備、精米機、パッケージングの機械に対して行われた。コメの生産には父兄が参画して支援、また加工場の整備では生徒の参画によって実施された。

#### （1）父兄も参加した有機米の田植え（6月）





## (2) 加工小屋の整備



整備前の加工小屋

## (3) 加工機械の支援



整備した加工施設



支援した精米機



有機米のパッキング機械



販売用のパッケージ完成



有機栽培の香り米 (ライスベリー)



収穫



販売

## 販売 No.60 ブータン王国 Takchu 村既存飲料用給水システム改良プロジェクト支援事業（2）

（ADCA 園城氏、元ブータン在留邦人 石上陽子氏）2019・4～2020・3）

Takchu 村の事業は、2018 年及び 2019 年の 2 回に PAGE 資金支援を使用させていただき、無事完成させることができました。同村はブータンの奥地にあり、国や、海外支援の恩恵を受けることが少ない地域ですが、今回の支援により、村人達も強力なリーダーのもと自主的に参加し事業を完成させました。これにより村の飲料水給水システムが大幅に改善いたしました。完成式典も自分達で行い、PAGE 援助に大変感謝しております。

これまでの PAGE 及び八丁様のご支援に感謝申し上げます。（園城氏 完了報告書より）



新規水源受水溝の整備



給水パイプの施設



村人の共同作業



完成した水場-3



完成した水場-7

## No.61 ネパール・ゴバン地区学校支援

(信州大学 根本和洋、浜野 充) (2020年3月～コロナのための活動休を経て2023年3月完了)

### 1. 対象国・地域:

対象国：ネパール 地域：ムスタング郡コバン地区

### 2. 対象分野:

農業実習圃場の整備：パイプ型ビニルハウスの設置

### 3. 活動概要

ネパールは国土面積約 15 万 km<sup>2</sup>ながら亜熱帯から高山帯までの気候帯と標高差を有することから、多様な農業環境のもとで食料生産がなされ、人々は生活している。2700 万の国民のうち約 25%の人口が貧困層であり、全人口のうち 81%が農村部に居住し、73%が農業を営んでいる。また、GDP の 33%を農林水産業が占めている (World Bank, 2018) ネパールの国土のうち、山間 (丘陵、山岳) 地域は国土の 77%を占め、国民の 50%が生活しているが (GON, 2016), その貧困率は 31%におよぶ (GON, 2011)。中山間地帯及び山岳地帯の農村部では、現金収入を得るための雇用が極めて少ないことから、中等教育を終えた若者たちは雇用を求めてカトマンズ等の都市部や海外に流出し、農業の担い手不足による農地の荒廃も進み始めている。2014 年にネパール政府は農村地域での農業教育・人材育成を図るため、全国の中等教育 (日本の高校にあたる) に技術教育を普及させる政策を決定し、なかでも 99 校に、農業課程の設置を決め導入が始まった。

しかしながら、標高 2600m の山間地域では、気温が低いことにより栽培作物が限られ、栽培可能期間も 4 月～10 月と短く圃場での実習期間も限られる。栽培期間を少しでも長く確保し、育苗を含めた栽培期間の拡大や、栽培作物の範囲を広げることで、栽培実習をより充実させるとともに、さらには地域の食料生産・換金作物栽培の可能性を広げるために、ビニルハウスの設置が求められている。また、本農業高校では、標高の低い (気温がより高い) 地域で栽培される作物や品種をあえて栽培することで、栽培学や遺伝育種学に関する講義の内容を効果的に連動させより実践的・体系的に学ばせようとする指導方法の試みも始まっている。



これまで、写真のようなビニルハウスの設置は試みられてきたが、安価な地域の資材 (石) を利用したため、ハウス内のスペースが確保できず作業性が非常に悪く、栽培可能な品目も限られている。そこで、本申請事業では、ビニルハウス内の広さと高さが確保できる、パイプ式ビニルハウスの設置を行い、より効果的な教育と、栽培期間や栽培作物の可能性を拡大することを目的とする。

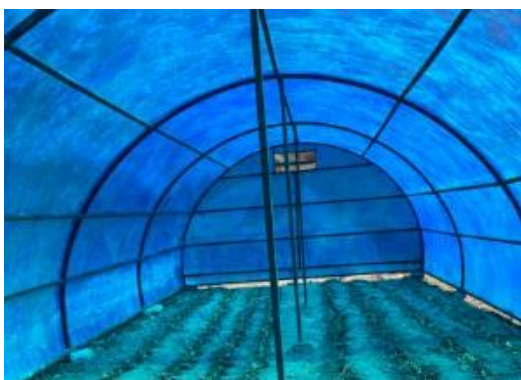
### 5. プロジェクトの主な活動

- (1) パイプ型ビニルハウスの設置方法に関する実習
- (2) ビニルハウス内で育苗を行い、露地圃場での作物体系や栽培期間を拡大する。
- (3) ビニルハウスでの栽培と露地栽培の環境の作物の生育・栽培比較実習・試験。
- (4) 栽培試験の記録を基に比較分析を行い、それらの結果を講義と連動させる。

## 6. 事業実施

コバン農業高校は、西側に聳え立つ標高 8167m のダウラギリ峰というヒマラヤの麓にある小さな学校です。高校自体は標高 2550m くらいのところにあり、冷涼な気候の中、ソバやオオムギ、トウモロコシの他、リンゴが栽培されています。この地域では、冬期においてもできるだけ野菜等を栽培することが課題となっており、ビニルハウス等の施設の設置が望まれていました。そのような中、貴 NPO 法人よりご支援を賜りましたことは、当校および我々のプロジェクトにとって、とてもありがたいことでした。ご支援をいただきましたから、だいぶ時間が過ぎてしまいましたが、2023 年 3 月に現地、コバン農業高校を 4 年ぶりに訪問しましたので、ビニルハウス設置状況についてご報告させていただきます。ご支援いただきました 30 万円は 263,455 ルピーに両替され、ビニルハウスの設置に使わせていただきました。このハウスの金額は 30 万円を少し超えるくらいの額になるのですが、不足分は、村の予算を補填してもらい完成することができました。3 月時点で、添付書類 2 にありますような青色のビニルハウスが設置されておりました(添付書類 2:写真 3、4)。日本では見ない色ですが、透明だと夏場に温度が上がり過ぎてしまうため、青色になっていると説明を受けました。設置業者に勧められたとも言っていましたが、同様のハウスはネパール国内の他所にも設置されているようです。ハウスの材質ですが、FRP(繊維強化プラスチック)でできています。強度および耐久性が非常に高く、ビニルハウスのように数年ごとに劣化したビニルを交換しなくて済むというメリットがあります。ハウスのサイズは、間口約 4.5m、奥行約 9m あり、念願の大型ハウスを設置することができました。以上、簡単ではございますが、報告とさせていただきます。重ねて、この度はご支援賜りありがとうございました。

設置されたビニルハウスの写真



## 過去の関係ニュース/巻頭言など

### 一書き損じ葉書の収集で100万円を超える寄付（農業土木事業協会30周年記念事業）

2000年に設立30周年を迎えられた、（社）農業土木事業協会の30周年事業の一環として、書き損じ葉書の収集にご協力を頂き、108万円あまりのご寄付をいただきました。また、チャリティゴルフも実施していただき、12万円近くのご寄付もいただきました。御協力いただいた方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



記念式典で目録を受け取る事務局の八丁委員

### 設立5年目を迎えて（2003）

途上国における農村地域の人々の自立や人造りに対する支援を目的として1998年11月に設立された「水と大地と緑の会」も、会員の皆様方や関係各位のご協力、ご支援により4年目の活動を終え、5年目に入っております。これまでの4年間に9カ国、19件（570万円）の支援事業を展開する事ができました。皆様のご支援、ほんとうにありがとうございました。

また、設立当初より会長として、本会の発展のためにご尽力いただいた池田 實氏が会の顧問として就任され、新しい会長として池田 文雄氏をお迎えいたしましたので、お知らせいたします。

### 設立7年目の活動に向けて（2005）

途上国における農村地域の人々の自立や人造りに対する支援を目的として1998年11月に設立された「水と大地と緑の会」も、会員の皆様方や関係各位のご協力、ご支援により6年目の活動を終え、7年目に入っております。これまでの6年間に東南アジアを中心に12カ国、30件（900万円）の支援事業を展開する事ができました。皆様のご支援、ほんとうにありがとうございました（これまでの活動の経緯等が、海外情報誌ARDEC2005年3月号：第32号に紹介されています）。



WFP 主催の Fight Hunger : Walk the World（2007年5月21日）

飢餓撲滅キャンペーンのための世界同時刻でのウォーク開始。奈良では、近畿大学農学部の学生が中心となって実施し約70人が参加、7万円の募金が集まった。

1. 2006年度には、農業土木事業協会様より、書き損じハガキの寄付として4,215円(2007年1月)を、また恒例となったチャリティゴルフの実施(2006年10月)により、39,450円の寄付をいただきました。大変ありがとうございます。
2. 2004年度に当会が支援したカンボジア国ルセイサン小学校を土地改良建設協会国際部会のメンバーが、訪問。歓迎を受ける。(建設協会会誌：土地改良 257号 2007・4月および海外土地改良事業調査報告書より)

「...「水と大地と緑の会」が支援した、プラッカー村のルセイサン小学校を訪問し、少ない援助資金が学校の修復に生かされている状況を見た。子供たちによる歓迎会まで準備されていたのにはただただ驚くばかりであったが、国際協力の別の一面を見ることができたと思っている。」(崎野団長報告より)

「今回の参加者の大半が資金参加をしているので、思わぬ出会いとなった。連絡が取れていたと見えて、近くの寺院で小学生の歓迎を受け、カンボジアの民謡踊りを披露してくれた。大変感激を受けた。」(山崎氏：報告書より)

「5教室からなる1棟の校舎は、ドア、窓の多くが破損や欠損の状態であったため「水と大地と緑の会」(JAPAN PAGE2050)からの助成事業により2004年にドアや窓の修復を行ったことがご縁で、今回の訪問となったものである。」(大友氏報告書より)



支援によって修復された窓



掲示された会のロゴ

(二つの写真とも土地改良建設協会報告書の写真より、引用させていただきました)

こうした、モニタリングで会の支援が継続的に効果を挙げていることが確認できることは、会員にとっても、大変うれしい事である。

## 2008年

1998年11月に設立された「水と大地と緑の会」は、10周年を迎えることになりました。最終目標の2050年までは、まだまだ、長い道のりであり、また途上国の現状は必ずしも大きく改善されているわけではありませんが、一步一步、前に向かって進んでいくことが、次のステップにつながると信じて、活動を継続してまいりたいと思います。

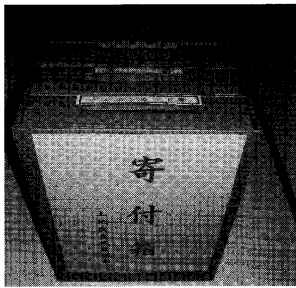
### 1. 寄付箱の設置

社)土地改良建設協会様では、書き損じハガキ、切手、テレカなどの寄付集めのための寄付箱を設置頂き、本会の活動にご支援を頂いております。その一環として2007年度には、寄付として24,535円(2007年4月に現金に交換)を、寄付をいただきました。本当にありがとうございます。

－土地改良 No.262 (2008/7)より－



## 〈水と大地と緑の会の活動支援のお願い〉



(社) 土地改良建設協会は、NGO「水と大地と緑の会」の活動を支援しています。会員の皆様のご協力をお願いします。

協会の事務室に寄付箱が設置してありますので、①書き損じや返信用のハガキ（未使用のもの）、②切手（未使用のもの）、③テレホンカード、図書券など、④小銭などをご寄付いただければ幸いです。

また、「水と大地と緑の会」の活動につきましては、本誌254号(平成18年9月)で紹介がありましたが、今後とも適宜、本誌上でご報告をして参ります。(http://www1.newweb.ne.jp/wb/page2050/)

## 2. テレビでの活動紹介

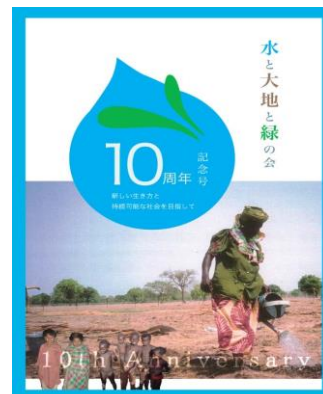
最初のご挨拶でも紹介しましたが、当会の活動がテレビ大阪の「ボランティア21」で紹介されました（放送 第463回 2008年2月15日（金）放送）。一応全国ネットの放送でありましたが、朝の時間帯の放送でもあり、メールで連絡の取れる会員には連絡を差し上げましたが、大半の方は見られておられないことと思います。事務局に、DVD（茨木委員が録画していただいたもの）が、ありますので、ご覧になりたい方は、事務局までご一報ください。



## 3. 10周年記念誌およびパンフレット発行



パンフレット



10周年記念誌

## 2010 変革の時代にこそ

今年の夏は猛暑が続き、これも気候変動や環境変動の始まりなのかもしれないと考えていました。日本でさえ、この猛暑に対応できず、熱中症で死者まで出る始末。ましてや途上国の貧しい人たちにとって、変動が起こった場合、その影響は日本の比ではないと思われます。また、現実にもそうした厳しい状況が多く地域で見られる。資源や食糧の問題は、ますます深刻さを増し、土地や水といった基本的資源の奪い合いも起こっています。一方で、飽食や大量廃棄は収まる傾向を見せず、便利さや豊かさを追い求める生活に大きな変化は見られません。

テレビなどで報道される深刻な環境劣化や飢餓、貧困には、気付かないふりをして、いままでどおりの生活を続けています。何やら、破滅に向かって盲目的に進んでいく人間の群れを想像してしまうのは悲観的すぎるのでしょうか。市場に出回っている商品も、より多くの利便性を追求するあまり、必要のない機能や製品が世の中に送り出されている半面、われわれが生きる上で本当に必要な、空気、水、食糧といったものの優先順位は、それほど高く設定されていないように思われます。

気候変動、干ばつ、洪水等への対応を含めて、途上国の多くの人たちは貧困状態にさらされ続けたため、回復力（Resilience）が低下してしまっており、変動が起こった場合の影響はより深刻なものとならざるを得ないと思われます。危機への対応のためには、日頃から回復力を高めるような地道な農業・農村開発を継続することが望まれるところであると思います。

## 2011 新たな価値観を

東北大震災が発生してから、既に5か月が過ぎました。未だ、復興もままならず、不自由な生活を送られている被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

この震災を機に、何かが変わると期待された方も多いかと思います。高度成長期やバブル期を経て、これまでのやり方で身についた贅肉や脂肪を削り落とし、本当に大切なもの、守らなければならないものが、何であったかを再確認するとともに、新たな価値観にもとづいて、日本社会は生まれ変わるのかなと言う期待感がありました。しかし、残念なことに、被災された地域や放射能汚染の影響を受けた地域を除いて、大半の人たちは、それまでどおりのやり方や暮らしに戻ったような気がしてなりません。変わると言うこと、変えると言うことは、並大抵のことではないと、実感した次第です。

一方で、放射能汚染の問題は、その影響の範囲が非常に広く、また食物連鎖・流通をとおした蓄積・拡散など、コントロールの難しさを感じさせてくれます。近代文明が都市に生活や生産の基盤を置き、それを支える食糧や電力の供給基地が農村地域と言った形で、成立しているわけですが、こうした都市中心の生活や生産のシステムを見直し、食糧も電力（エネルギー）も地産地消を基本とした形に作り変えることが、持続可能な社会へ向けた、新しい変化になっていくような気がしております。

## 2012 自分は変われるのか？

私ごとですが、今年の4月から5ヶ月間タイのチェンマイで、研究休暇を過ごしました。チェンマイはタイの古都で、自然が豊かで温泉があり、物価も安いので退職後の移住先としても人気で、日本人も比較的多く住んでいます。住んで感じたのは、タイ社会には王室、年寄りや先人への尊敬、両親や家族大切に思う心など、我々が忘れかけている古くからの伝統が色濃く残っているということです。目上の

人に会えば必ず拝みのポーズで挨拶をし、ソクラン等のお祭りがあれば、プレゼントを渡します。なにやら、昔の日本の様な気がして、かえって新鮮な感じを受けました。帰国してみると、自由や権利の主張ばかりが目につき、このまま何処へ向かおうとしているのか、不安を覚えたところです。

今年の6月にはリオ+20がブラジルで開催され、1992年の国連環境開発会議後の20年を総括するとともに、新しい方向づけが話し合われました。グリーンエコノミーという言葉が一時有名になりましたが、結局のところ、これまでの持続可能性の議論と大差ないという印象を受けました。一方で、1992年来、取り組んで来た貧困や環境の問題解決には一部を除いて、大きな改善は見られない状況です。先進国を中心とした経済危機の中で、各国の貧困や環境対策への資金供給が減少し、気候変動の枠組みも、生物多様性の確保に向けた取り組みも、大きな進展が見られません。新興国が世界の成長を支え、より大きな成長や豊かな暮らしを求めて、開発やエネルギー消費が増大しています。

環境を守り、貧困を改善していくことが必要であるとすると、そのために一定の資金や支援が流れる仕組みができなければ、特に途上国においては、そうした取り組みを継続的に続けていくことは、困難であると感じています。我々の会の取り組みも、そうした流れの一部であると考えております。「始めなければ、始まらない。」「変わらなければ、変えれない。」と考えつつ、今後も活動に取り組んでいきたいと考えておりますので、引き続きご支援の程、よろしくお願い致します。

## 2013 流されてはいけない

東北大震災から2年半近くになり、当時受けたショックや何とかしなければといった気持ちが、徐々に時間の中に埋もれていくような気がしてなりません。原発の問題にしても、徐々に再稼働や継続的な利用といった状況が生じつつあるような気もします。

本年5月には、横浜でTICAD IVが開催され、民間セクターとの協調や参画が大きな方向性として打ち出されていきました。世界レベルでのODAの減少(2010年比で6%の減、特にサブサハラアフリカやLLDCへの減少が大きい)が続く中で、民間活力を活用せざるを得ないという状況は理解できますが、民間の参画が全て良いというわけでは決してなく、民間の中にも利潤追求型と地域還元型などいろいろなタイプがあり、その選別や活用能力が十分整備されていない状況で、単に民間の参画が行われたとしても、地元にとって悪影響につながりかねないと考えます。

また先日、国連よりミレニアム開発目標の達成状況に関する報告が発表されました。その中で、極貧状態(extreme poverty: 1日1.25ドル以下で生活)にある人口の割合が1990年の47%から、2010年の22%に低下し、2015年の目標年までに、半減目標が達成されたとありました。一方で、未だ12億の人々が極貧状況にあり、4\$以下の人口割合は、60%に達しています。栄養失調人口は、1990-92年の23.2%から、2010-12年の14.9%へと低下しましたが、未だに8人に一人の割合で、栄養失調の状況にあるという事です。また、環境面では、CO2の排出が1990年比46%も増大する等、状況の悪化は深刻です。

## 2014 リスク管理

当会は、1999年に支援活動を開始しており、今年度は16年目になります。いろいろ問題を抱えながらも、多くの方々の暖かいご指導、ご支援を頂き、年を積み重ねることができたと感じております。ちなみに今年の世界銀行の「World Development Report 2014」はリスクの管理が主要なテーマとなっており、気候変動を含め多くのリスクにどう対応していけば良いのかと言う事が述べられています。特に、弱者や貧困層はこうしたリスクに対応する能力が不足しており、一旦干ばつや洪水、経済変動、紛争を含む外的なショックが発生すると、豊かな人々と比較して、受ける影響の深刻さは数倍、数十倍にもなると報告されています。レポートでは、リスクを他の人や組織(家族、地域社会、政府、NGO等)と

共有することで、リスク対応が可能になるとしており、我々の活動も、こうした弱者や貧困層のリスク対応の一環として少しでも貢献できて来たのではないかと考えています。

これまでの15年を振り返ってみて、最近では気候、経済、社会（紛争）の変動幅が大きくなり、病気（エボラ、エイズ、鳥インフルエンザ）の拡散も加わり、大変動期に入ったのではないかと感じます。日本でも大地震に続き大雨による土砂災害、さらには火山噴火も加わって、変動の振れ幅が大きく、不安定になっているように感じられます。

こうした不確実性や不安定さの拡大、変動の激しい社会の中であって、我々の活動が少しでも弱者や貧困層のリスク対応に役立つことを願ってやみません。2013年度の支援においてもフィリピンの台風被害復旧の支援を行い、2014年度でも同様の支援を行っています。ささやかな我々の活動が、希望の灯となることを信じつつ、今後とも皆様のご支援、よろしくお願い致します。また、会報の発行が大幅に遅れましたことを、この場を借りて、お詫び申し上げます。

## 2015 何かが変わり始めるか. . .

最近の大学生、特に男子学生は草食系と呼ばれるように素直で、おとなしく、教師や世の中に反発するような学生は少なくなった、と感じていました。こうした状況では、日本の未来は…、等と偉そうに上から目線でしゃべったこともありました。しかし、今回の安保法制に対するデモや反対運動を見るにつけ、最近の若者も捨てたもんじゃ無いと感じています。無関心なようにふるまっているけれど、本当は自分たちの未来に対しては、それなりに行動を開始するのではないかとおもいます。これまで、無関心にふるまい、何も行動に移してこなかったのは、比較的豊かな時代に生まれ、行動に移すための限界値を超える程の問題に直面してこなかったことが原因かもしれません。

今回のデモや反対運動への若者の参加を契機として、何かが大きく急に変わるとも思えません。しかし、一つの潮目になる可能性を持っているのではないのでしょうか。要は状況が如何に深刻で、自分たちの未来に大きく関係しているか、という事を自覚することが重要なのではないのでしょうか。世界の他の国の環境や貧困問題を、なかなか自分たちの未来の問題として捉えることは難しいものです。せめて我々のような小さな活動を継続することにより、未来に繋がる道が開けていけば良いなと感じるこの頃です。

## 2016 終活の時

終活という言葉が最近よく耳にするようになりました。3年ほど前初めて使われたとありますので、高齢化社会の状況を反映した言葉だなと、感じておりました。伊勢神宮の式年遷宮は20年に一度行われますが、これには建築や宝物の作成に係わる技術の伝承の意味もあるのではないかとわれています。今ある自然や環境、技術を次の世代へ繋いでいく、そういったことを意識せざるを得ない年頃になってまいりました。振り返ってみますと、当会も1999年に活動を開始して、18年目になります。会の名称にもありますが、2050年に貧困や飢餓のない社会を目指してきました。始めた当初は、多くの方々の支援に支えられて、支援地区数も多く順調に活動も進んできたように思います。しかし、この5年ほどは、支援の要請が上がってこなくなり、2015年度終了時点で、250万円余りの繰越を抱えております。また、当初から事務局を担当してきました私自身を含め、委員会のメンバーも高齢化が進み、新しい世代への受け渡しも、難しい状況となっております。

このため、委員会内部でも検討しましたが、2019年度(2020年3月)をもって、当会の活動を終了す

ることとしたいと考えております。幸い、繰越金もございますので、これを今後の活動資金とし、年間2地区程度の支援を計画したいと考えております。したがって、今後は会費の徴収は停止し、支援事業の募集および支援・広報活動を中心に活動を進めたいと考えております。これまで支援をいただいた会員の皆様には、なにとぞご理解をいただきますようお願いいたします。

## 2017 寄り添う

先日乗った飛行機の中で見た映画にインドの孤児の話があり、孤児院の様子が描かれていましたが、そうした現実はまだ多くの地域にあるんだと、再認識したところです。日本にいて日頃の生活に追われていると、特に途上国の状況にまで考えが及ばず、見過ごして、知らぬ振りをしている。途上国ばかりでなく、国内でも他人の状況に寄り添うことが難しくなってきたと、感じるこの頃です。昔は「義理と人情」の世界を描いた日本映画が多かったのですが、こうした価値観は最近かえりみられることが少なくなったのではないのでしょうか。親子関係も含めて、希薄な人間関係の中で、フェイスブックなどの SNS の中に、自分の居場所を求めてしまう。なにやら、悲しい気分させられるのは、私だけのことでしょうか。

この会も19年目になり、本来であれば20周年を祝いたところですが、事務局の力不足もあり、なかなか厳しい状況です。2016年、2017年とカンボジアのため池関連の支援があり、私も現地を見学させていただきましたが、まだまだ支援の必要な地域は多くあり、それらの課題に対して、残りの2年半、力を尽くしてまいりたいと思っております。

## 2018 移民

日本は労働力人口の不足に直面して、海外からの労働者の積極的な受け入れに門戸を開こうとしています（昨日、外国人受け入れ拡大法案が衆議院を通過しました）。実際、既にコンビニや飲食店では海外からの留学生が働いているのは日常になってきています。過去5年で増加した就労者の5人に一人は外国人労働者といわれており、日本では既に50人に一人（2%）が外国人労働者となっています。（東洋経済 2018年6月）。労働者が不足していると言われていた一方で、2017年の就業割合は全体で男性68.4%（15～64歳82.9%、65歳以上31.8%）、女性49.8%（15～64歳67.4%、65歳以上16.3%）と、まだまだ改善の余地は残されているように思われます。また、アジアに目を向けても、韓国、台湾は言うに及ばず、タイでも既に労働力不足で、ミャンマーを中心とした周辺国から多くの労働者が働いています。ベトナムでは、海外に向かう出稼ぎ労働者の奪い合い（韓国、台湾、ドイツなど）が始まっているとの報道も行われています。日本は、選択される国となれるのでしょうか？

一方で、ヨーロッパやアメリカでは移民への対応をめぐる国の内部で対立が生まれています。アメリカでは、中米からの移民キャラバンに対して、トランプ大統領は軍まで派遣してこうした流れを力で止めようとしています。こうした人の流れが起きる根本的な原因は、国と国の格差、富める者と貧しい者の拡大にあるのではないのでしょうか。それが是正されない限り、その流れをくい止めることは難しいかもしれません。移民を希望している大半の人たちは、本当は自分の国で働き、生活していくことが良いと考えているのではないかと思います。つまり、自国で失業や貧困がなくなり一定水準の生活ができるようになれば、なにも言葉も習慣も違った国に働きに出たり、移住する必要はなくなるし、受入国での摩擦や排斥といったリスクも避けることができると思われます。

つまり、途上国においては、海外への移民や出稼ぎをしなくても良いような、地域の発展や村づくりが求められており、当会も残り少ない活動期間で、少しでも貢献できればと考えております。

## 2019 SDG s

気候変動対策待ったなしの状況をスウェーデン 16 歳の生徒が国連で訴え、賛同した学生たちの学校ストライキが世界中で 400 万人にも達したとも言われています。その割には、相変わらず CO2 の排出は続いており、結果として雨は短時間の豪雨になり、台風やハリケーンは大型化して被害が拡大する一方です。今年の台風被害も集中豪雨被害もかってなかったほど大きなものでした。想定外、記録にないといった状況が頻繁に見られるようになったように感じています。こうした状況が続けば、被害復旧とその対策への国の予算は大きく膨らまざるを得ず、社会を豊にするための投資に回るお金がますます減ってしまいます。

我々はやはり豊かで快適な暮らしが放棄できず、絶滅に向かって突き進むしかないのでしょうか？国連で 2030 年を目標にした持続可能な開発目標 SDG s が公表されて 3 年余り、お題目は 17 もありますが、具体的に改善している課題はあるのでしょうか？

SDG s の進捗をひとつの指標で計る試みとして社会発展指標 (SPI : Social Progress Index) が使われていますが、2019 年版では世界の平均スコアが 61.8 から 64.5 へと改善されたものの、現在のペースで推移すると SDG s の目標が達成できるのは 2073 年と計算されています。このペースでは 2030 年に達成されるはずもなく、一部の目標が改善されたといって、自己満足に浸りつつ絶滅に向かってひた走っている状況が続くように思われます。ちなみに SPI のランキングで日本は世界 10 番で、先進国の中ではドイツに次いで目標達成に 2 番目に近い国となっています (日本の場合、大項目の基本的な必要性の充足 : Basic Human Needs, 幸せのための基礎 : Foundations of Wellbeing の二つは世界ランク 3 位ですが、機会 : Opportunity の項目が世界 20 位とかなり低くなっています。)。だからと言って満足していいはずもなく、我々それぞれが責任ある行動をとり、企業や政府、社会全体に働きかけていく必要があるように感じております。出来る範囲でよいと思うのですが、その一步が大きくなうねりになってくれば…。本会は、2018 年度でちょうど 20 年の活動が経過したこととなります。20 年も終わってみると、会を立ち上げた当時がつい最近のような気持ちにもなります。これまで 20 年間活動を支えていただき、本当にありがとうございました。ODA と比べれば、ほんの砂粒程度の活動ですが、これまで支援を受けた 60 地区の人たちにとっては、非常に大きな意義があったと信じつつ、残りの活動を続けて生きたいと思っております。

## 2020 コロナと脆弱性

皆様、コロナ籠りの中いかがお過ごしでしょうか？10 年前の東北大地震の時に「まさかこんなことが..」と、啞然としたものでしたが、今回のコロナも、「まさかこんなことになるとは…」と、予想をはるかに超える形でコントロールできない自然の力をまざまざと見せつけられた気がしております。「自分には起こらない、そんなことは起こらない」という、自己バイアスにどっぷり浸かってしまうと、大きな変化には脆弱なものかもしれません。巨大なネットワークで結びつけられたこれまでの世界は、物流に支えられた快適で効率の良い生活や経済活動を作り出してきましたが、コロナのような伝染病も一気に拡散し、効率のよさそのものが脆弱さに繋がるという一面も感じております。

2020 年に入りコロナの拡大で、海外活動の多くは休止や中止を余儀なくされ、本会の終活計画も延長をすることになりました。本来であれば、2019 年度の活動で終了し、2020 年度に最終報告を出して、会の終了という計画でしたが、最後の案件となったネパールでの支援活動が休止となったため、いかにせん中途半端な状態で継続という状況になっております。





いま、私たちにできること……



そして、一歩でも前へ！